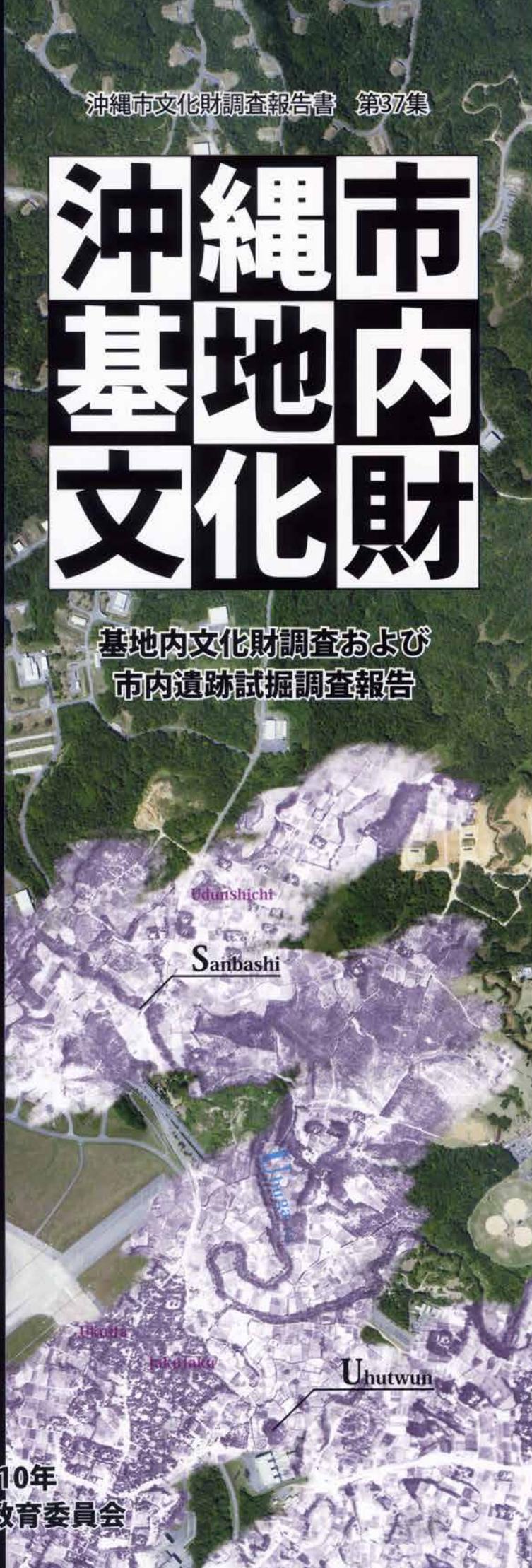


沖縄市 基地内 文化財

基地内文化財調査および
市内遺跡試掘調査報告



2010年
沖縄市教育委員会



沖縄市文化財調査報告書第37集 沖縄市基地内文化財 正誤表

ページ	位置	誤	正
2	7行	平成19(2005)年度	平成19(2007)年度
14	31行	『沖縄市史 第二巻 資料編』……	『沖縄市史 第二巻 資料編Ⅰ』……
14	32行	『沖縄市市政要覧 2005』	『沖縄市市勢要覧 2005』
17	13行	137~167 の文化財	137~169 の文化財
17	18行	266~273 の文化財	266~274 の文化財
22	写真2	石橋(番号337)	石橋(番号82)
23	写真16	古墓(番号506)	古墓(番号196)
23	写真17	古墓(番号506)内部	古墓(番号196)内部
52	右28行	⑩喜屋武親雲上の墓	喜屋武親雲上の墓
56	右8行	⑩渡し口があった。渡し口に……	⑩渡り口があった。渡り口に……
56	右8行	⑩ナンドゥルー	⑩ナンドゥルー
75	番号82	「イシゲムヤーバシ」と呼ばれる……	「イシグムヤーバシ」と呼ばれる……
87	25行	『沖縄市史 第二巻 資料編』……	『沖縄市史 第二巻 資料編Ⅰ』……
87	27行	沖縄市『沖縄市史 第八巻 資料編7・付録 近代期の新聞に見る歴史』沖縄市 1990年	沖縄市立郷土博物館『沖縄市史 第八巻 資料編7・付録 近代期の新聞に見る歴史』沖縄市教育委員会 1990年
93	7行	2006年1月15日~2月12日	2007年1月15日~2月12日
106	2行	『仲宗根貝塚 第一・第二次発掘調査概報』	『仲宗根貝塚 第一・二次発掘調査概報』
106	3行	『沖縄文化財調査報告(1956—1962年)』	『沖縄文化財調査報告(1956年—1962年)』

沖縄市文化財調査報告書 第37集

沖縄市基地内文化財

基地内文化財調査および市内遺跡試掘調査報告

2010年
沖縄市教育委員会

凡例

1. 本報告書は、平成17（2005）年度～21（2009）年度に文化庁および県の補助を受けて行なった基地内文化財調査と市内遺跡試掘調査の調査報告書である。本報告書Ⅱ章において、嘉手納飛行場および嘉手納弾薬庫地区の文化財について、文献資料、聞き取り調査、現地踏査によって得られた情報をもとに、地図上にその位置や名称を記載したほか、文章・図版を用いて現況や戦前の状況等について解説を附した。本報告書Ⅲ章では、平成17（2005）年度～平成19（2005）年度にかけて実施した市内遺跡試掘調査の報告を行なっている。
2. 本報告書では平面直角座標系第XV系（世界測地系）を用いている。
3. 本報告書は、嘉手納飛行場内の現地踏査の報告を含むが、これは米国空軍が2005年に行なった現地踏査報告「Kadena Airbase Cultural Resource Inventory（嘉手納基地内文化財一覧）」を参照して行なった調査であり、本報告書では今回の現地踏査の報告を基本としつつ、Kadena Airbase Cultural Resource Inventoryの資料からの情報も併せて掲載した。
4. 本報告書では、聞き取りによって得られた地名等の固有名詞について、以下の点に留意して記載した。
 - ・聞き取り調査時に漢字表記が明確に確認された場合は漢字で表記し、発音はルビによって示した。その際、方言語彙と判断される場合はカタカナ、日本語語彙と判断される場合はひらがなで記述した。
 - ・漢字表記が不明の場合は、方言語彙か日本語語彙かを問わず、カタカナで表記した。
5. 本報告書で使用した2,500分の1都市計画図は、1995年修正の沖縄市発行の地形図で、沖縄市が所有するものである。
6. 本報告書で地図図版の背景として使用した航空写真のうち、カラーのものは、2004年、2006年、2008年に撮影された航空写真のオルソ画像で、沖縄市が所有するものである。
7. 本報告書Ⅱ章（p15～p86）で地図図版の背景として使用した航空写真のうち、白黒のものは、1945年に米軍によって撮影された航空写真であり、沖縄県立公文書館によってネガ複製が取得され、デジタルデータ化が行なわれた。ネガ複製およびデジタル化画像は沖縄県立公文書館が所蔵するものであり、本報告書には、沖縄県立公文書館の承認を得て掲載した。
8. スケールがない写真や図表の縮尺はそれぞれ異なる。
9. 本報告書の記述において、墓の形式名称および用語は、名嘉真宜勝『沖縄の人生儀礼と墓』（沖縄文化社1999年）に従った。また、厨子甕の形式名称は、上江洲均『沖縄の暮らしと民具』（慶友社1982年）に従った。
10. 本報告書に掲載した集落のイメージ図は、調査資料をもとに、金城友美氏によって描かれたものである。
11. その他、特に断りのない写真、図版は沖縄市立郷土博物館が所蔵するものである。
12. 本報告書の執筆は以下の3名で担当した。

玉栄飛道（Ⅱ章1、Ⅲ章3） 繩田雅重（Ⅰ章1、Ⅲ章1～2） 八田夕香（Ⅰ章2～3、Ⅱ章2～3）
13. 調査によって得られた資料は沖縄市教育委員会にて保管している。

発刊によせて

本報告書は、平成17年度～21年度に文化庁と県の補助を受けて行なった市内遺跡試掘調査と基地内文化財調査の成果をまとめたものです。

当教育委員会では、文化財の保護と調査研究のために市内にある文化財の分布情報を収集していますが、基地内の文化財分布については十分に把握できておりません、今回の調査によって、これまで断片的であった基地内の文化財分布についての情報収集を行ないました。

対象とした地域は、嘉手納飛行場と嘉手納弾薬庫地区です。両地域は市域総面積の約3割を占める広大な基地で、民間地域とは全く異なる風景が広がっていますが、沖縄戦以前は農村地帯でした。今回の調査では、先史時代の遺物が採集され、近代の屋敷や墓、石橋などの文化財が多数残されているのも確認されました。これら現地踏査の成果とあわせて、文献で報告されている情報と、聞き取りによって得られた情報を紹介しています。

さらに、本報告書では、民間地域で実施された3件の試掘調査について、その成果を報告しております。

本報告書が、文化財の保護と調査研究を進めていく助けとして活用されていくよう願います。

最後になりましたが、今回の調査ならび本報告書の作成に際し、ご指導、ご協力をいただいた皆様に、深く感謝申し上げます。

平成22年3月

沖縄市教育委員会
教育長 真榮城玄昌

目次

I 序

1 調査の概要	6
2 調査協力者と調査日程	10
3 沖縄市概況	11

II 基地内文化財調査報告

1 嘉手納飛行場・嘉手納弾薬庫地区の文化財	
嘉手納飛行場内踏査概要	16
嘉手納飛行場・弾薬庫内の文化財位置	24
2 基地になる前のこと	
戦前と戦後	39
戦前の環境——川・道・ハル	41
宇久田・大工廻・八所	44
御殿敷	56
倉敷	62
青那志・森根・仲原	66
白川・シンジヤ	70
3 資料	
嘉手納飛行場内文化財一覧	72
収集した文献資料	87

III 市内遺跡試掘調査報告

	89
--	----

1 比屋根小学校建設に伴う試掘調査〔平成17(2005)年度〕	90
2 ゴミ焼却用新炉建設に伴う試掘調査〔平成18(2006)年度〕	93
3 建造物解体及びマンション建設に伴う 仲宗根貝塚試掘調査〔平成19(2007)年度〕	96

おわりに

	107
--	-----

I 章

序

1 調査の概要

調査の経緯

本報告書は平成17（2005）年度～21（2009）年度に文化庁と県の補助を受けて行なった市内遺跡試掘調査と基地内文化財調査の調査報告書である。

本報告書の中心となるものは、嘉手納飛行場・嘉手納弾薬庫地区の文化財調査である基地内文化財調査である。米軍基地内は、立ち入りの制限や接收後の開発等により、文化財の調査が進んでいない地域である。また近年、埋蔵文化財として近世、近代も対象となる場合があり、事前の文化財の把握が急務となっている。現在、本市において基地内の開発による埋蔵文化財の有無照会は、増加の傾向にある。しかし基地内では文化財の把握が進んでいないため、緊急な対応を迫られることが少なくない。広く文化財を周知し、その保護・保存を積極的に行なうため、これまでの既存資料収集と聞き取り調査、そして現地踏査等を行ない、現在把握しうる文化財をまとめるために本事業を行なった。既存資料収集は、嘉手納飛行場・嘉手納弾薬庫地区を範囲として、通年にわたって行ない、聞き取り調査は基地内の5集落（宇久田・大工廻・八所・御殿敷・倉敷）の出身者を話者として、2008年・2009年にわたって行なった。現地踏査については、嘉手納飛行場を範囲として、2008年・2009年にわたって行なった。

市内遺跡試掘調査では、開発等に伴い、平成17（2005）年度に比屋根小学校、平成18（2006）年度にゴミ焼却用新炉建設、平成19（2007）年度に仲宗根貝塚の試掘調査を行なった。本報告書の後半では、その成果報告を掲載している。

調査体制

平成17（2005）年度

事業主体 沖縄市教育委員会

事業責任者 沖縄市教育委員会 教育長 渡嘉敷直勝

　　〃 教育部長 津波古保

　　〃 教育次長 山城正博

事業主幹 沖縄市立郷土博物館 館長 豊里邦雄

　　〃 副館長 町田宗春

事業統括・担当者 〃 文化財係長 比嘉清和

事業事務 〃 学芸員 與那嶺江利子

事業担当者 〃 専門員 繩田雅重

　　沖縄市立中央公民館 副館長 宮城利旭（応援職員）

　　沖縄市立郷土博物館 作業員 登川一樹

磁気探査業務委託 株式会社 沖縄中央エンジニアリング

平成18（2006）年度

事業主体	沖縄市教育委員会		
事業責任者	沖縄市教育委員会	教育長	眞榮城玄昌（2006.7～）
	"	教育部長	津波古保
	"	教育次長	山城正博
事業主幹	沖縄市立郷土博物館	館長	比嘉良憲（2006.8～）
	"	副館長	町田宗春
事業統括	"	文化財係長	比嘉清和
事業担当者	"	学芸員	繩田雅重
磁気探査業務委託		有限会社	開成実業

平成19（2007）年度

事業主体	沖縄市教育委員会		
事業責任者	沖縄市教育委員会	教育長	眞榮城玄昌
	"	教育部長	津波古保
	"	教育次長	山城正博
事業主幹	沖縄市立郷土博物館	館長	比嘉良憲
	"	副館長	町田宗春
事業統括	"	文化財係長	比嘉清和
事業担当者	"	学芸員	繩田雅重
	"	専門員	玉榮飛道
	"	作業員	垣花紗知子
	"		當真彩
	"		比嘉和菜
事業協力者			浅川英美 池原翼 仲里基 長田亜矢 八田夕香 宮城昭美

平成20（2008）年度

事業主体	沖縄市教育委員会		
事業責任者	沖縄市教育委員会	教育長	眞榮城玄昌
	"	教育部長	山城正博
	"	教育次長	喜友名朝教
事業主幹	沖縄市立郷土博物館	館長	比嘉良憲
	"	副館長	町田宗春
事業統括	"	文化財係長	比嘉清和

事業担当者	沖縄市立郷土博物館	学芸員	繩田雅重
"		専門員	玉榮飛道
"		作業員	八田夕香
事業協力者			金城友美 仲里基 仲宗根福弥 宮城昭美 宮城光平

平成21（2009）年度

事業主体	沖縄市教育委員会		
事業責任者	沖縄市教育委員会	教育長	眞榮城玄昌
"		教育部長	糸数昌治
		教育次長	喜友名朝教
事業主幹	沖縄市立郷土博物館	館 長	宮城利旭
"		副館長	玉城譲
事業統括	"	文化財係長	比嘉清和
事業担当者	"	学芸員	繩田雅重
"		専門員	八田夕香
"		作業員	金城友美
事業協力者			伊禮樹 島田由利佳 玉榮飛道 玉城拓 宮城昭美

基地内文化財調査の方法

対象地域

嘉手納飛行場・嘉手納弾薬庫地区 (p11、図1参照)

調査方法

文献資料の収集、聞き取り調査を行ない、それを補う形で現地踏査を行なった。それらで得られた文化財情報を抽出し、地図上にプロットを行なった。

本報告書に記載した地図は大きく2つに分かれ、1つは2,500分の1都市計画図をベースとし、主に「Kadena Airbase Cultural Resource Inventory (嘉手納基地内文化財一覧)」(以後、KACRI)と現地踏査の情報を集約した。もう一つは、1945年米軍撮影の空中写真をベースとし、聞き取り調査の情報を記載している。なお、KACRI以外の資料収集で得られた情報については、双方の地図に反映させ、別で文献リストを附している。

資料収集

今回の調査に先立ち、これまで発刊・発表されている文化財に関する記述のある資料の収集を行なった。収集した資料のうちで中心となっているのは、上述のKACRIである。KACRIは資料収集の過程で、米空

軍より提供いただいたもので、米空軍が独自に行なった文化財調査の報告である。米空軍から委託をうけたアメリカの文化財調査会社によって、嘉手納飛行場内の広範囲にわたって現地踏査が実施されている。これらの情報のうち、沖縄市域にかかる部分を抽出して複製をとり、沖縄市立郷土博物館にて保管している。

それ以外の資料としては、嘉手納飛行場、嘉手納弾薬庫地区と、その隣接地域に関する、既刊の字誌や民俗調査報告、あるいは集落地図などの資料を収集している。これら文献の一覧は本報告書p87に記載している。

聞き取り調査

古い集落や立ち入りが困難と考えられる地域を中心に、現地で残りうる文化財（拝所や井泉、墓など）の聞き取りを中心に行なった。

対象とした集落は宇久田・大工廻・八所・倉敷・御殿敷の5集落である。

戦前、現在の嘉手納飛行場内にはたくさんの集落が存在していたが、その多くは屋取集落と呼ばれるもので、本地域における歴史はそう古くはない。そのなかで、宇久田・大工廻の2集落は、『琉球国由来記』（1713年）でその名が確認できる古い集落である（宇久田は「河陽村」と記載）。かつては多数の文化財があったと推察されるが、その集落域のほとんどが滑走路として開発された区域に含まれ、現地踏査が困難であるため、聞き取り調査によって文化財情報の把握に努めた。なお、八所は字大工廻に含まれる屋取集落で、当初は大工廻集落の一地域ととらえて調査を行なっていたが、集落の形成過程や生活実態を鑑みて、大工廻集落とは別の集落ととらえるのが妥当であると判断し、本報告書では別の集落として記載している。

倉敷・御殿敷はいわゆる屋取集落であり、集落域は現在は嘉手納弾薬庫となっている。嘉手納弾薬庫は立ち入り制限が厳しく、文献等の資料も乏しいため、聞き取り調査によって文化財の把握に努めた。

なお、聞き取り調査では、文化財そのものについての情報だけでなく、戦前の暮らしの様子も聞くことができた。それ自体が貴重な民俗資料であるため、可能な限り、本報告書に記載している。

現地踏査

KACRIの情報を土台とし、KACRIで調査されていない地域、または既に調査されているが、聞き取り調査の成果により新たな文化財が確認される可能性が高いところを中心に踏査を行なった。またKACRIに記載された文化財のうち、特に確認が必要と判断したものも踏査を行なった。いずれも、米空軍によって立ち入り許可された範囲での調査である。

ただし、資料収集・聞き取り調査で確認したすべての文化財を踏査できとはいえない。

2 調査協力者と調査日程

話者

嘉陽 静子さん（昭和11年生、倉敷）、K・Sさん（大正14年生、宇久田）、
金城 瞳盛さん（昭和9年生、倉敷）、金城 瞳哲さん（昭和16年生、倉敷）、
佐久本 兼幸さん（昭和8年生、大道※）、高里 盛克さん（昭和6年生、御殿敷）、
比嘉 良信さん（大正5年生、大工廻）、比嘉 富美子さん（大正6年生、大工廻）、
外間 元安さん（大正12年生、御殿敷）、屋嘉比 政栄さん（大正13年生、御殿敷）、
山内 盛健さん（昭和7年生、大道※）、山内 盛信さん（昭和10年生、八所）

※「大道」は、御殿敷集落に属する小集落である。大道は御殿敷集落の一部ではあるが、御殿敷の他の地域と距離があるため、大道地域についての詳細はこの地域で生活していた話者にお話を伺った。よって、本報告書Ⅱ章に掲載した戦前の御殿敷集落についてはおもに上記で御殿敷出身と記載した話者3名（高里さん、外間さん、屋嘉比さん）から聞き取った情報をもとに構成しているが、大道に関わる内容についてのみ、大道出身の話者2名（佐久本さん、山内さん）から聞き取った情報をもとに記述している部分がある。

その他、調査協力者

小嶺 常次さん（米国空軍第718施設中隊資産管理部環境保全課）

現地踏査日程（区画はp24～p33を参照）

2008年6月3日（区画3-D-7）	2009年2月17日（区画4-D・E-5）
2008年6月5日（区画3-C-4～5）	2009年2月19日（区画4-D・E-5）
2008年6月11日（区画2-C-1、区画3-B・C-2～3）	2009年2月25日（区画4-F-6、区画4-B・C-5～7、区画2-A-1）
2008年6月19日（区画1-A-3、区画3-A-8）	2009年3月4日（区画4-E・F-4～5）
2008年6月27日（区画3-A・B-5～6）	2009年3月10日（区画4-E・F-4～5）
2009年2月12日（区画3-C-4～5）	2009年8月10日（区画2-D-4～5、区画3-C-5、区画3-A-5）

聞き取り調査日程

2008年5月13日（宇久田：K・S）	2008年12月19日（大工廻：比嘉良信）
2008年5月20日（宇久田：K・S）	2009年1月7日（大工廻：比嘉富美子）
2008年7月23日（倉敷：金城瞳盛、金城瞳哲）	2009年1月21日（御殿敷：屋嘉比政栄）
2008年7月30日（倉敷：金城瞳哲）	2009年1月25日（大工廻：比嘉良信）
2008年8月21日（倉敷：嘉陽静子、金城瞳盛、金城瞳哲）	2009年2月2日（八所：山内盛信）
2008年8月22日（宇久田：K・S）	2009年2月4日（大工廻：比嘉富美子）
2008年10月10日（御殿敷：屋嘉比政栄）	2009年9月7日（御殿敷：高里盛克）
2008年10月21日（御殿敷：屋嘉比政栄）	2009年9月14日（御殿敷：高里盛克）
2008年10月30日（大道：佐久本兼幸、山内盛健）	2009年12月8日（御殿敷：高里盛克、外間元安）

3 沖縄市概況

概要

沖縄市は沖縄本島の中部に位置する市である。

人口は、2010年1月1日現在で134,652人で、沖縄県内の市町村では那覇市に次いで人口の多い自治体である。沖縄市は沖縄本島中部地域の中核都市として発展を遂げた地域であり、住宅地・商業地が発達して人口は過密である。

地形・地質を見ると、沖縄本島北部的な要素と南部的な要素の両方を見ることのできる地域である。

沖縄市域の北半分は、標高200m以下の丘陵地となっており、地質は、おもに国頭層群名護層と琉球層群国頭礫層が分布している。沖縄市域で見られるこれらの地質は、おおよそ沖縄市北部を分布の南限とし、恩納村・金武町付近まで広がっている。一方で、沖縄市域の南半分は、おむね標高100m以下の石灰岩段丘が広がっており、海岸には標高10m未満の低地が見られる。また、嘉手納飛行場や、泡瀬の埋立地などの造成地も見られる。地質は琉球層群琉球石灰岩と島尻層群泥岩・砂岩、そして沖積層が分布する。

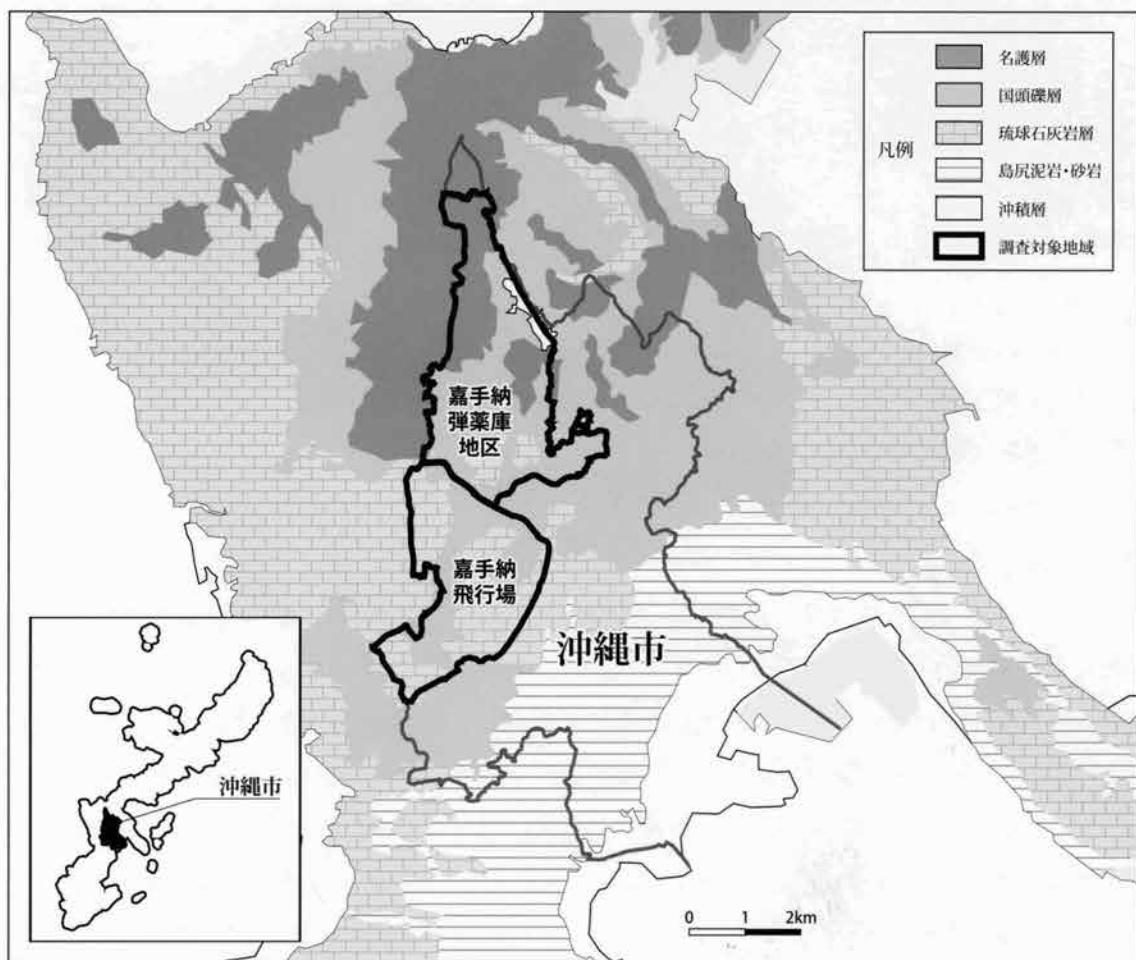


図1 沖縄市の位置と地形

このほかに沖縄市を特徴づける要素として、嘉手納空軍基地をはじめとする基地の存在がある。

沖縄市は、面積が49.0km²あり、沖縄本島にある市の中ではうるま市に次いで2番目の広さとなる。しかし、このうちの34.4%、16.89km²は米軍基地として使用されている（2007年3月末日現在）。また、自衛隊の演習場として使用されている地域0.69km²があり、米軍基地とあわせて約17.58km²、沖縄市の面積の35.8%が、基地として使用されていることになる。

なお、今回の文化財分布調査の対象とした地域は、米軍が軍事基地として使用している嘉手納飛行場と嘉手納弾薬庫地区のうち、沖縄市域に含まれる地域である。沖縄市域におけるこの両地域の面積はあわせて約15.4km²で、沖縄市域の米軍基地のうちの91.4%、市全体の面積に対しては31.5%を占める。



図2 沖縄市の基地

調査対象地域の歴史

今回の調査対象範囲となっている嘉手納飛行場と嘉手納弾薬庫地区は、1956年までの旧越來村、1956年～1974年までのコザ市の範囲に含まれる。以下に、旧越來村の歴史について、概略を述べる。

この地域に人が暮らし始めたもっとも古い時期の証拠となるのは、現在の沖縄市庁舎一帯で発見された室川貝塚や馬上原遺跡で、およそ5,000年前の土器が見つかっている。また、周辺には仲宗根貝塚や八重島貝塚など縄文時代相当期の遺跡がある。

その後の時代、すなわち2,000年前～1,000年前の貝塚時代後期については、上地長次原遺跡、インジングシク、那志原遺跡などで、散発的にこの時期の土器が採集されている。

12世紀頃になると、各地に有力者が現れ、拠点となるグスクを築いた。こうした拠点のひとつであったと考えられるのが越來グスクである。残念ながら、越來グスクは戦後、米軍施設の建設やコーラル採集によってほとんど破壊されたうえ、現在は住宅地となっており、その面影はない。しかし、『球陽』の記事において、第一尚氏第5代尚泰久王が越来王子として越来に封じられたことや、第二尚氏第2代の尚宣威王がわずかな在位のうちに王位を降り、越来に隠居していたという記事が取り上げられているのをはじめ、多くの文献に越来の名が残っており、当時の越来グスクの重要性がうかがえる。

ところで、古琉球と、それに続く近世琉球、すなわち1609年の島津氏の侵攻から1879年の琉球処分までの期間、琉球王国では「間切」という行政区分が利用されていた。この当時、沖縄市域は、旧石川市（現在のうるま市的一部分）の範囲を含む、「越来間切」という間切だった。1666年には越来間切の海側半分

が美里間切として分割された。

間切の下位には、さらに「村」という単位があった。今回の調査対象地域は、「越来間切」に含まれ、越来をはじめ、大工廻、宇久田などの村があった。これらの村は17世紀までには成立していた古集落と見られる。一方、古集落より成立の新しい、屋取と呼ばれる集落がある。これは17世紀半ばから20世紀にかけて、首里などから断続的に移住してきた士族層の開拓集落である。現在の嘉手納飛行場や嘉手納弾薬庫にあった集落の多くが屋取であった。

この地域の集落は、古集落にせよ、屋取集落にせよ、産業の基盤は稻作を土台とする農業であったが、他に、杣山から林産物を生産し琉球王府へ貢納する体制があったようで、尚穆王が越来をはじめ中部と北部の杣山を巡検した記事（『球陽』尚穆王27、1778年）や、大工廻村・宇久田村が山林から伐採した樹木で木炭、軽炭などの炭を焼き、毎年300俵を上納したという記事（『遺老説伝』）がある。

やがて、1879年の琉球処分によって琉球王国は日本国に版図に加えられたが、沖縄県では旧慣温存政策がとられたこともあり、明治40年代まで、農村の暮らしぶりに大きな変化はなかった。しかし、役場、郵便局、学校などのインフラ整備、サトウキビ生産の増大といった産業の変化、日本文化の流入は、次第に越来の人々の暮らしに変化を与えていった。

こうしたなかで、1945年、沖縄戦が始まる。沖縄戦は、沖縄の島々で日本軍と米軍とのあいだで行われた、大規模で長期間に渡る地上戦であった。その前年、1944年には、現在嘉手納飛行場となっている地域に、日本軍沖縄守備隊が中飛行場を建設するなどしている。また、現在の嘉手納弾薬庫地区には大規模な陣地壕が築かれ、たくさんの壕や塹壕が掘られた。こうした軍事施設は、現在も残存しているものが多い数があり、当時の状況を生き生きと伝えている。

沖縄戦に巻き込まれた越来村民の多くは沖縄本島北部、あるいは南部へと避難した。避難の末に、住民たちは米軍の捕虜となり、米軍の捕虜収容所に入れられた。

こうして戦争は終結したが、米軍は沖縄県に一時的に駐留するにとどまらず、恒常的な駐屯へと体制を変え、軍事施設を建設していった。同時に、広い土地が米軍に接収され、嘉手納飛行場や嘉手納弾薬庫地区として利用されることになった。

もともとこの地域に住居や農地を持っていた人々は、沖縄戦以前にあった生活のすべてを失うことになったが、一方で、米軍の需要に応じたさまざまな産業が発生し、労働力が必要とされるようになったことで、米軍の存在が市民の生活基盤となるという側面も生まれた。そのため、越来村には沖縄県全域から人が流入し、特に嘉手納飛行場の周辺は、この巨大な基地の、いわば門前町として急激な発展を始めた。

こうした激烈な社会の変容のなかで、1956年、越来村はコザ市となり、さらに1974年には美里村と合併して、沖縄市となって現在に至っている。

調査対象地域の地形と文化財について

調査対象地域である嘉手納飛行場と嘉手納弾薬庫地区は、比謝川を境に分けることができる。比謝川の南側が嘉手納飛行場、北側が嘉手納弾薬庫地区である。両者には明確な地形的特徴の差異が認められる。

嘉手納飛行場一帯は、基盤に琉球層群琉球石灰岩が分布し、段丘を形成している。この段丘上部の比較的平坦な土地を利用して、戦前はおもに農地として利用されていたが、現在は3,000mを越す長大な滑走路と、それに付随する施設とで構成された広大な軍事基地となっている。

この地域には比謝川に流れ込む小川によって形成されたごく小規模な谷がみられる。こうした谷筋の斜面には多数の墓が掘られている。また、この地域はカルスト地形である石灰岩丘が発達しており、円錐形の石灰岩丘が東西方向に点在して、平坦な土地のなかで目立つランドマークとなっている。こうした石灰岩丘は、方言では一般にシーやムイと呼ばれ、斜面や洞穴を利用して墓や壕が築かれた。なかには、信仰の対象となっているシーやムイもあった。造成によって消滅したり形状を変えたものもあるが、現在でも沖縄戦以前と変わらぬ状態で残存している石灰岩丘も確認できる。

一方、弾薬庫のある一帯は、国頭層群名護層と琉球層群国頭礫層が基盤となる丘陵地である。読谷山岳付近を水源とする大小の河川が比謝川へ向けて流れて、谷底低地が形成され、比高30m以下の小起伏の丘陵地形をなしている。

また、嘉手納弾薬庫地区は、弾薬の格納庫や運搬道路などさまざまな設備が作られているが、嘉手納飛行場に比べると開発・造成の度合いは比較的低く、山林が残っている。琉球王府時代には、この地域は用材林として、琉球王府の直轄地、あるいは御殿と呼ばれる高位の士族の領地であったようである。

沖縄戦以前のこの地域では、谷底低地は農地に利用され、丘陵上部のわずかな平坦面が宅地に利用された。谷底低地は、場所によっては深い湿地となっていた。こういう場所につくられた水田は、方言でユビ田^{ウドゥン}などのように呼ばれる、腰まで漬かるような深い水田になったという。嘉手納弾薬庫地区には、このような住宅や農地の跡、墓などが多数残されていると見られる。

また、嘉手納弾薬庫の一部は、戦後すぐにダムとして利用された。瑞慶山ダムと名付けられたこのダムは、後に改修され、倉敷ダムと名称を変えて、中部一帯の農業用水・上水道用水として現在も利用されている。倉敷ダムの名称の由来となった倉敷集落は大半が水中に没したが、ダムの底に屋敷跡、サーターヤー跡、炭焼窯跡などが残っている。ダム周辺の地域にも屋敷や墓、壕が残っていると推測される。

参考文献

『コザ市史』コザ市 1974年

『沖縄市史 第二巻 資料編 文献資料による歴史』沖縄市教育委員会 1984年

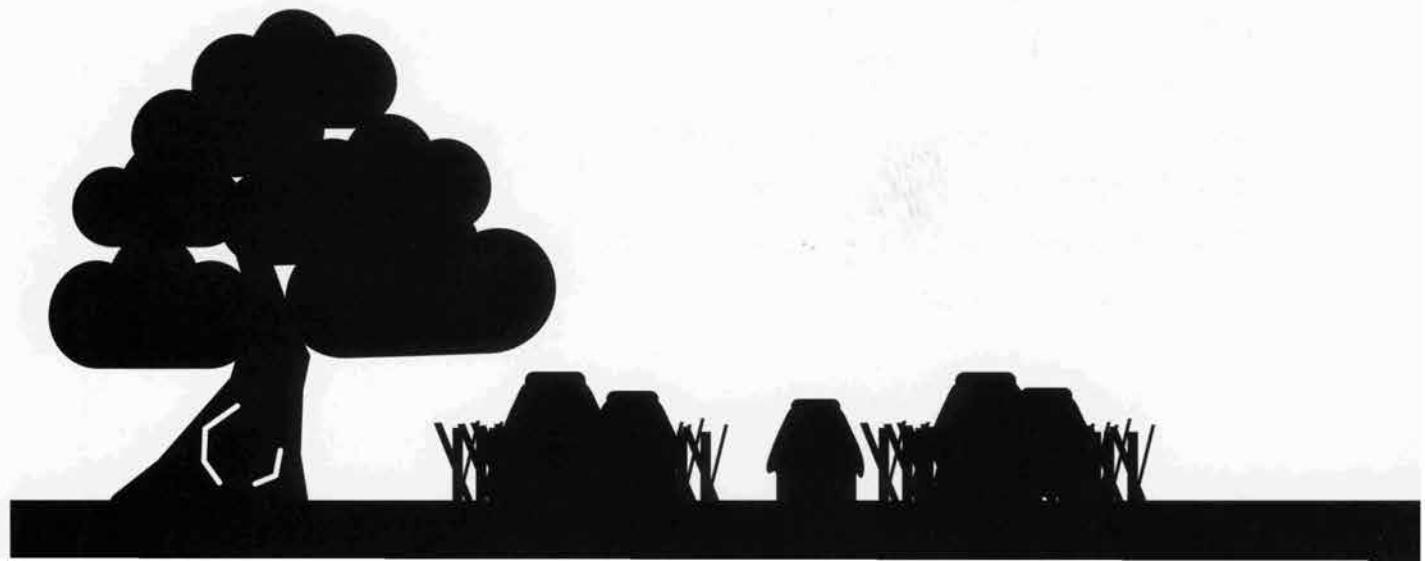
『沖縄市市政要覧2005』沖縄市役所 2005年

『沖縄市史 第四巻 自然・地理・考古編 -地理・考古編-』沖縄市役所 2008年

『基地対策No.15』沖縄市 2009年

II 章

基地内文化財 調査報告



1 嘉手納飛行場・嘉手納弾薬庫地区の文化財

嘉手納飛行場内踏査概要

平成20（2008）年度から平成21（2009）年度にかけて、嘉手納飛行場内の文化財踏査を行なった。その結果、既知の文化財に加えて新たに文化財を確認することができた。文化財の多くは戦前の屋敷跡・畠跡・墓跡・戦争遺跡などであるが、先史時代の遺物散布地を1地点確認することができた。

嘉手納飛行場内には、今回の調査で発見にいたらなかった文化財がまだまだ存在する可能性があり、基地内の調査・開発の際には、既知の文化財だけでなく、未発見の文化財にも留意する必要がある。なお、個々の文化財の詳細についてはp72の嘉手納飛行場内文化財一覧を参照していただきたい。

2008年6月3日

区画3のD-7の踏査を行ない、番号81・82の文化財を確認した。

戦前の宇久田国民学校から南西に約650mの位置にある谷で、谷に架かる石橋及び石橋の上にある拝所を確認した。

2008年6月5日

区画3のC-4～5の踏査を行ない、番号120～136の文化財を確認した。

調査地は戦前の宇久田国民学校の南側にある谷である。谷の斜面に墓跡11基と石積みを確認することができた。墓跡は東側斜面で確認され、西側斜面には見られない。墓跡はすべて掘込墓である。

2008年6月11日

区画2のC-1（①）、区画3のB・C-2～3（②）の踏査を行ない、69～71の文化財、178・179の文化財を確認した。

①は「クビチリジー」と呼ばれる石灰岩丘で、第2ゲートから北に約900mの場所に位置する。石灰岩丘の頂上部には岩陰が見られ、岩陰の周辺から、土器・陶器・貝片・骨片・人歯が採集された。また、頂上から縄文時代後期相当期のものと思われる土器が採集された。

②は滑走路北東端の緑地帯である。屋敷跡と思われる家畜小屋の石柱と石積み、フール跡を確認した。

2008年6月19日

区画1のA-3（①）、区画3のA-8（②）の踏査を行ない、①では26・27の文化財、②では79・80の文化財を確認した。

①は第2ゲートから北西に約1kmの場所に位置している石灰岩丘で、頂上と麓に設けられた拝所を確認した。

②は角石と呼ばれる石灰岩丘で、降伏調印記念碑の北に位置している。北側麓には、森根の拝所がある。頂上付近には岩陰が2ヶ所あり、それぞれに香炉が見られた。頂上付近では沖縄産陶器・貝片・骨片・人歯などが採集された。聞き取り調査において、当該地に骨や鎧甲などが散乱していたという聞き取りが得られている。

2008年6月27日

区画3のA・B-5～6の踏査を行ない、180～187の文化財を確認した。

調査地は第3ゲートから南西に約1kmの位置にある丘陵地で、当地の方言でイームイと呼ばれる。その斜面には墓跡が8基と畠跡の可能性がある石積みが確認された。墓跡は掘込墓・平葺墓・岩陰墓などが見られた。

2009年2月12日

区画3のC-4～5の踏査を行ない、137～167の文化財を確認した。

調査地は2008年6月5日に調査した谷の東側に隣接した谷である。谷の斜面に古墓が30基確認された。多くは掘込墓であるが、岩陰墓・岩陰囲込墓も見られた。

2009年2月17・19日

区画4のD・E-5の踏査を行ない、2月17日には266～273の文化財、2月19日には206・207～215の文化財を確認した。

調査地は第3ゲートから約700mの場所に位置する丘陵地の東斜面である。墓跡が14基、洞穴、戦中の防空壕と思われるものが確認された。墓跡は掘込墓が多く、その他平葺墓・亀甲墓も見られた。

2009年2月25日

区画4のF-6 (①)、区画4のB・C-5～7 (②)、区画2のA-1 (③) の踏査を行ない、216～218の文化財を確認した。

①は2月17、19日に踏査を行なった丘陵斜面の南側にあたり、以前に確認した防空壕の内部の踏査を行なった他、墓跡3基が確認された。

②は2月17・19日に踏査を行なった丘陵から東に約800mの場所、③は②から南に約600mの場所に位置している。②・③の箇所では、文化財を確認することが出来なかった。

2009年3月4・10日

区画4のE・F-4～5の踏査を行ない、3月4日には219～223の文化財、3月10日には224～227・229～255の文化財を確認した。

調査地は2月17、19日に踏査した丘陵の西側斜面にあたる。斜面に沿うように36基の墓跡が点在するのが確認された。墓跡は掘込墓・亀甲墓などが見られた。

2009年8月10日

区画2のD-4～5 (①)、区画3のC-5 (②)、区画3のA-5 (③) の踏査を行ない、102～109・111～123・192～196の文化財を確認した。

①は戦前の上地集落北端部にあたるが、遺構・遺物は確認できなかった。

②は2008年6月5日の踏査場所である谷筋の約100m上流で、戦前の宇久田国民学校の南側に伸びる谷である。谷の斜面に20基近くの墓が確認された。うち3基の墓で、内壁に墓誌と思われる墨書きが見られた。

③は第3ゲートに近い丘の北側斜面である。KACRIによればこの丘は周囲を墓が取り巻いており、全部で9基の墓が確認されているが、今回の踏査ではそのうちの5基を確認した。うち3基の墓で、墓室奥に壁龕のような掘り込みが見られた。

表採遺物

今回の嘉手納飛行場内踏査では、10地点において、41点の遺物を表採することができた。表採遺物の種別としては、土器・陶器・石器・貝類・骨類などである。表採遺物のほとんどは近世～近現代の遺物もしくは時期不明の遺物である。クビチリジー（区画2のC-1）において縄文時代相当期のものと思われる土器、角石（区画3のA-8）において近世以降の陶器片を表採することができた。

表採遺物は、所見・図・写真などを用いて報告する。なお、厨子壺など墓跡に伴う遺物は、今回の調査では採集していない。

土器

土器はクビチリジーにおいて、15点が表採された。いずれも小片で磨耗している。これらの土器片は胴部小片がほとんどであるが、口縁部片1点をクビチリジー頂上の岩山麓、頸部片1点をクビチリジー頂上において表採した。

図3-1（写真1-1）は深鉢形土器の口縁部片である。無文の資料で、口縁部がやや波打ち、口縁部先端付近に淡い段を持つ。器面調整はあまり成されていない。胎土中に石英粒・白色砂粒・黒色砂粒を含む。器色は橙色（5YR 6/6）となる。

図3-2（写真1-2）は深鉢形土器と思われる頸部片で、風化が激しく、器面が磨耗するが、3条の刺突文が見られる。胎土中に雲母・白色砂粒を含む。器色は褐色（7.5YR 4/4）となる。文様等から縄文時代後期相当期の土器であると思われる。土器の発見場所である石灰岩丘頂上部は、わずかな空間しかなく、何故そのような場所に土器が存在するのかは不明である。

他の土器小片については、無文であること、表採資料であることから年代は不明である。

陶器

陶器は2点、角石及びクビチリジーにおいてそれぞれ1点ずつ表採された。いずれも沖縄産陶器と思われる資料である。角石表採資料は口縁部片で、器種は壺と思われる（写真1-3）。外面のみ施釉がなされ、

口唇部・裏面は無釉となっている。外面・内面共に口クロ痕が見られ、また裏面にのみ、調整の際につけられたと思われる指の痕が見られる。器色は黒褐色。製作時期は近世～近現代の時期のものと思われる。
クビチリジー表採資料は胴部片のため、詳細は不明である。

石器

石器は敲打器と思われる石器が1点表採された（図3-3、写真1-4）。長径12.7cm、短径7.9cm、厚さ4.9cm、重量580gを測る。石質は砂岩で、2ヶ所に磨面と思われる面が見られることから、磨石として転用された可能性がある。表採資料であるため年代は不明。表採場所は区画4のF-6付近の山中である。

貝類

貝類は7点が表採されており、クビチリジーではアラスジケマンガイ等が4点、区画4のE-5、番号268の墓付近でホラガイ1点、番号269の墓後方斜面・区画4のF-6、番号209の洞窟内でシャコガイがそれぞれ1点表採された。表採資料であるため年代は不明。各遺跡・遺構との関係性も不明である。

骨類

骨類はクビチリジーにおいて12点（骨片11点、ヒト臼歯1点）、角石において4点（骨片3点、ヒト臼歯1点）が表採された。

骨片・ヒト臼歯共に表採資料であるため年代は不明。クビチリジー・角石共に岩陰・洞穴があり、
角石においては人骨が置いてあったという聞き取りが聞かれた。

参考資料

小山正忠・竹原秀雄 『新版 標準土色帖』 日本色研事業株式会社 2005年

松井章編 『動物考古学の手引き』 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2006年

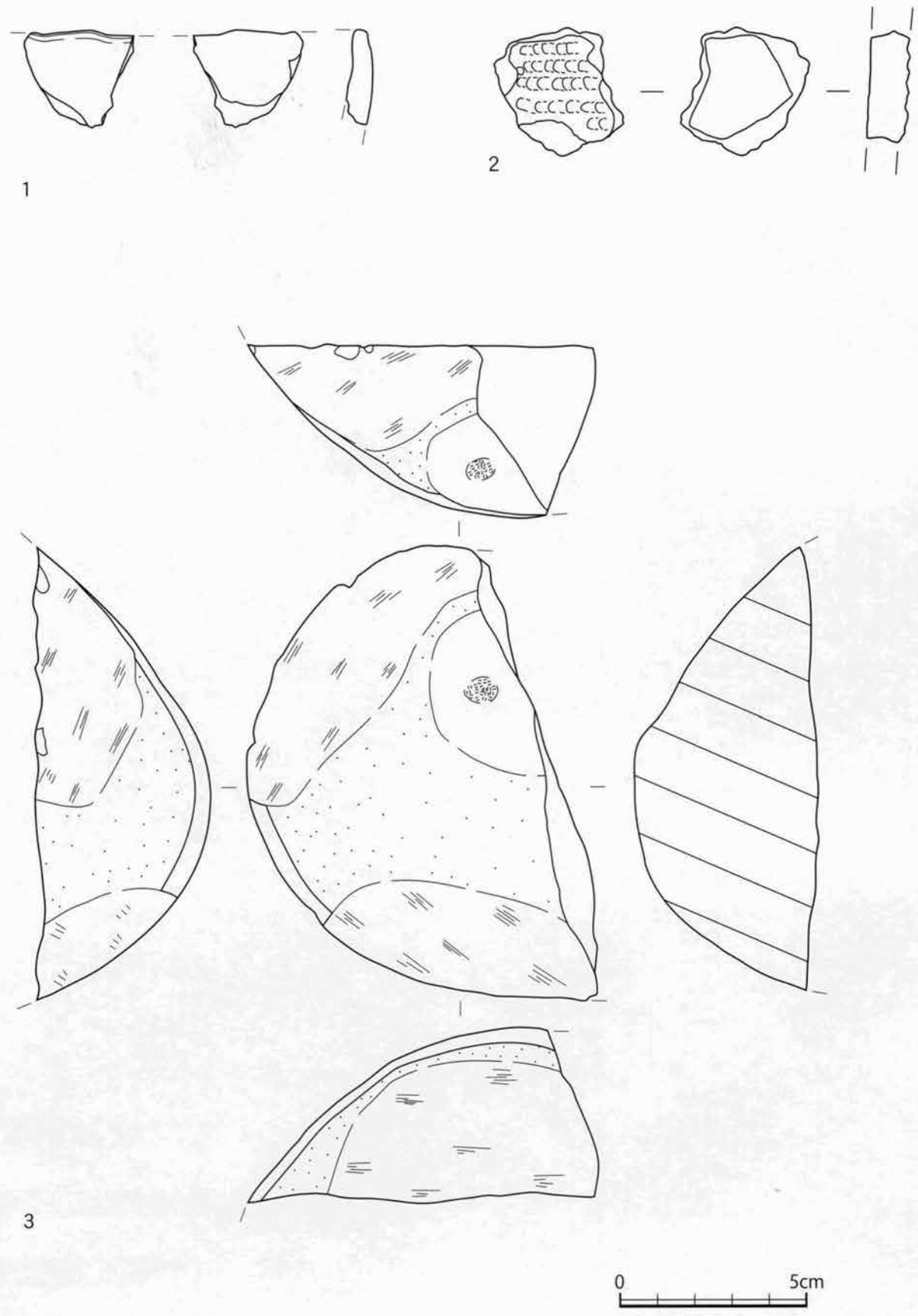


図3 嘉手納飛行場内踏査 表採資料

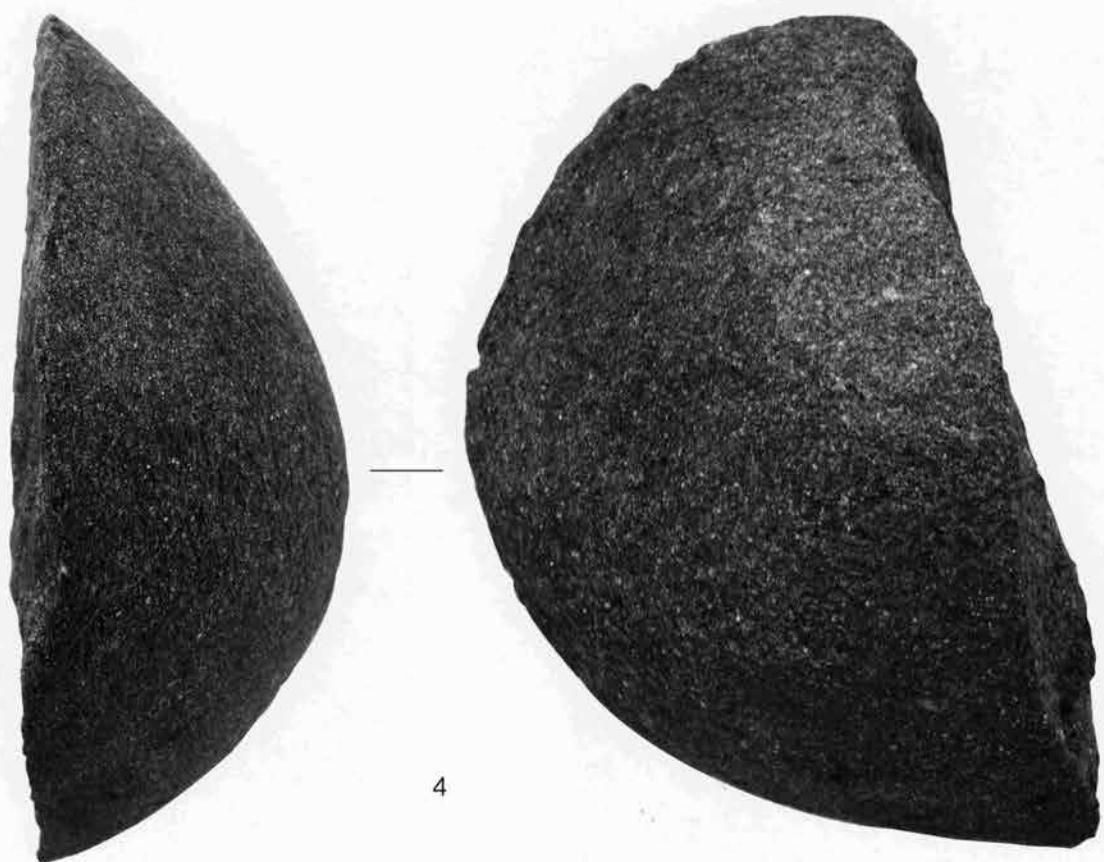
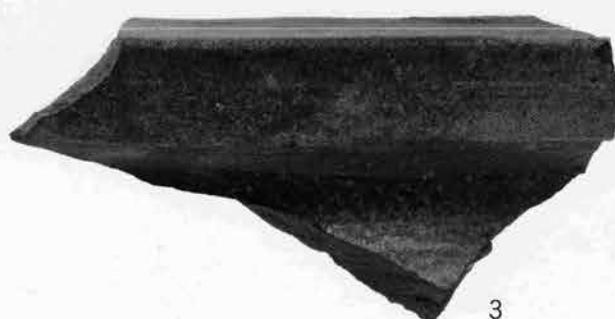
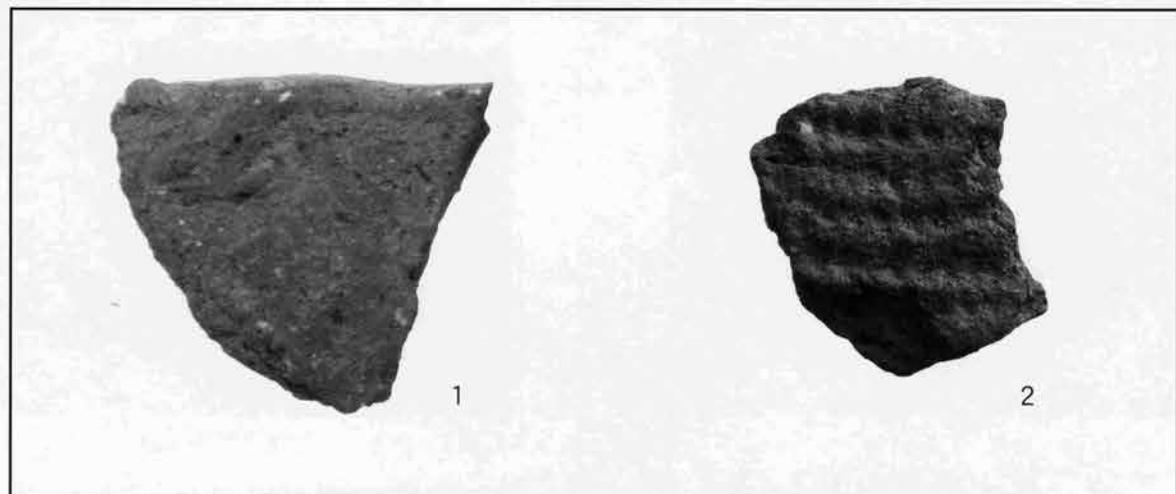


写真1 嘉手納飛行場内踏査 表採資料



写真2 石橋（番号337）



写真3 古墓群（番号120～136）



写真4 クビチリジー遠景



写真5 クビチリジー頂上 岩陰



写真6 屋敷跡（番号178）



写真7 チヌシ 角石遠景



写真8 チヌシ 角石 岩陰



写真9 チヌシ 角石 岩陰



写真10 古墓（番号151）



写真11 防空壕（番号210）



写真12 古墓（番号218）



写真13 古墓（番号240）



写真14 古墓（番号240）内部



写真15 古墓（番号240）内部



写真16 古墓（番号506）



写真17 古墓（番号506）内部



嘉手納町

凡例

基地範囲

境界線

大字界

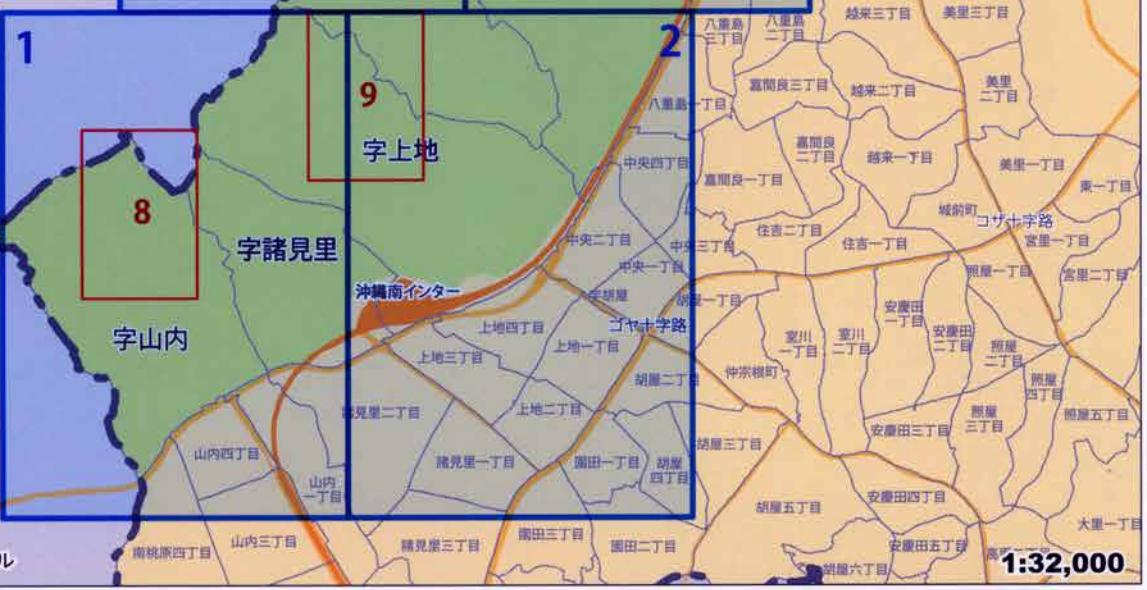
沖縄自動車道

一般道路

うるま市



北谷町



凡例

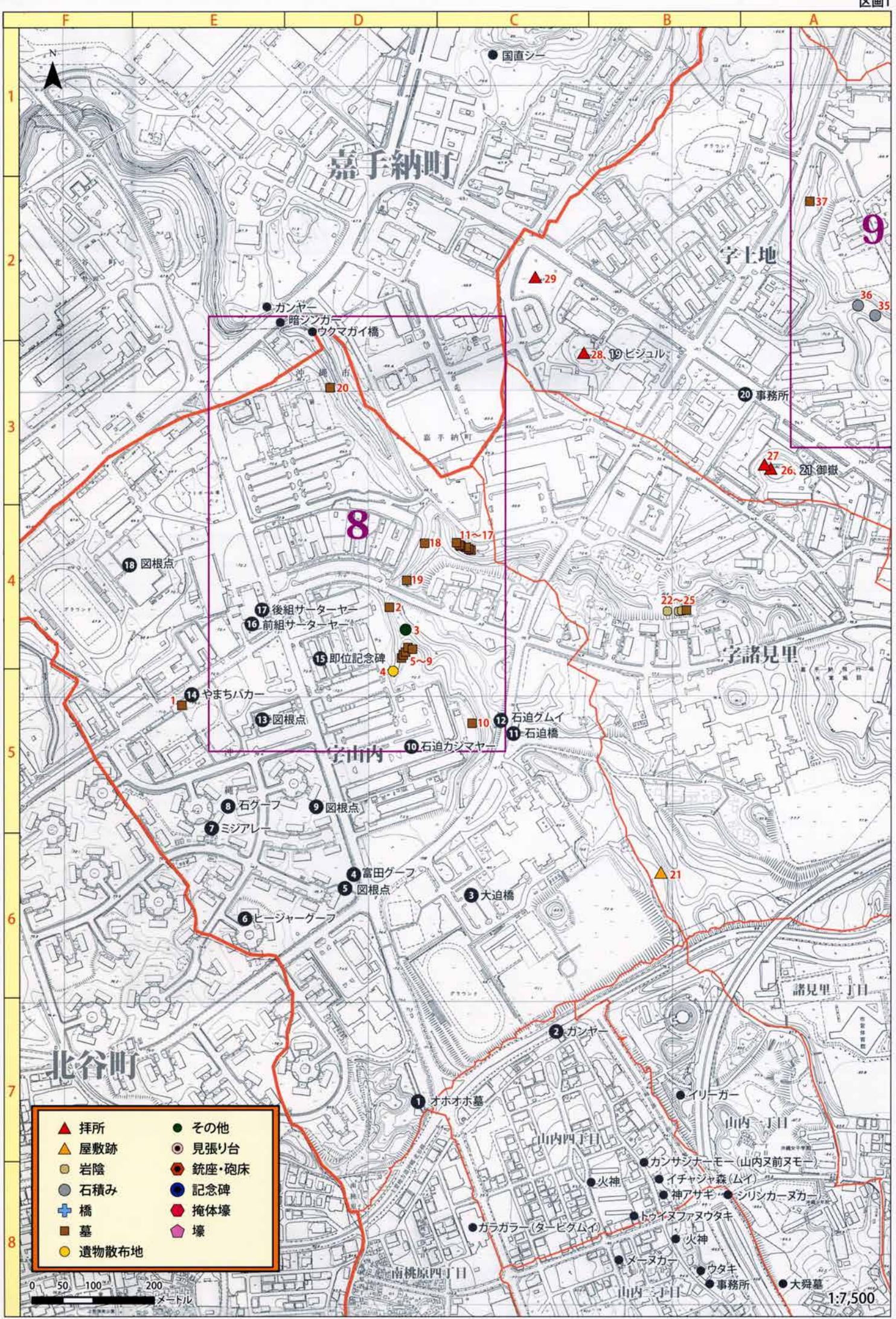
本文中で茶色の文字は地点名および道路名、水色の文字は河川名、紫色の文字は集落名、オレンジ色の文字はハル名、緑色の文字は屋号名を表す。

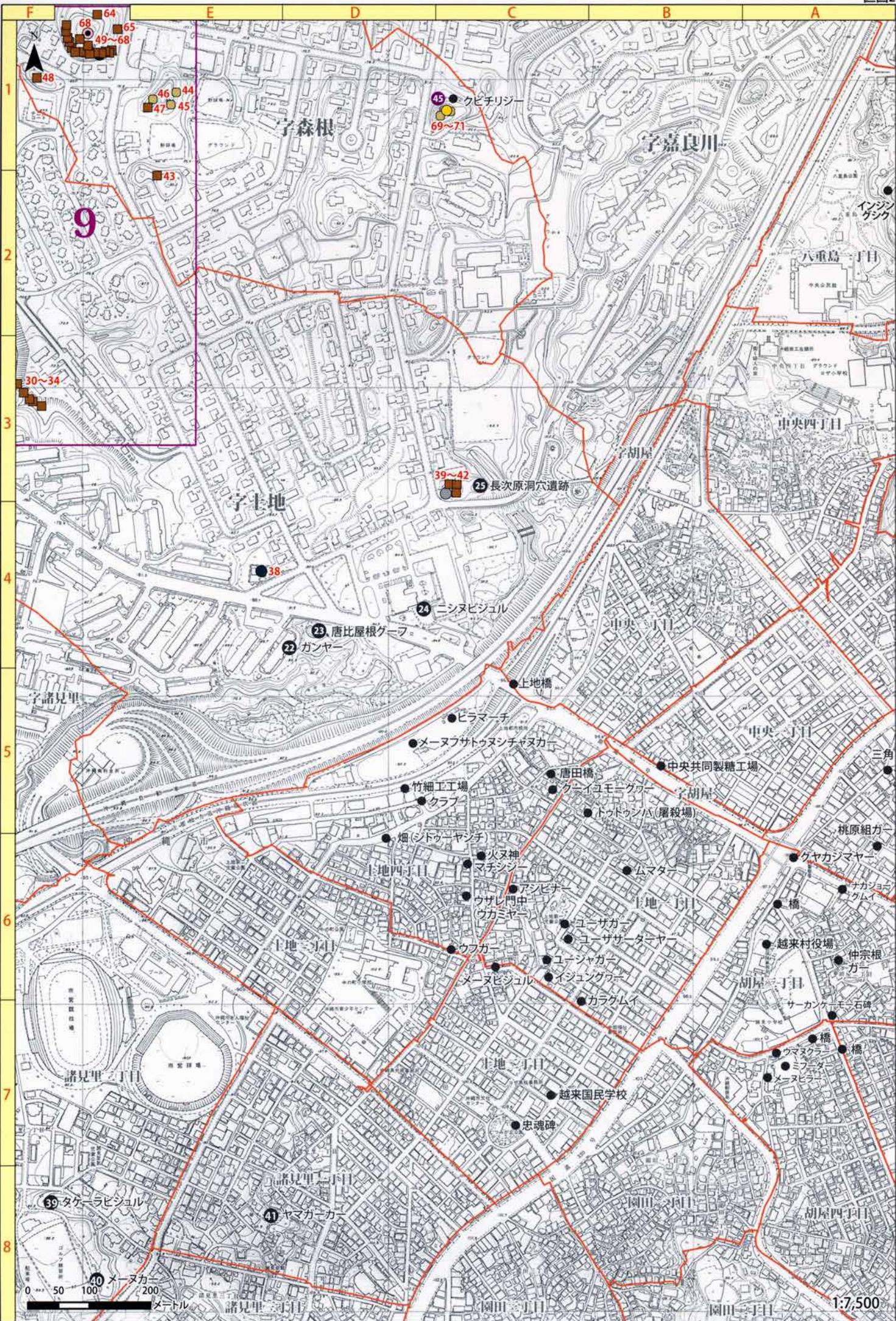
地図凡例 (聞き取りで得られた情報および文献の情報を参考にプロットした地点は、現存しないものも掲載してある。)

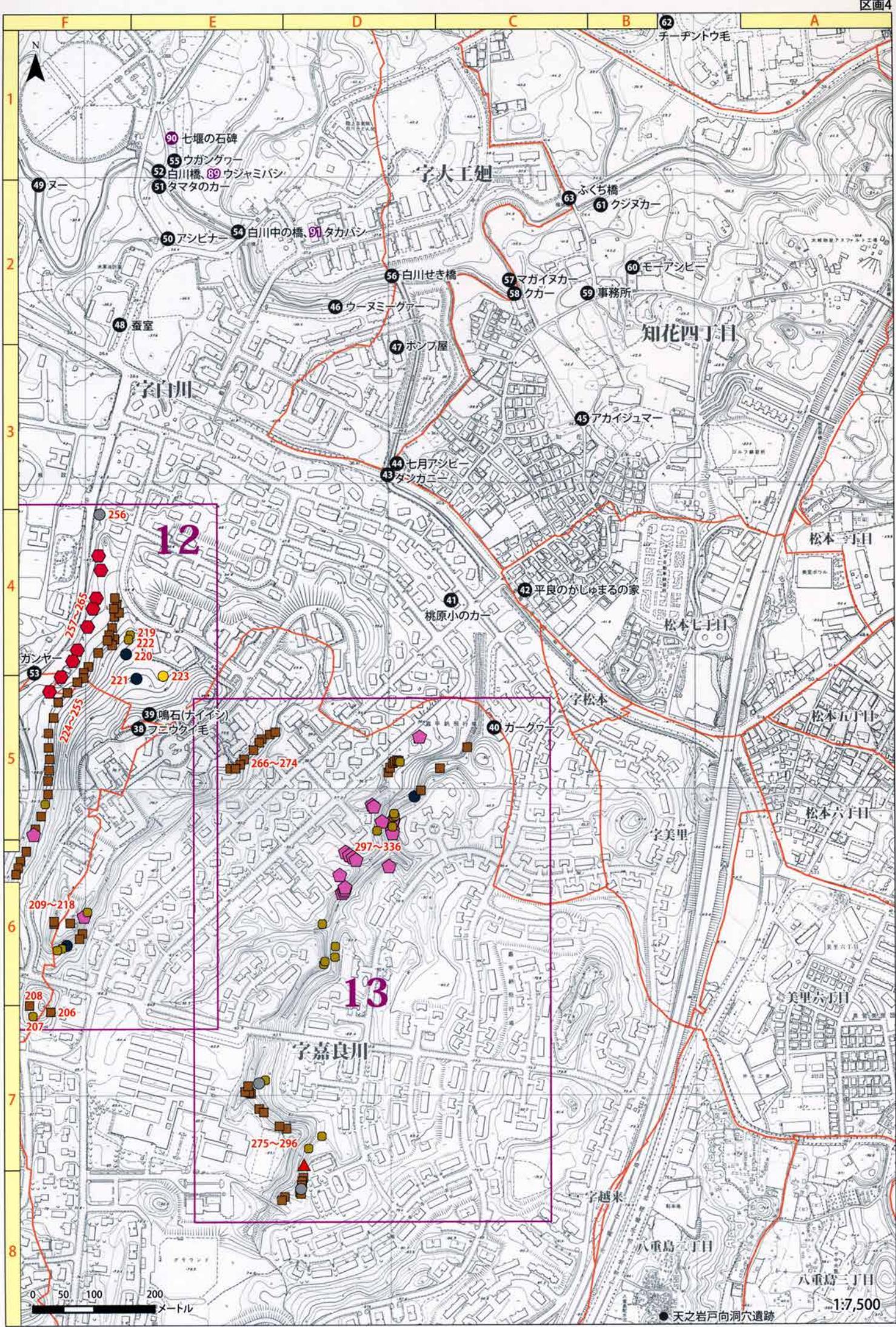
記号例	解説
村道	1945年当時の道路・道路名 県道、村道、生活道など
ウフガーラ	1945年当時の河川・河川名 常に流水がある河川
■■■■■	1945年のトロッコ軌道
伊武佐久 インジャクー	集落名
インジャクー	ハル(耕作地)名
茶園(チャエン) 墓地帯	地域(一定の広がりのある空間)名
— - - - -	現在の市町村境界
— — — — —	現在の大字界
— — — — —	現在(2008年)の道路
54 新学校 54 新学校	聞き取りで判明した地点、地点名
▲29 ■19 ▲21	現地踏査およびKACRIで確認した地点
①オホオホ墓 ②御嶽 ●ウクマガイ橋 ④大森御嶽(吳富士拝所)	文献を参考にした地点、地点名
その他の地点名は以下のとおり	

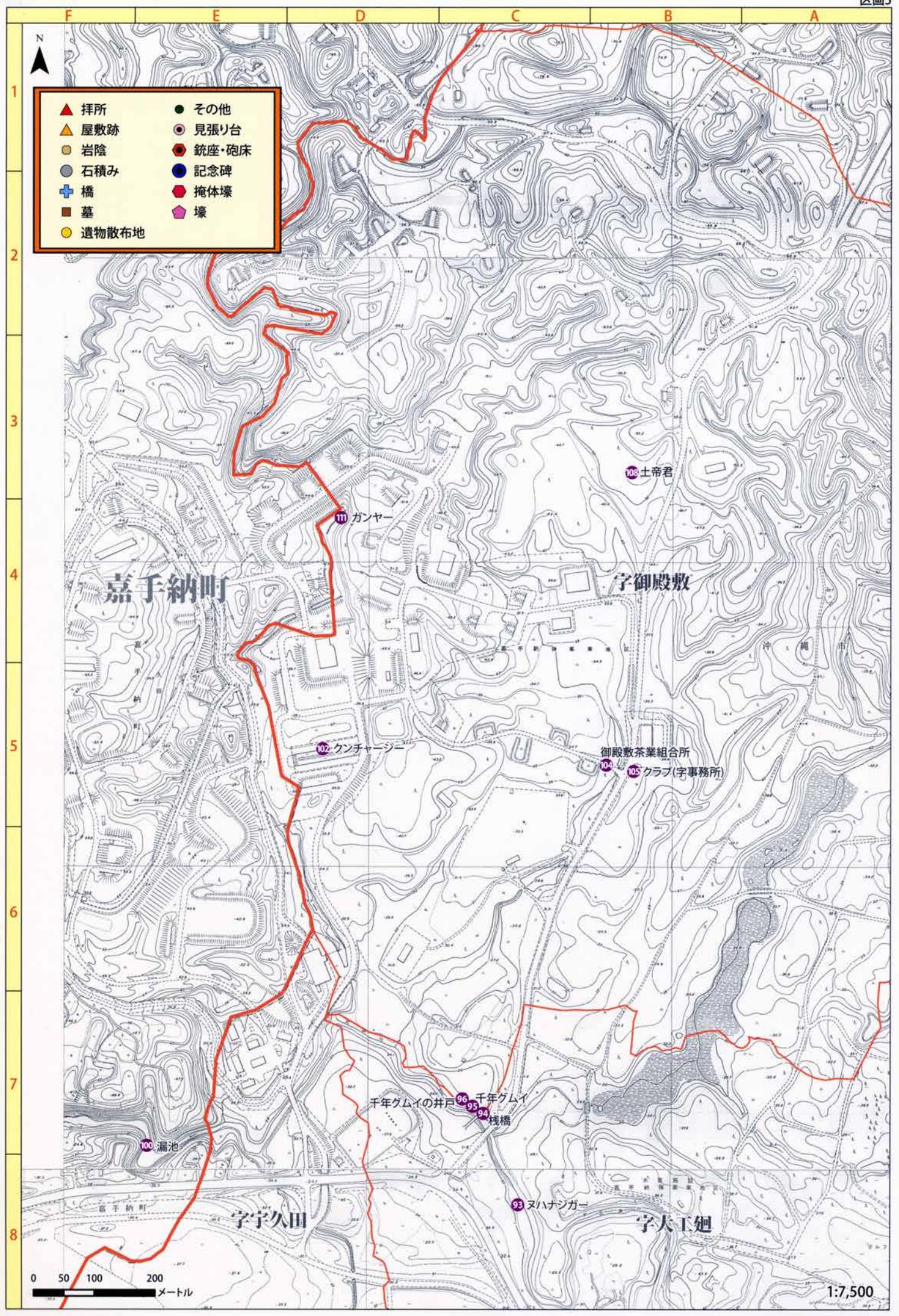
地点の記号一覧

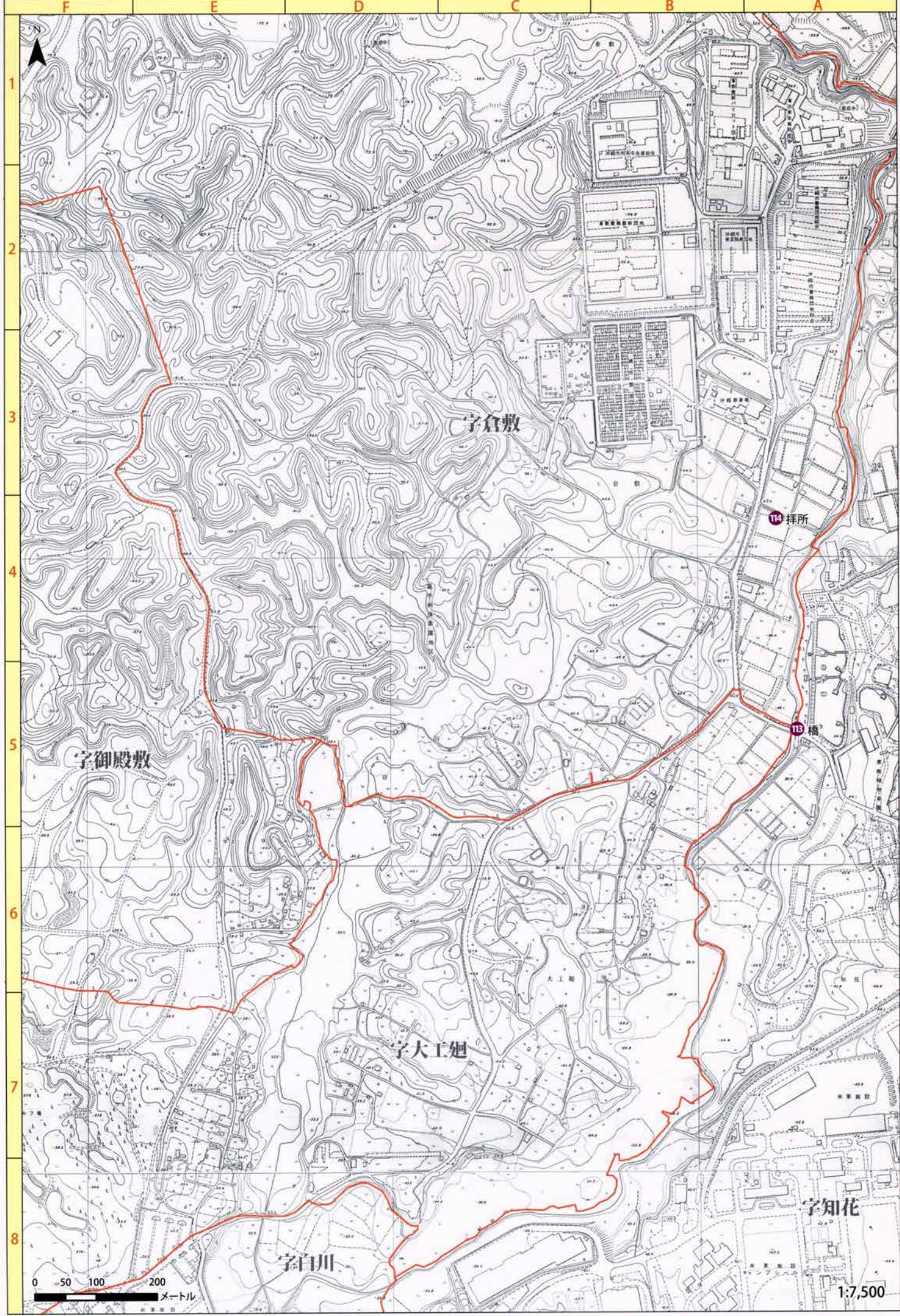
湧水井戸	堀井戸(丸・四角)	池	川堰	滝	岩山	丘陵地	
木橋	石橋	土手	広場	ガンヤー	砂糖小屋	工場	
神屋	拝所	集会所	学校	商店	建物	亀甲墓	堀込墓
壇	碑	十字路	その他				

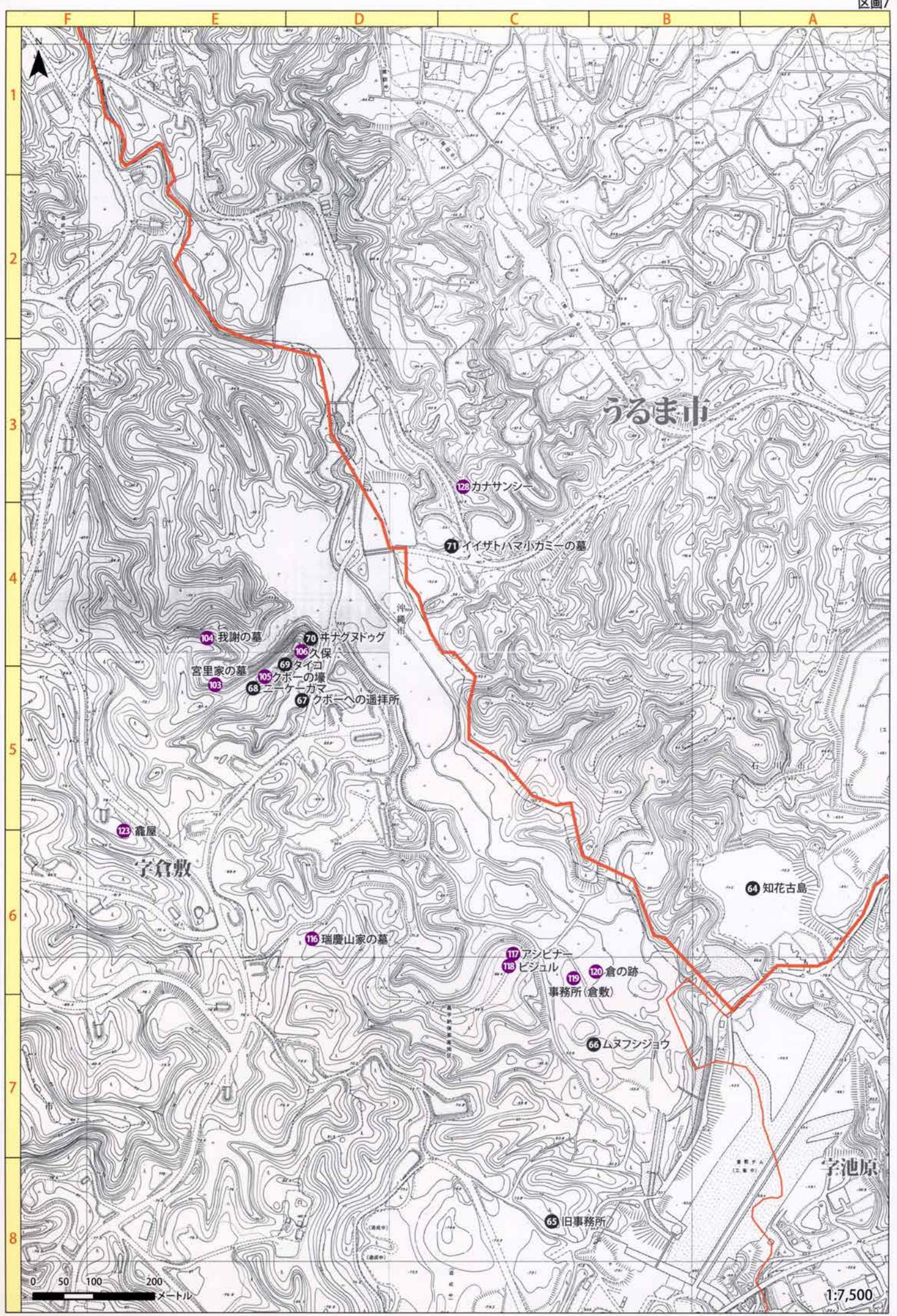




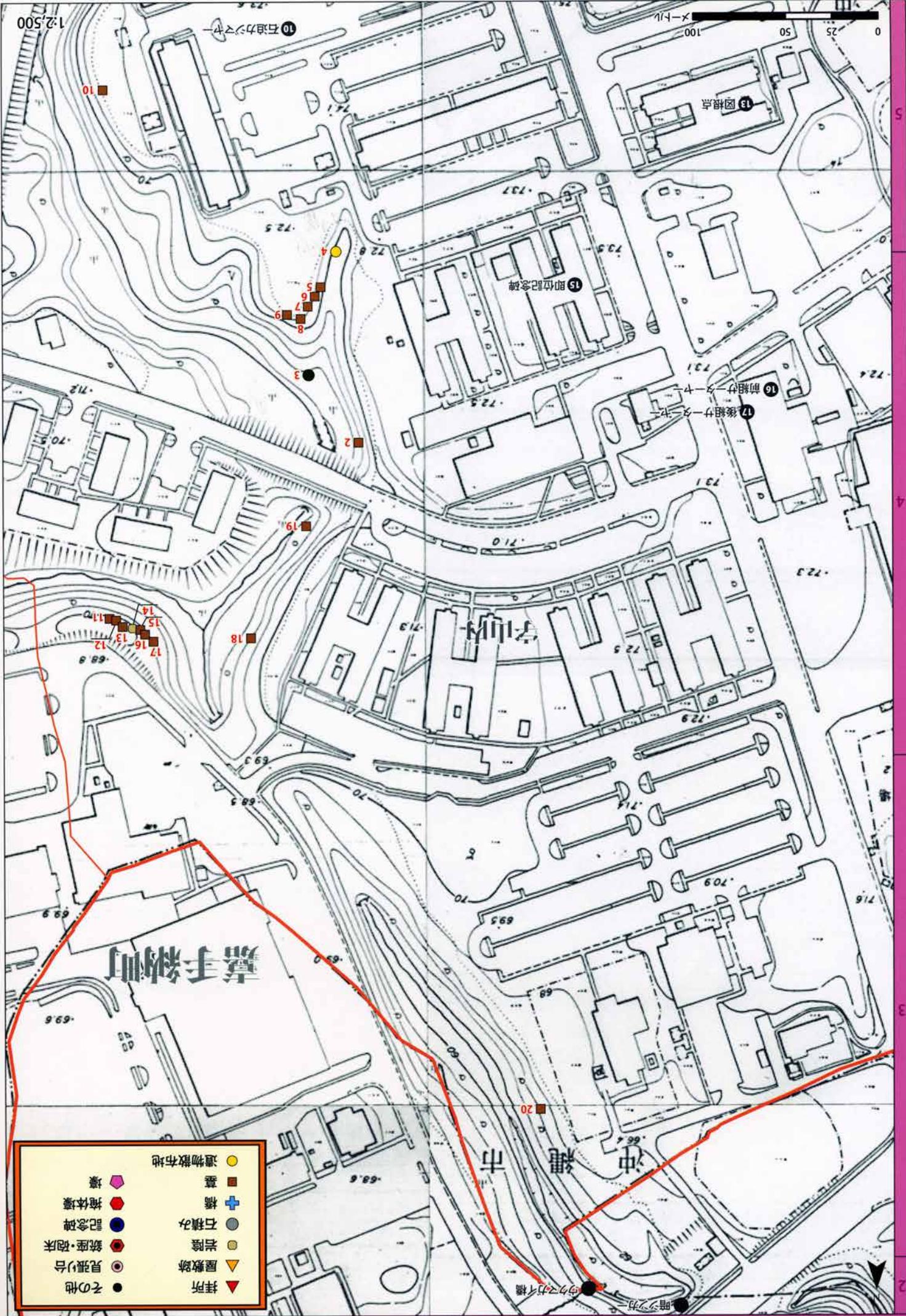




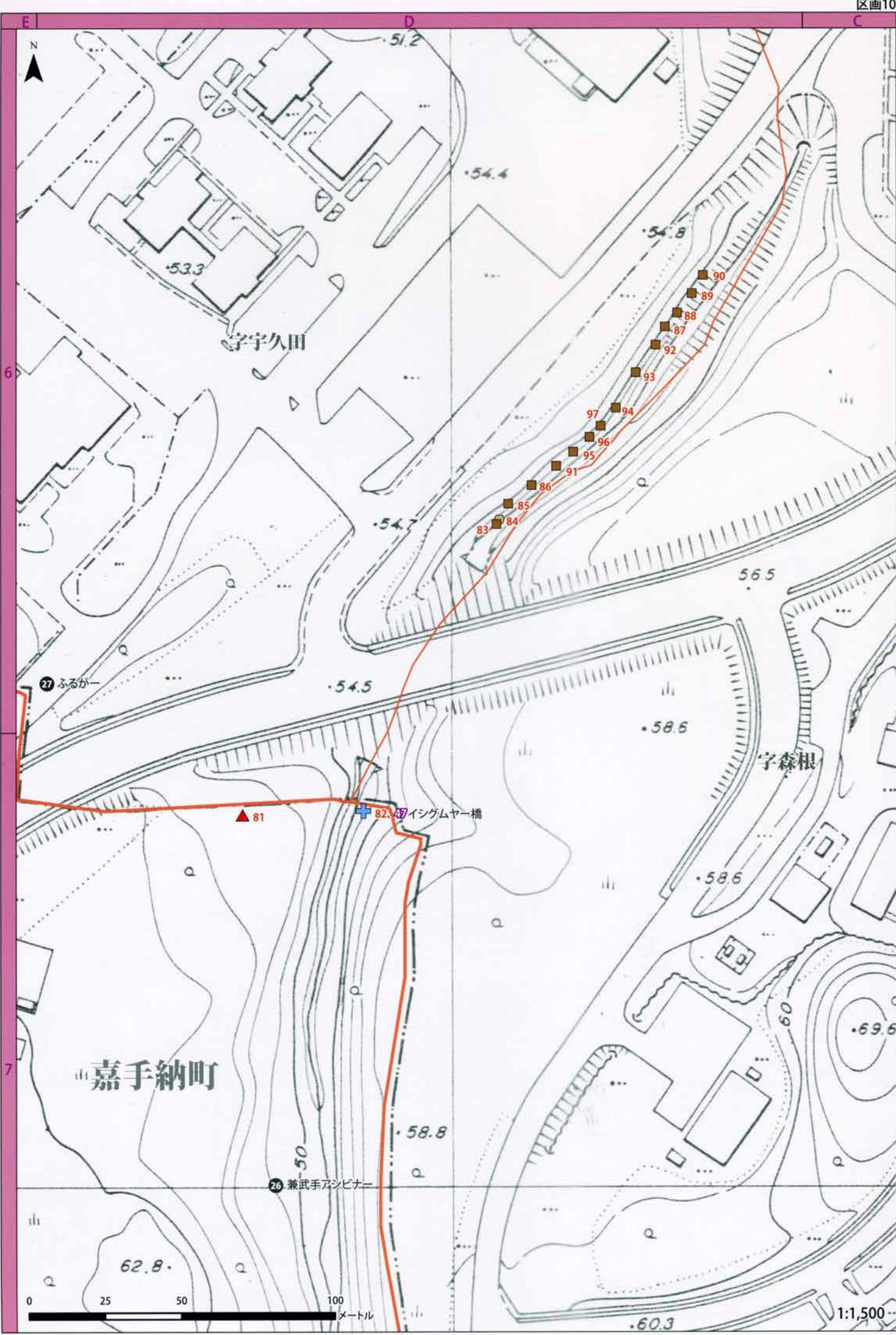


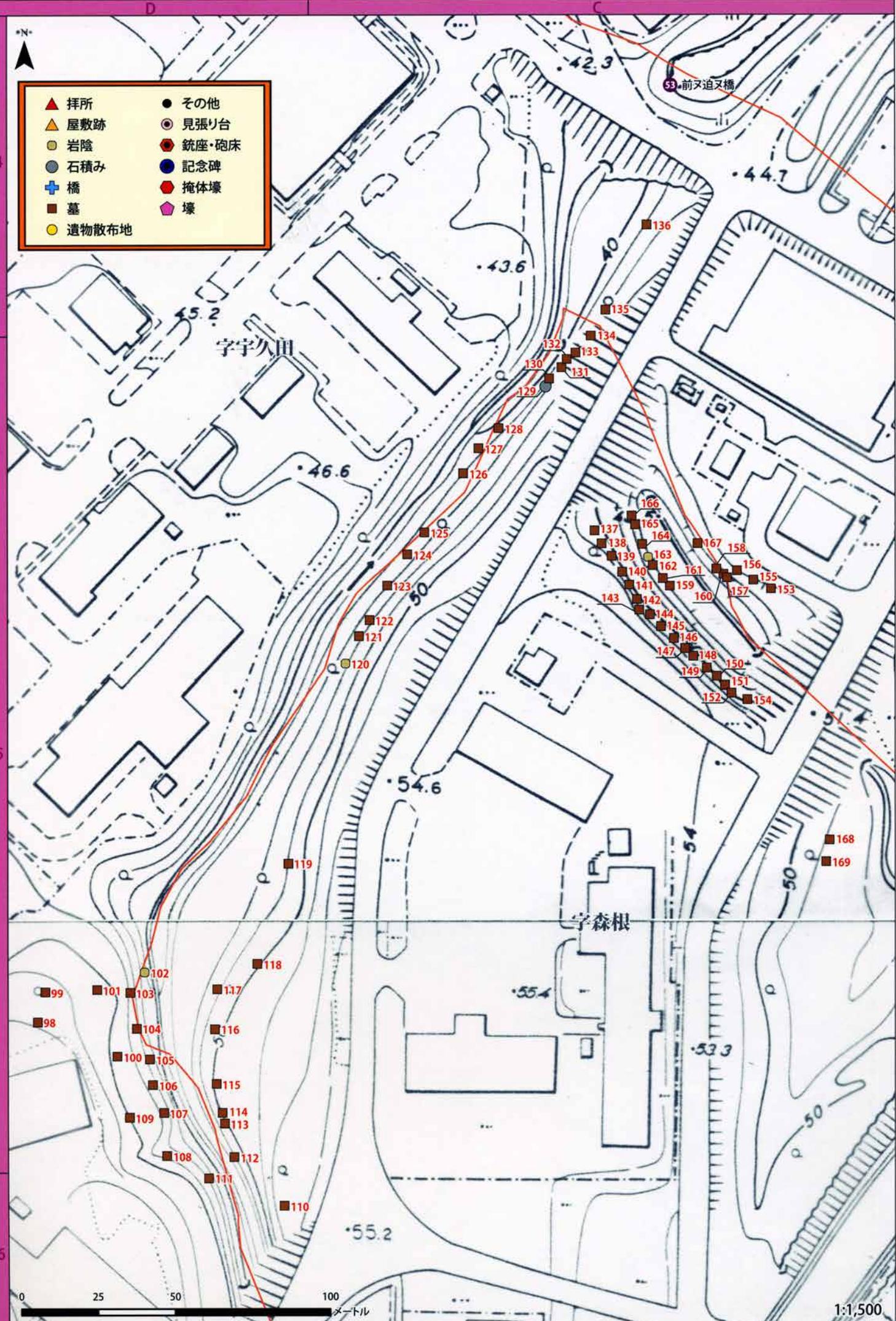






●	河川地
○	見張り台
△	崖壁跡
■	岩盤
□	谷盤
▲	谷底
◆	谷底・谷床
■	谷底
●	標高





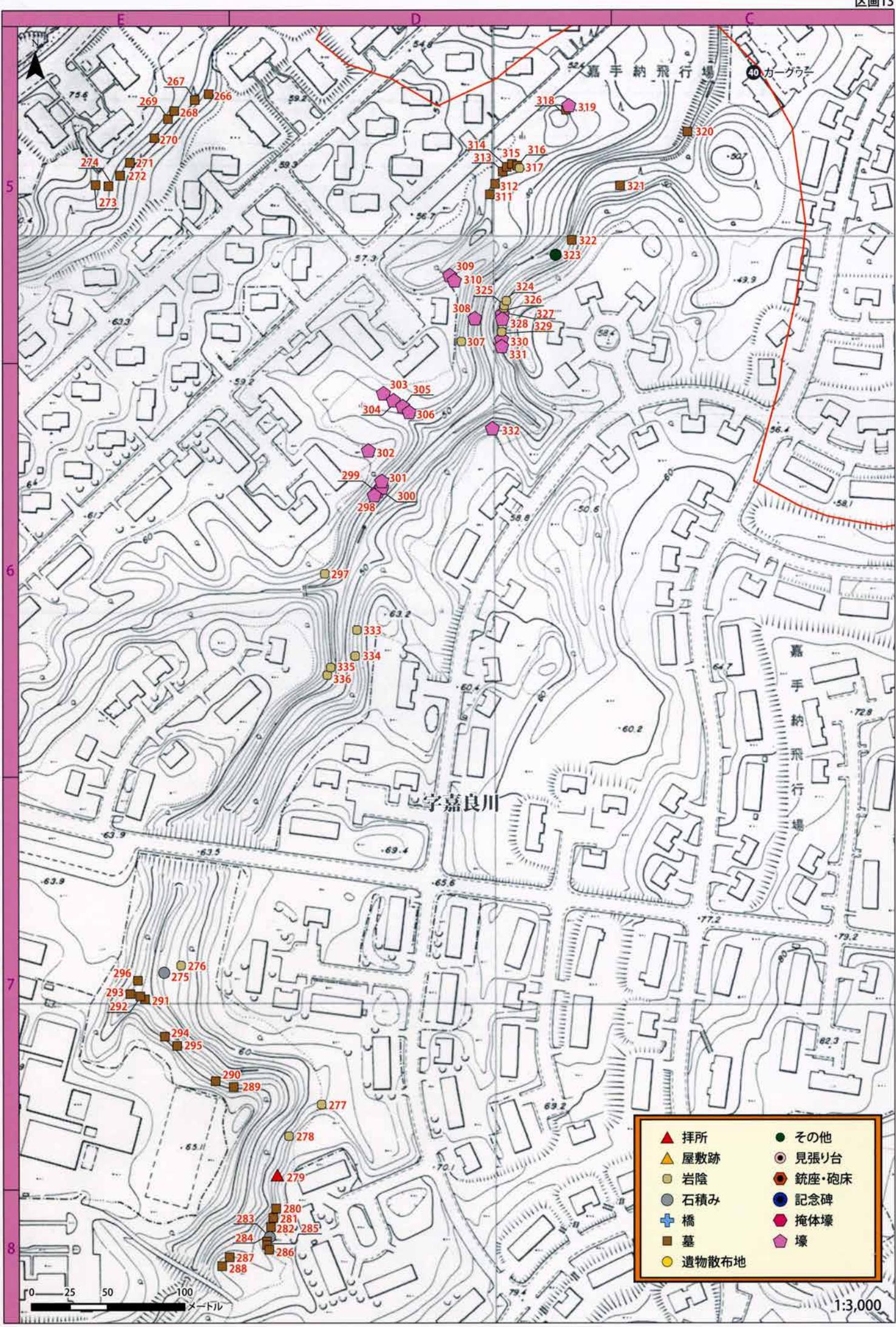
区画3-A

区画4-F

区画4-E



1:3,000



基地になる前のこと

このページの空撮写真は、2008年に撮影されたものである。

嘉手納飛行場・嘉手納弾薬庫地区のうち、沖縄市域にかかっている部分がほとんど写っている。これが、今回の文化財分布調査の対象地域である。

嘉手納飛行場は、比謝川の南部の段丘上部を利用した広大な造成地で3,000mの長さを持つ滑走路と、格納庫などの付属施設、基地に所属する軍人や軍属の住宅地がある。

造成によりもとの地形が大きく変更されているが、一部に谷や石灰岩丘が残り、墓や壙といった文化財が確認されている。

一方、嘉手納弾薬庫地区は、比謝川の北側の丘陵地帯に設営されている。コンセット状の建築物とそれを結ぶ舗装道路を除いては、山林に覆われている。

嘉手納飛行場や周囲の市街地が開発されているのに対し、弾薬庫地区では比較的戦前の地形や山林、地割が残っている。

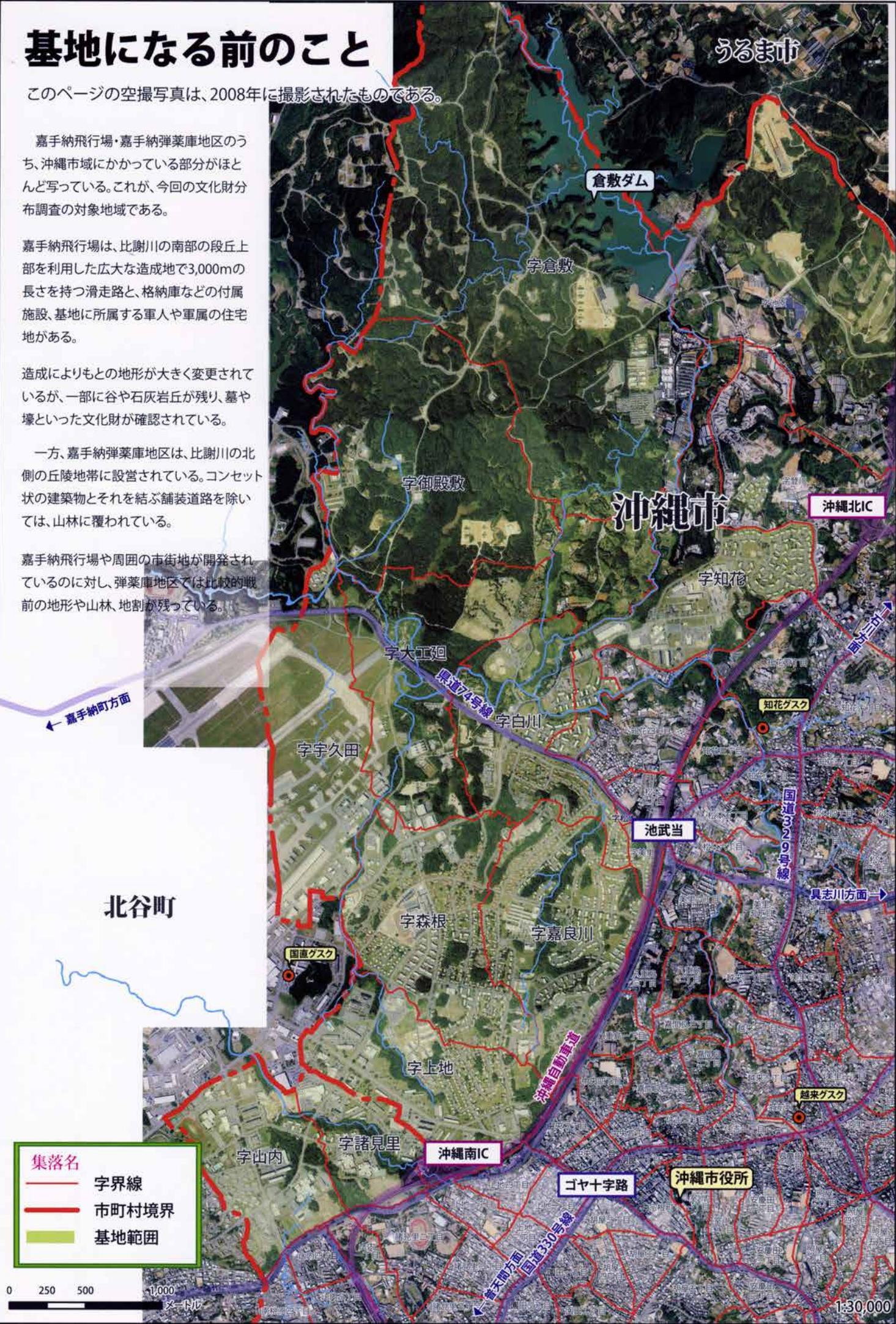
北谷町

集落名

字界線

市町村境界

基地範囲



このページの空撮写真は、1945年2月末、米軍の偵察機によって撮影されたものである。撮影から1ヶ月後、米軍の艦砲射撃がはじまり、撮影された風景は大きく変化した。

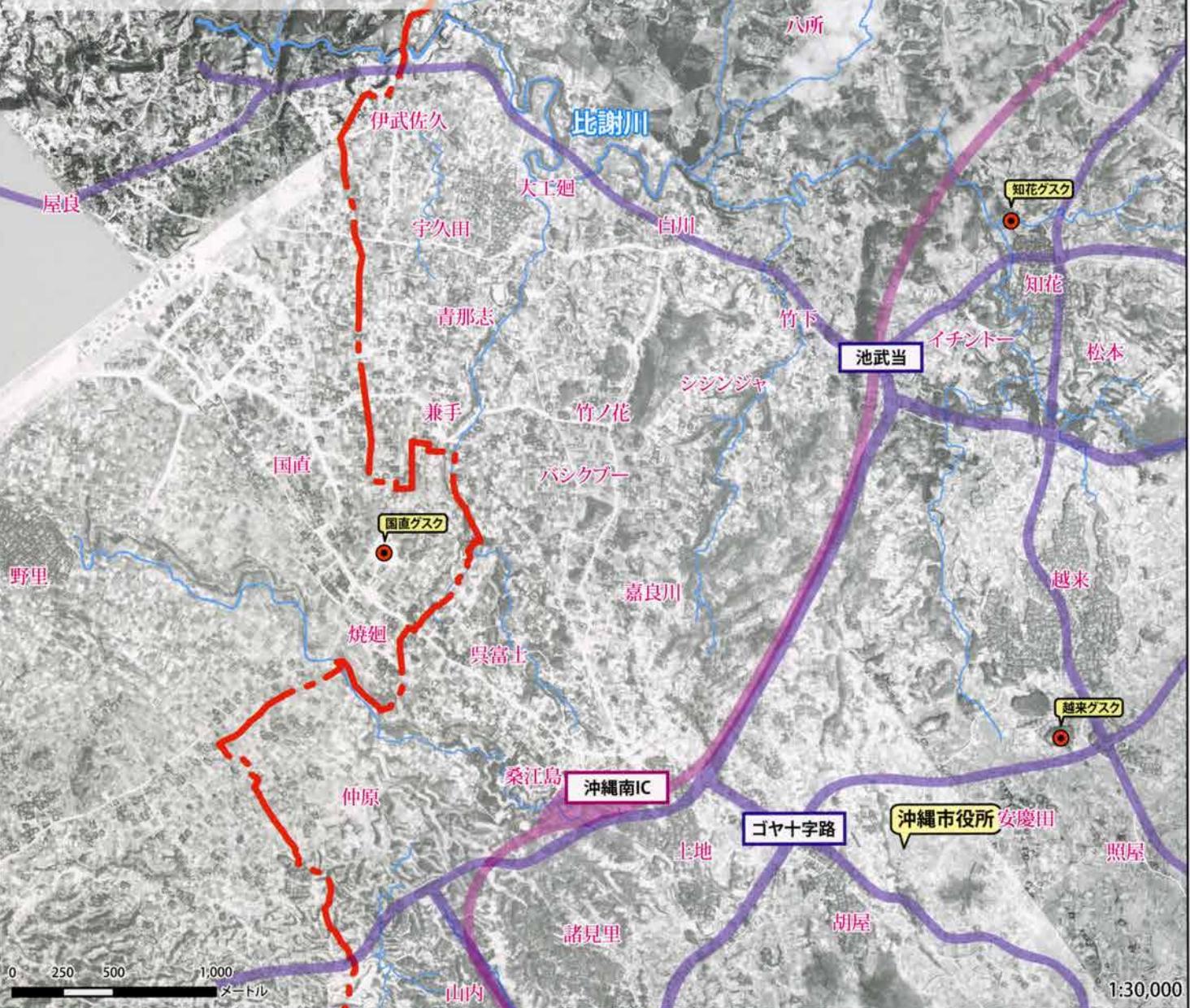
この写真からは、現在の嘉手納飛行場の範囲がほとんど農地であったことがわかる。農地のあいだに点々と黒っぽく見えるのが屋敷である。画面中央、比謝川が蛇行している個所の近く、屋敷が集まっているところが宇久田・大工廻の集落である。

宇久田・大工廻以外は屋敷が点在しているが、そのほとんどが屋取集落である。

現在の嘉手納弾薬庫地区の範囲には、山林が広がる。戦後の弾薬庫は全体が緑地になっているが、この当時は、谷あいに屋敷や耕地があり、御殿敷・倉敷などの屋取集落があった。

今回の調査では、宇久田、大工廻、御殿敷、倉敷の集落の出身者をたずね、戦前の人々の暮らしの様子と、文化財たりえたかもしれない事物について聞き取り調査を行なった。

この章では、これら聞き取りの内容をまとめ、それぞれの集落の暮らしぶりを述べる形で、調査の報告とする。



戦前の環境——川・道・ハル

嘉手納飛行場と嘉手納弾薬庫地区は、比謝川水系に沿って水の豊富な低地があり、ターブックワーと呼ばれる水田の集中する地域がところどころにあった。比謝川が降雨によって氾濫し、河川の周辺が水没することもままあった。嘉手納飛行場は、戦前はほとんどが耕地だったが、嘉手納弾薬庫地区は、丘陵と谷が入り組んだ地形で、山林が多く、耕地は谷あいや丘陵上部に作られた。

交通網は、越來村を経由して嘉手納と具志川村方面を東西に結ぶ県道が最大の路線だった。この県道には、他の県道や村道などが接続していた。路肩にトロッコレールが敷設されている道もあり、サトウキビを嘉手納製糖工場へ搬入するのに使われていた。

(※聞き取り集落を記号で表し、呼び方が異なる場合は小さい文字で調査時の話者による発音を示した。 **宇**: 宇久田 **大**: 大工廻 **八**: 八所 **御**: 御殿敷 **倉**: 倉敷)

河川

① ウフガーラ（比謝川）

ひじやがわ **宇** **大** **御**、ウフガーラ **因**、ジャクジャクガーラ **因**
カーラカーラ **御**

地域一帯の流れを集める大きな川。幅5~6間（9~11m）。

比謝川河口部には嘉手納の町があり、山原と那覇を結ぶ中継港として栄えていた。かつての**比謝川**は飲めるくらい水がきれいで、洗濯や水浴、馬に水浴びをさせたりするのに使われた。

② カーラ メーヌカー **宇**¹、カーラ **因**

比謝川の支流のひとつ。合流地点は三角になっていた。
サンカク

③ 青那志ガーからの流れ

青那志ガーから発する小川。夏場は雨が降ったら水が流れが、冬は枯れている。下流では幅が狭く、深くなっていた。

④ アブシコーラー

大工廻の北東部、**比謝川**が大きく蛇行しているあたりの川岸。川の水流で土手がよく壊れる箇所だった。

⑤ ガーラガーラ

比謝川の途中にあった、石が多くて歩きにくい場所。

⑥ クグイ

大工廻北東部の、**比謝川**が大きく蛇行している箇所。

⑦ 瑞慶山川

与那原川の上流域。戦前の呼び名は不明。瑞慶山は倉敷に多い屋号で、沖縄戦で捕虜となった倉敷の人が、米軍に川の名前を聞かれて「瑞慶山」と答えたため、ズケヤマガーラと呼ばれるようになったという。

⑧ 与那原川 ユナバルガーラ **倉**、カーラ **因**

瑞慶山川の下流域。幅5m、深さ1.5m。子どもたちが泳いで遊んだ。また、白川付近にセメントで水をせき止めていた箇所があり、そこで洗濯や水浴びをした。

1 メーヌカー……話者によれば、井戸と別に、河川もメーヌカーと呼んでいたという。

⑨ カーラ

幅1~1.5m、深さ0.5~0.6m。川の両側には草が生い茂り、川が見えないくらいだった。橋は架かっておらず、飛び越えて渡っていた。

⑩ トーニガー

カーラ **因**、トーニがわ **倉**、トーニガー、トーニガーガーラグワー **御**
ウドゥンシチ クルク
幅はおよそ3~4.5m。御殿敷と久得の境界。川は浅く、歩いて渡ることが出来た。川の向こう岸は墓地帯になっていた。川は洗濯などの生活用水として利用されていた。夏になるとエビやウナギなどの魚を獲った。

⑪ カーラ（用水路） ようすいろ、カーラ **御**

御殿敷内を流れている用水路。幅と深さは場所によってまちまちで、人が歩いて渡れる浅い箇所もあった。生活用水、農業用水として重宝していた。日照りになると川の水をせき止めて畦に流せるような仕組みを作っていた。

⑫ 谷間にある小さな川

小さな溝のような川で、大雨のときだけ水が流れた。

⑬ ガーラガーラ

トーニガーの途中にあった滝。上流で雨が降ると水量が激増し、水音が御殿敷中に轟いた。滝の下には直径20mくらいの滝つぼがあり、島のように突き出た大岩があった。滝は2段になっていて、下段でも滝つぼから高さ6mほど²あり、子どもは滝つぼに飛び込みをして遊んだ。

⑭ ガーラガーラ

集落のなかを流れる川³の一部に落差があって、滝になっており、ガーラガーラと呼んでいた。この付近は流れが曲がりくねっていて、両岸も急傾斜だった。

2 高さ6mほど……高さ10mはあったという話者もいたが、ここでは他の話者の話にも出ている6mという数値を採用した。

3 集落のなかを流れる川……瑞慶山川の上流域。

道路

15 県道

ケンドー^宇^田^御、シラカーミチ^大

嘉手納と具志川村赤道方面とを結ぶ県道。大工廻・白川を経由し、メンジャ橋を越え、美里尋常小学校の所まで続いている。

16 県道

屋良から国直、上地を経由して胡屋に到る県道。

17 新学校の前の道

新学校の前を通ってパンクブーを抜け、上地のほうに行く道。メヌサクを越える場所には石橋が架けられていた。

18 村道

大工廻から御殿敷に向かう村道。この道を境に、東側が大工廻、西側が宇久田となる。大工廻の綱引きはこの道で行なった。比謝川を渡る箇所には^{サンパン}棧橋と呼ばれる石橋が架かっていた。

19 宇久田の中道

宇久田の屋敷地の中心を通る道。平良小のそばから事務所の前を通る。

20 大工廻の中道

大工廻の中心を通る道。

21 池之根又道

イチソニースミチ^大、事務所の後の道^中

池根のあたりを通って比謝川まで達する道。西大道の前を通り、事務所の後を通る。馬車は通れない。東側に向けてゆるく上り坂になっていた。

22 馬車道

八所の真ん中を通っていた道。馬車が通れる大きい道で、クラシチに続いていた。途中で枝分かれして平田にも続いていた。

23 あぜ道

八所の西側にあるアマリターブックワーのあぜ道。あぜ道を通り、山を越えると、御殿敷の^{ワドー}大道へ行くことができた。道の幅は結構狭く、簡単な荷物だけのときにあぜ道を通っていた。馬車で御殿敷方面に行こうと思ったら字白川から回り道をしなくてはいけなかった。

24 御殿敷の真ん中の道

村道から続く道。集落でもいちばん広い道だった。クラブを越えたあたりから坂道になる。^{トウティーグー}土帝君の改修と同じ時期に作られた。約10cmの大きさの石が敷き詰められていた。石は森根・嘉良川方面から買ったもので、馬車で運搬してきた。作業は御殿敷の人たちが協力して行ない、費用は集落で徴収した。

25 長田又道

クラブから東側に向かって伸びている道。^{ナガタ}長田と呼ばれる水田地帯を横切っている。馬車が通れる大きな道だった。

26 奥原小又道

御殿敷を南北に通る道。^{ナガタ}奥原小の家の前を通る。

27 イングワー坂

御殿敷から倉敷に行く道の途中にある坂。急な坂で、イングワーマジム（犬の化け物）や幽霊が出るという噂があった。

28 チュランダ坂

倉敷の東、吳屋小のほうに登っていく坂。険しい坂だった。

29 ミートウ坂

倉敷の西側にあった坂。

トロッコ

トロッコ^宇^田^御、トゥルミチ^御

嘉手納製糖工場が所有していたトロッコ軌道。レールに乗せたトロッコを馬に引かせてサトウキビを運搬する。¹⁵¹⁶県道、¹⁸村道、²⁴御殿敷の真ん中の道などの路肩に敷設されていた。

御殿敷では、トロッコを利用して、サトウキビやスラブ用の砂を運んでいた。製糖時期の約4ヶ月間は、トゥルムチャー（トロッコ運送者）が毎日朝晩2回、嘉手納製糖工場にサトウキビを運んでいた。トロッコまでは家族総出でサトウキビを運ぶ。トロッコの終着点は広場になっていて、そこにサトウキビを積み積む。

宇久田では、トロッコを使うのは製糖期の半年間だけで、普段は通らなかったという。台車は製糖工場のもので、製糖期が済んだら修繕してきれいにして、翌年に備えた。レールの修繕は、製糖工場が雇った人夫が行なっていた。

ハル名

バシクブー

名前の由来は不明。クブーは一般的には窪地の意味だが、バシクブー一帯は宇久田・大工廻から見て上地に向かって標高が高くなっていく土地で、話者は窪地というイメージは持っていないという。

サクマラ 佐久間良

ギーニの隣の一帯を指すハル名。

ギー二 儀根

現在、儀根原という小字に名が残っているが、戦前にギー二と呼ばれていた一帯とは範囲がやや異なる。

タナカジ

白川とシンジャの中間にある丘陵。

ヌシジ 野志地

宇久田から分家していった5、6軒くらいの家があったが、戸数は少なく、独立した集落とはみなされていなかった。

インジャクー 伊武佐久

インジャクー宇大、インジャクーバル宇

ヤードウイ
屋 取集落、畠地があり、サトウキビなどが生産されていた。やや窪地になっている。ムスクーヤー（乞食）がいるところでもあった。

サシダ 差田

宇久田の北のあたり一帯。

タケニシ 高江洲グーフ

大工廻の北にあった丘陵。周囲と比べると標高が高かったが、範囲は広くない。この一帯は個人の所有地だったが、うち200坪くらいを宇久田あるいは大工廻が集落で買って埋葬場とし、家畜が病死するとそこに埋葬した。

メー サク 前又迫

ミーガッコ
新学校の背後にあった谷間。斜面の高さは2~3mでとても傾斜の急な狭い谷だった。谷底は小川になっていて、国直シーからの水が流れてくる。

大工廻や宇久田の人々の墓がたくさんあった。谷底の小川は氾濫しやすく、墓に行くための小さいあぜ道はよく荒れていた。

シリバルー

シリバルー大御、シリバルーマーチュー宇御
シリバルーヤマ御
イリシリバルー宇御、アガリシリバルー宇大

白川から比謝川を渡って北側の丘陵・山林地帯。西側の一帯は西シリバルーと呼ばれ、5、6軒くらいの家があった。東側の一帯はアグニという家があり、東シリバルーと呼ばれた。

木がたくさん茂っていて、昼間でも暗く、よく人が迷っていた。幽霊が出るという噂もあった。下枝を落とすなど、きれいに管理された丈高い松がたくさん生えていて、戦時中、防空壕を造るために日本軍が伐り倒して持っていました。

また、八所から御殿敷に行くときは、一度南下してシリバルーを通る道を使わなければいけなかった。

宇久田・大工廻、御殿敷の人々は、燃料となる薪や松葉を取りにシリバルーによく行っていた。

アマリターブックワー

アマリ宇御、アマリターブックワー八御

ウフドー
大道付近から比謝川まで続く水田地帯。真ん中には細い溝のような川が流れている。この川を境にして西が御殿敷、東が八所だった。アマリターブックワーの土地の所有者は主に大工廻、オーナジ青那志などの南の集落の人たちで、御殿敷や八所の人でここに土地を持っている人はいなかった。

ナガタ 長田

御殿敷の真ん中の道から東側にある地域。地域内に田んぼが集中していることからそう呼ばれる。

ナジチュークワー

御殿敷の真ん中でクラブよりも北側の地域。ヤギの餌となるナジチューがたくさん生えていた。宇久田・大工廻からも草をとりに来ていた。

イナグマタ

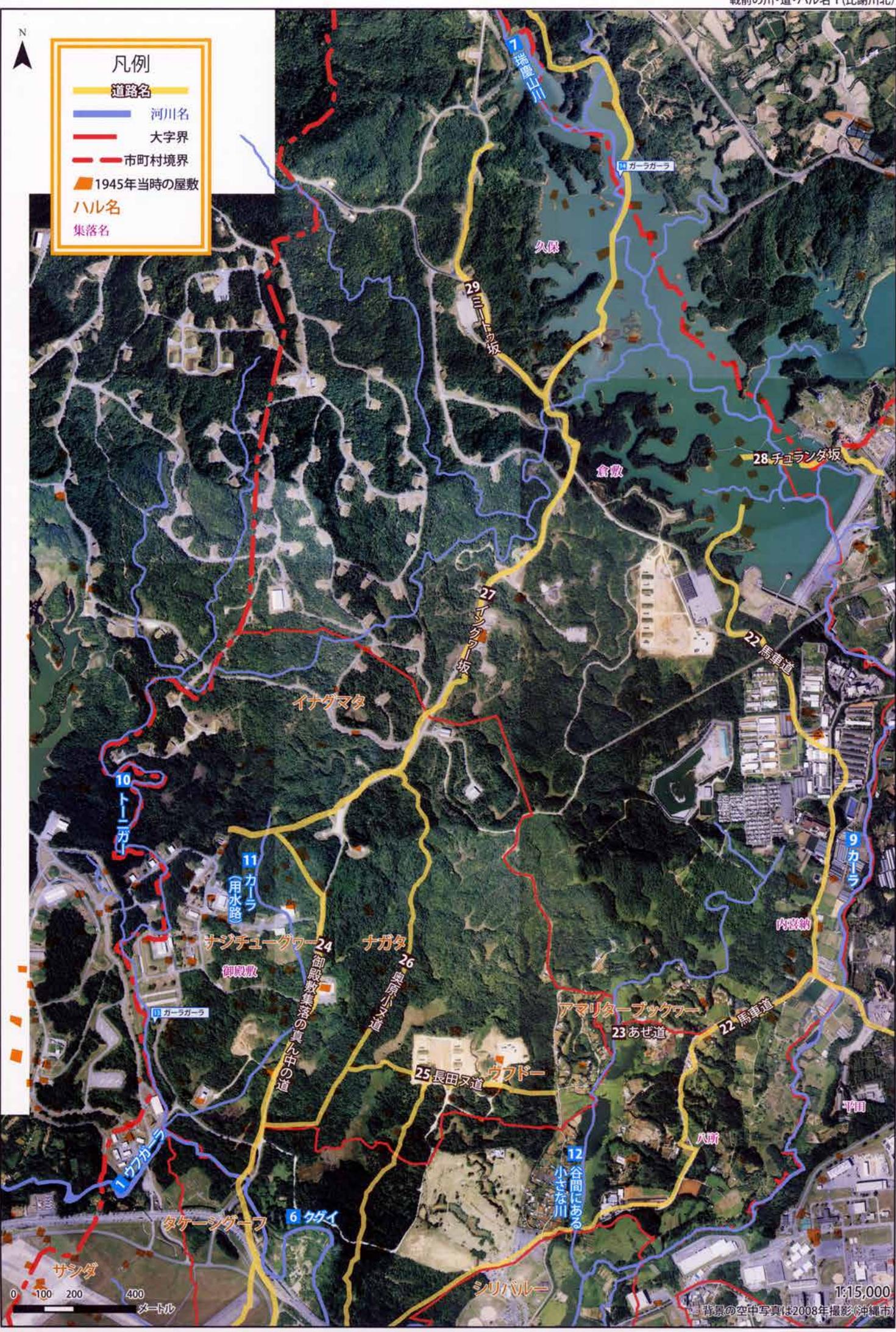
イナグマタバル宇、イナグマタ御

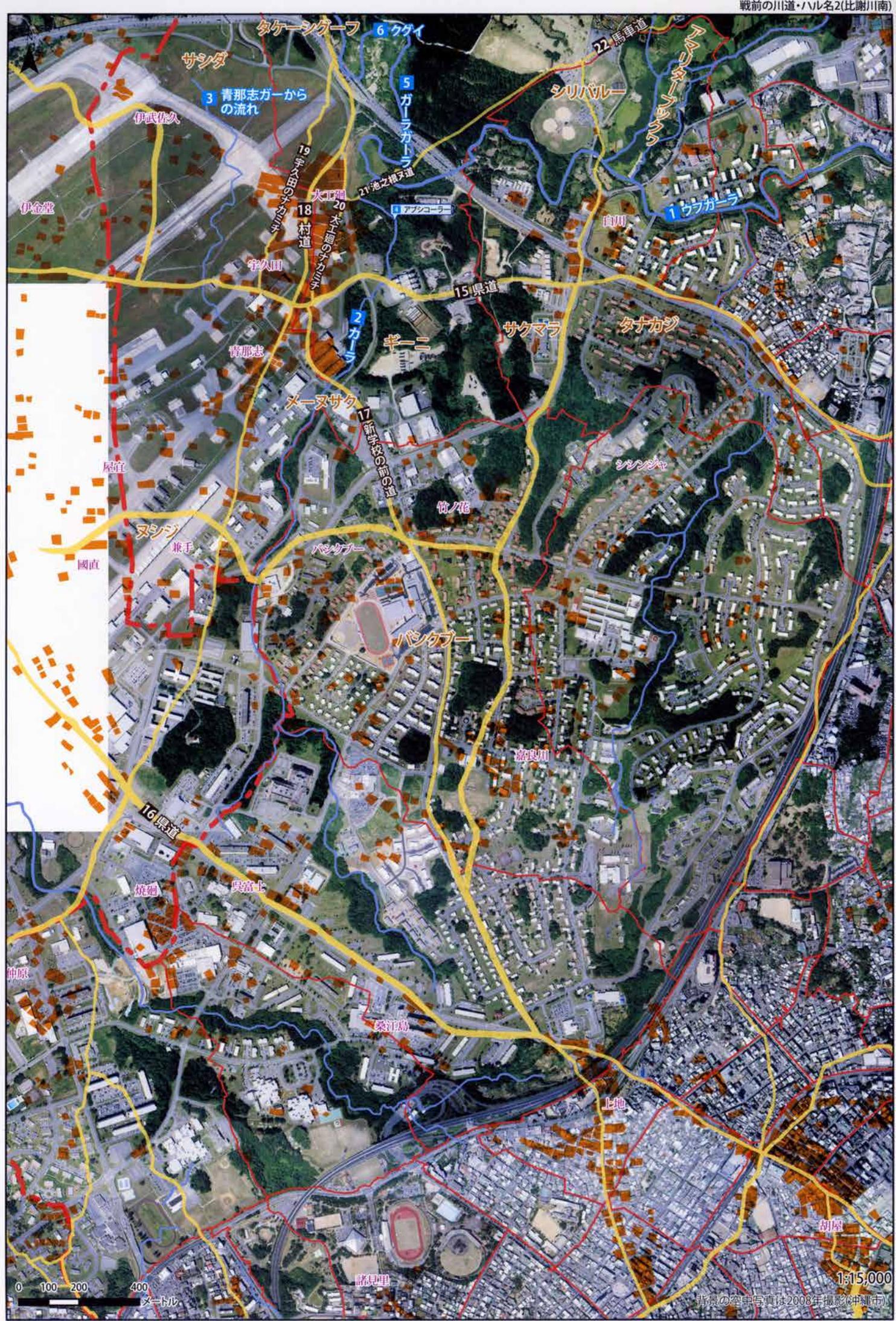
クラシチ
御殿敷から倉敷に行く道の途中にある深い谷間。このあたりはイノシシがいっぱいいる場所だった。谷間の形が女性の股のように見えることからイナグマタと呼ばれる。



凡例

- 道路名
- 河川名
- 大字界
- 市町村境界
- 1945年当時の屋敷
- ハル名
- 集落名





ウクダ ジャクジャク ヤトクル 戦前の宇久田・大工廻・八所

宇久田・大工廻の歴史

宇久田・大工廻は、旧越来村の西側境界にあった集落である。宇久田は戸数40軒くらい、大工廻は戸数100軒くらいで、道を隔てて隣り合っていた。同じ拝所を拝んだり、ウマチーと一緒に行なうなど、2集落のつながりは深い。

どちらも古い集落で、『琉球国由来記』など近世期の歴史書にも名前が出ている¹。

伝承では、内乱で負けた北山王の八男が伊波城主となり、それに従ってきた家来の一部が大工廻の集落を建てたと伝わっている。最初は⑫クボー周辺に集落があったが、人口が増えてもっと広い耕地が必要になったので、①ウフガーラ(比謝川)の南、現在の大工廻の位置に移ったという。(クボーの位置はp63~p65参照)^{ヒラマチャュー ウング ピジヤ トクミガチ キンペーチン} 平松尾、雲藏比嘉、富田、喜屋武親雲上などの家系は、この北山に由来するといわれている。また、これとは別に、越来グスクに出仕していた士族を祖とする當など越来系統の門中もある。

宇久田は、初めは比謝川に沿って水田や畑を拓き、その周辺に住んでいたが、次第に大工廻と隣り合う位置に移ったという。近代には、大工廻からの分家筋や、明治以降に首里から移住してきた人たちが加わった。

大工廻との関わりは深く、宇久田の住民はかつては大工廻のニンシェーナービとして大工廻の行事に参加していた。しかし、近代に入るとだんだんニンシェーナービから抜けていき、最後はわずかしか残らなかった。

戦後、宇久田も大工廻も、そのほとんどが嘉手納基地の滑走路となり、住民は散り散りに別の地域に移り住んでいった。現在は、宇久田と大工廻それぞれで郷友会を結成している。

周辺の集落と交通

宇久田・大工廻の周辺にある集落はみな屋取集落である。もっとも近いところでは、伊武佐久、兼手、青那志といった屋取集落があった。

なかでも青那志は、宇久田や大工廻とのつながりが深く、宇久田・大工廻から分家した家庭が青那志に移り住んで、首里から移住してきた士族の家庭と入り交じっていた。基本的に青那志の人々は大工廻の行事には参加しないが、大工廻から分家して青那志に移り住んでいた家庭は、綱引きやウマチーなどの大工廻の行事に参加していた。

1 大工廻の名前は『琉球国高究帳』『琉球国由来記』など種々の文献に見られる。宇久田については、『琉球国由来記』に大工廻と併記されて「可陽」という集落名が見えており、これが宇久田集落の前身と考えられる。なお、『中山伝信録』には、「可陽」という村名は見られないが、「宇慶田」の村名が記載されている。

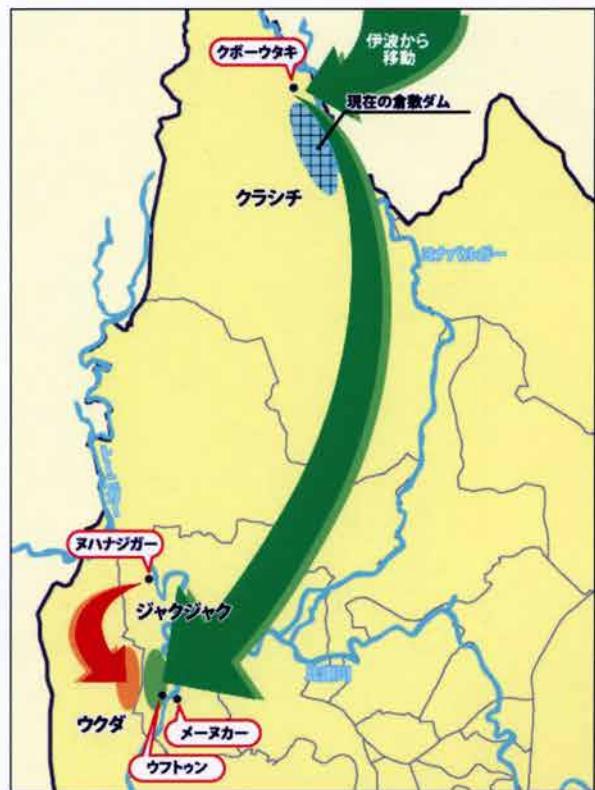


図4 宇久田(赤)・大工廻(緑)の集落移動

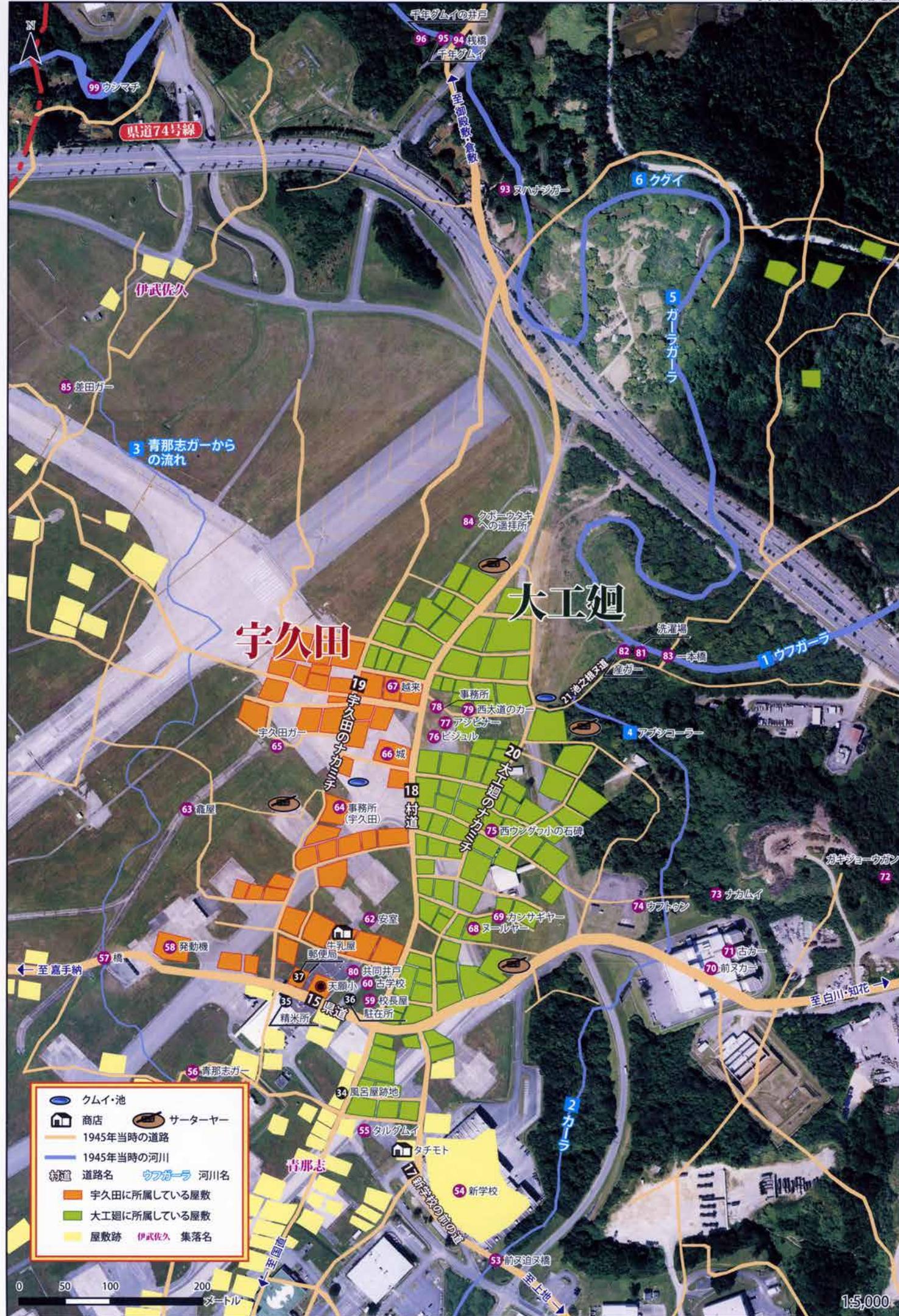
地籍の番地では、青那志の半分は字大工廻に、半分は字宇久田に含まれていた。昭和の初め頃、青那志原・カニンティー原・ヌシジ原という3つの小字が字宇久田から分割されて字青那志が新設されたが、現在は青那志という字はない。

この地域には小川や小さな谷が多かったので、馬車で通行しやすいように、大正から昭和にかけてあちこちに石橋がかけられた。^{イシ} ④石グムヤー橋、^{メー} ⑤前又迫又橋、^{サク} ⑥ウジャミ橋、^{ハシ} ⑦棧橋などである。石グムヤー橋は現存しており、棧橋も橋脚部が残っているとのことである。⁽⁴⁾ (p68-69)、⁽⁵⁾ (p70-71)を参照)

^{はし} ⑧橋は現在は造成によって消滅しているが、石橋だった可能性がある。^{イッポンバン} ⑨一本橋は丸木橋で、シリバルーや八所方面との往来でよく使われていた。松の丸太を一面だけ削り、両岸は杭と針金で留めるという簡単な造りで、川が増水すると橋が流される危険があったため、雨が降ったときはウジャミ橋を使った。

地形

宇久田・大工廻の周囲は、東から西に向けて、また、①ウフガーラ(比謝川)に向けて南から北に、ゆるやかに低くなるなだらかな平地である。しかし、平地のあいまに、比謝川に向けて流れる小川や小さな谷が走り、方言でムイやシーと呼ばれる石灰岩丘が、平野のそこかしこに、ぼつんとそびえて、地形に変化を与えている。この平地に残存する石灰岩丘は、現在も基地内に残っているものが多い。



④9角石……(p68-69、p70-71) チンヌシーともいう。頂上に2つ突きだした岩があり、それが角のように見える。岩山の北麓には森根(バシクブー)の拝所があり、また、岩山のすぐ南側には沖縄戦の降伏調印が行われた場所があって、記念碑が建てられている。

戦前は、岩山の頂上にたくさんの人骨や昔の鎧甲が散らばっていたという。現在はそれらの遺物は見られないが、踏査で種別不明の骨片と、ヒトの臼歯が発見されている。

言い伝えとして、昔、ある女性が、読谷のある集落を呪うために石を頭に載せて持ってきたという話が伝わっている。チヌシの頂上にある2つの石のうち、大きなほうは南向き、もうひとつはとがったほうが読谷のほうを向いていると言われていた。読谷から、その岩の向きを変えるために何人かの人が見に来ましたが、10人や20人で動かせるような岩ではないということがわかって、あきらめたという。

⑤0クビチリジー……(p70-71) 頂上は平らな大岩がのっているかたちをしていて、その大岩と土台部分に切れ目があるよう見えるので、首切と呼ばれているという。現地踏査の際に、クビチリジーの頂上部から、先史時代のものと思われる土器数点が採取された。(詳細はp16~22を参照)

⑥0イームイ……(p68-69、p70-71) 丸いかたちの丘で、この丘から南はバシクブーになる。丘は宇久田・大工廻の墓地地域となっていた。

⑥0国直シー……(p68-69) クンノーシーともいう。旧北谷村(現嘉手納町)国直にあった大きな岩山である。現在も残っているが、中飛行場建設のために一部が切り崩されたことと、米軍施設が設置されたため、戦前とは大きく姿を変えている。

岩山の南斜面は墓を造るのに向いた土地で、大工廻の古い家系には、ここに墓を作っている家もあった。また、西側斜面からはフナウクイ(船送り)をした。フナウクイは、遠くに旅立つ人の船出を、その親族が見晴らしのいい場所から見送るという行事である。国直シーからは、船が那覇を出るところから残波岬を越えるまでずっと見えたそうで、太鼓を叩いたり唄を歌ったり、酒や御馳走を広げて、海に行く船を楽しく見送った。

水利

聞き取り調査によれば、大工廻は①ウフガーラを中心として水に恵まれた土地だったが、雨が降ると洪水になることも多く、②カーラ沿いの一帯はしばしば③ナカムイのあたりまで冠水していた。湧水や井戸も多く、近代には各家庭で自家用の井戸が掘られた他、④西大道のカー²、⑤共同井戸のような共用の井戸も掘られた。

かつては、⑥前ヌカーが集落でただ一つの井戸だったという。石積みで長方形に囲ってあり、夏場にはあふれ出すくらい豊富

² 西大道のカーは、現在90歳代の話者が幼い頃(大正期)に井戸が掘られたが、その前はよその家に行って水を汲んでいたという。



写真18、19 クビチリジー(上)とウブガ一付近(下)

に水が湧いていて、近くに馬の水浴び用の池も作られていた。

⑦古カーは前ヌカーよりも前に使われていたが、涸れたために前ヌカーに移ったといえがある。戦前、すでに水はなかつたが、井戸の石積みは残っていた。

⑧産ガ一は、産水やミジナディー³に使う水を汲む井戸だった。集落内に個人井戸が増えたため、生活用水としてはあまり使われなくなっていたが、産ガ一の近くの川べりは大工廻の人の⑨洗濯場となっていて、洗濯や水浴びをするために立ち寄る人は多かった。

前ヌカー、古カー、産ガ一は大工廻の住民によって井戸の拌みが行なわれていた。

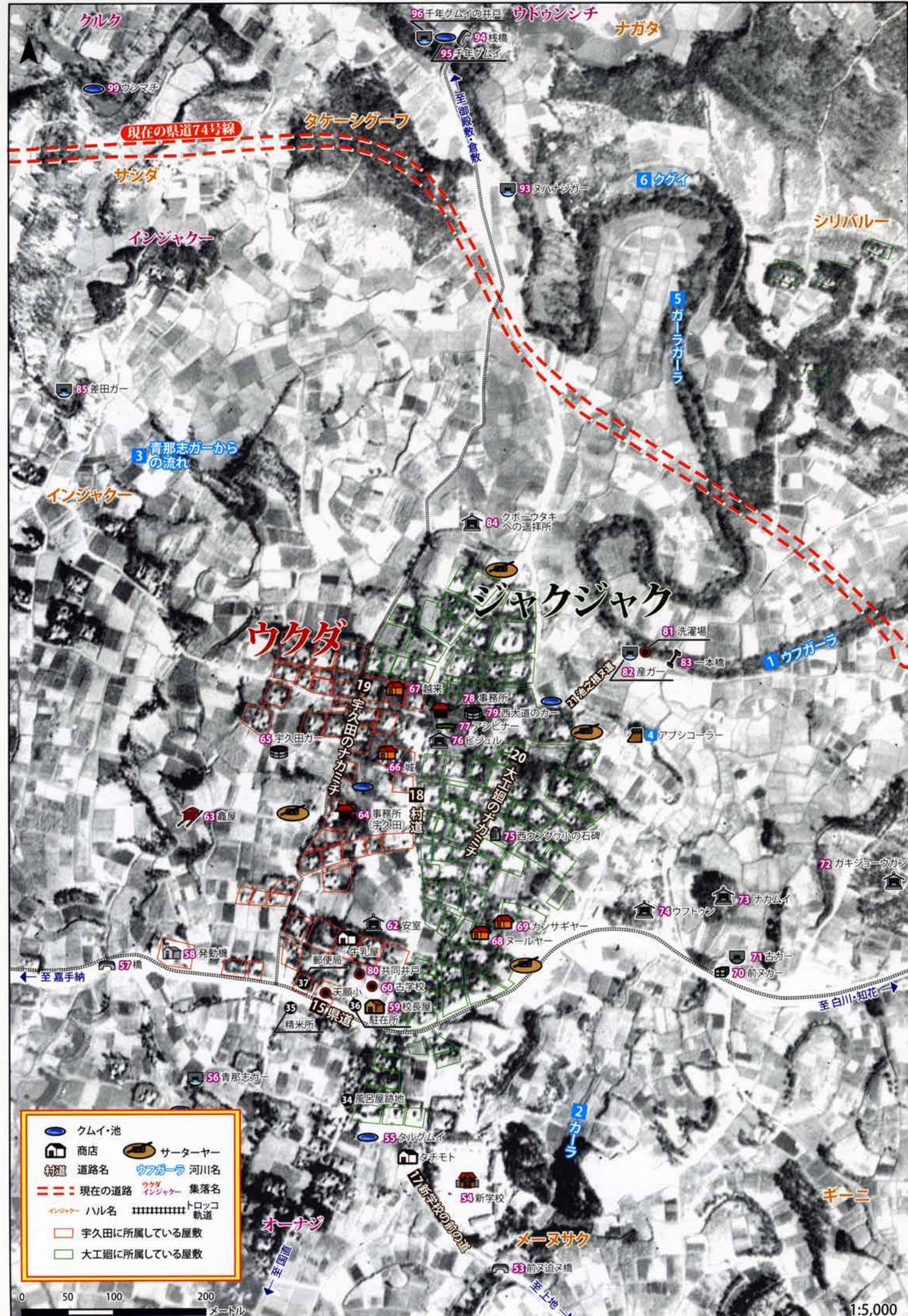
一方、宇久田の住民は⑩宇久田ガ一と⑪ヌハナジガ一が拌んでいた。この2つの井戸は、大工廻の住民は拌んでいない。

その他に、インジャクーの畠地の中に⑫差田ガ一があった。差田ガ一は拌みはされなかったが、畠仕事のときの飲み水などによく利用された井戸だった。

その他、水利に関わる話題として「七堰」がある。

琉球王府時代に宇久田の⑬城という家が中心になって、このあたりの川に七箇所の堰を設けたといい、城家では、七堰設置を記念する石碑を建てたという(⑭七堰の石碑)。この石碑は非常に古いもので、文字もいろいろと刻まれていたという。しかし、沖縄戦を境に碑の所在はわからなくなってしまった。(⑭はp70-71を参照)

³ ミジナディー……赤子や子どもの額に水をつけて、魔よけのおまじないをすること。水をつけながらアンマークートーという唱え言葉を言うことが多い。



七つの堰の名前はイチャバー堰、キシラ堰、白川堰、桃原堰、^{イー}^{シラカバー}^{トーバルイー}
与那原堰、ムンドー堰、ガートウイグムイである。七つの堰のうち、^{イー}^{ムンドー}^{ガートウイグムイ}は、聞き取り調査でおおよその位置を確認できた。また白川堰については、^{シラカバー}
屋取のあたり⁴にあったという。

堰とは、土手を築いて川をせき止めたダムのようなもので、排水口は大きさが決まっており、線香1本が消えるまでというふうに時間を計って排水することで、排水量の管理をしていた。

宇久田は、七堰のうち、ムンドー堰とガートウイグムイを所有していた。ムンドー堰とガートウイグムイは、御殿敷の北部にある、隣接する谷筋を2つせき止めて作られたもので、1つにつながって5,000坪ほどある大きな湿地帯になっていたという⁵。この2つの堰からの用水は、比謝川の上に松の木で造った樋をかけて川の南に流していた。用水は、水田をサトウキビ畑にしてから使われなくなった。

宇久田尋常小学校の道向かいには、タルグムイという広い池があった。深さはないが、約500坪の広さがあり、四角いかたちをしていた。池は共有地だったが、戦後は地籍を分割して何軒かの家の個人名義になっている。戦前は、主に青那志など近くの住民がよく使っていて、水を汲んだり、馬の水浴びに使ったりした。小学校の目の前にあったので、学校の机を洗うにも使われた。

この池では食用の鯉が飼われていた。那覇の人が嘉陽小に委託して管理していたもので、嘉陽小では、1年に1回、鯉をたらしに入れて、軽便鉄道で那覇に出荷していた。

産業

近世の史料である『琉球国由来記』には、大工廻村から薪炭が納められていたという記事が残されている。聞き取り調査によれば、近代でも何軒かは炭を生産していた家があり、比謝川の北側には炭を焼くところがたくさんあったという。薪も、^{オーナジ}
^{ウドゥンシテ}
御殿敷やバシクブーの方で取っていた。

農業では、大工廻から近いバシクブー、インジャクーのあたりの地域は、おもに畑として利用され、サトウキビやイモを生産していた。大工廻の⁶メーヌカーの近くなど、一部には水田が広がる場所もあり、米も作っていた。しかし、明治以降はサトウキビの生産が増加し、水田の多くが畑に変えられていった。

サトウキビ生産については、宇久田と大工廻の人々によって製糖組合も結成された。この組合は、宇久田の人が中心になって立ち上げ、大工廻の人も加わって、20世帯以上が参加している。

4 聞き取りでは場所の詳細は不明だったが、文献情報のなかに「白川せき橋」という橋があり、白川堰はこの橋の付近を指すかもしれない。

5 御殿敷の話者からは、ムンドー堰とガートウイグムイは別の場所であるという回答を得ており、地図上ではこの2つの堰を別の個所として記載してある。なお、宇久田の話者の言う、2つのイーがつながった湿地帯は、御殿敷の話者から聞き取ったガートウイグムイの特徴と多くの点で一致している。

た。組合では^{ハンド一ホー}⁶発動機⁶を購入し、従来のサーターヤーでの製糖から切り替えた。昭和13年か14年頃のことだったという。ただし、宇久田や大工廻の全ての家庭がいっせいに発動機に切り替えたわけではなく、集落内にはまだ何軒もサーターヤーがあった。

また、サトウキビ以外の換金作物を栽培しようと、製糖組合が中心になってユリの栽培にも取り組んでいた。掘り上げたユリの球根はアメリカなど海外に向けて輸出され、よい収入になったという。沖縄戦の前までは順調に続けられていたが、沖縄戦以降は途絶した。

公共施設・店など

宇久田と大工廻には、それぞれ事務所と呼ばれる、現在の公民館のような建物があった。⁷が宇久田、⁸が大工廻の事務所である。大工廻の事務所は、集落の話し合いにはもちろん、アシビのときの舞台と支度部屋としても使われ、また、あるときは偉い軍人が特別講演を開くのにも利用された。

大工廻の事務所の南側は⁷アシビナーと呼ばれる広場になっていて、さまざまな行事に利用された。広場の真ん中にはアシビナーをすっぽり覆うくらい巨大な松の木が枝を広げていて、その根元に南向きに⁹ビジュルの祠があった。



イメージ図1 大工廻のアシビナー付近

宇久田・大工廻には何軒かのマチヤグワー（個人商店）があり、天顔小、タチムトゥなどの家が日用雑貨を扱っていた。また、チーチーヤー真玉橋では牛乳の配達販売をしていた。

その他、聞き取りでは話題が出なかったものの、文献に記載されている公共的な施設として、郵便局、駐在所、精米所があったようである。

また、西ウングワ小（ウングワ比嘉）の屋敷の前には大きな石碑があった（¹⁰西ウングワ小の石碑）。2m弱の幅があり、字が書かれていたが、書かれていた内容は不明である。

6 発動機……発動機は本来ガソリン等を燃料とする動力機のことであるが、ここでは、動力機を利用した製糖機構までも含めて発動機と呼ばれている。

宇久田・大工廻にあった公共施設で最大のものは、宇久田尋常小学校（宇久田国民学校）だった。沖縄戦直前の頃の学区は、宇久田・大工廻・御殿敷・嘉良川・倉敷・青那志・白川・森根の8ヶ字だった。

宇久田尋常小学校は当初、**宇久田**の南端に建設されたが、後に**大工廻**の南端に新築移転した。もと学校があった場所は**古学校**と呼ばれ、移転先は**新学校**と呼ばれていた。

新学校は、1938年に完成した。敷地は約3,000坪。校舎を作ったのは山原の大宜味から来た桑江という大工だった。校舎の屋根は瓦葺きで、後にスレート葺きの校舎も増築された。手動式のサイレンと風見鶏を乗せたやぐらもあった。サイレンは時報の役割をしていて、お昼と夕方5時に鳴らされていた。4kmほど離れた**御殿敷**でもサイレンの音を聞くことができたという。

北側の1棟は講堂で、御真影を収める建物もあり、明治節・紀元節などの行事はここで行なっていた。戦時中には夜に青年学校も開かれ、戦闘準備などをしていた。

小学校の裏手は松林になっていて、少し盛り上がって丘のようになっていたが、そこから急に落ち込んで、**メーヌサク**という谷になっていた。そこは墓地で、小学生たちのあいだでは、ここで幽霊を見たという噂が飛び交っていた。

なお、**古学校**のあった場所の東側道沿いには、小学校に勤務する校長をはじめとする教員・職員のための瓦屋の住宅があり、**校長屋**と呼ばれていた。

祭祀と年中行事

大工廻では、ウマチ⁷のときには⑦ウフトゥン、⑧ナカムイ、⑨ガキジョーウガンの3つの拝所と⑩クボーに祈願をささげた。
(⑩)はp63-65参照)

クボーへの祈願は、何年かに1回は倉敷まで赴いて直接祈願をささげたが、例年は、ウフトゥンにある遙拝所から拝んだ。

大工廻の集落としての祈願は、他にカーウガミがあって、⑪前又カバー、⑫古カバー、⑬産ガード⁸を拝んだ。他に、門中や家庭単位で、正月に⑭ビジュルを拝んだりした。

宇久田の人々は、ウマチでは大工廻と一緒にウフトゥンなどを拝んだ。宇久田だけが拝む場所としては、⑮ヌハナジガード⁹という井戸や、宇久田が大工廻から分離したときに中心になったといわれている嘉陽、⑯安室、⑰越來、与那原という4家を拝んだ。(嘉陽、与那原は位置未詳)

宇久田も大工廻も、現在は嘉手納基地の外に合祀所を作り、これらの拝所を一箇所にまとめて祀っている。

6月 綱引き

大工廻は、前近所、中近所、後近所の3つに区画がわかれています。綱引きのときは前近所が前、中近所と後近所が後と、2つにわかつて勝負した。カヌチ⁸は前安里小のそばだった。綱はアシビナーで縫った。

7 ウマチ……米や麦、芋などの農作物の豊作を願う行事。



イメージ図2 宇久田小学校



写真20 宇久田小跡の記念碑

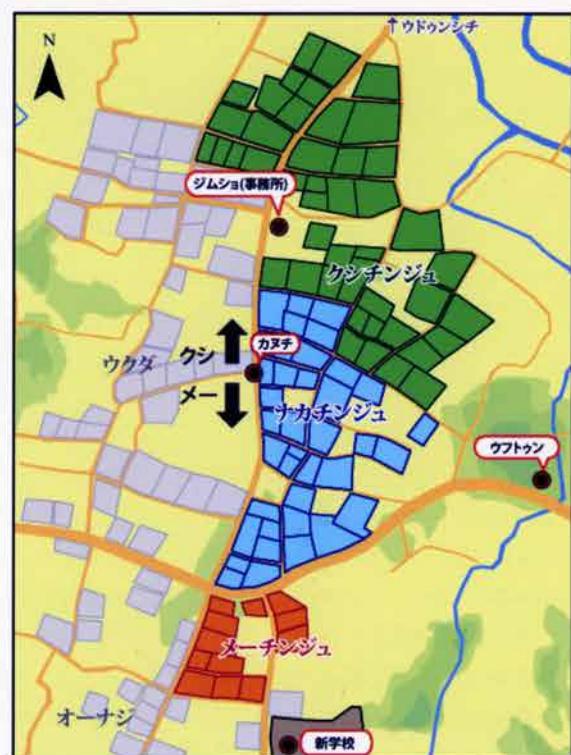


図5 大工廻の組分け

8 カヌチ……沖縄本島の綱引きは一般に、2本の綱の一方にそれぞれ輪をつくり、輪と輪を重ねて棒で貫くことで1本の綱にして引くが、その輪と輪が棒で留められている部分のこと。

7月7日 ハタ旗スガシー

⑥カンサギヤー内に保管されている道具・装具類の虫干しをする。村アシビを行なう年には、カンサギヤーで拌みをし、⑦アシビナーで青年会が村旗の旗スガシー⁹をした。アシビがない年は虫干しだけ行なった。

7月15日晚～17日 エイサー

盆の夜、青年たちが太鼓や三味線を鳴らしたり、踊ったりしながら集落中を練り歩く。**大工廻**のエイサーは、カンサギヤーの前で踊ってからスタートした。**大工廻**はエイサーが盛んな集落で、近くは諸見里や野里などの集落、さらには北谷村砂辺や嘉手納、読谷村**大湾**など遠方の集落ともトゥイケ¹⁰をしていた。

宇久田は太平洋戦争の少し前に青年団を中心にエイサーを始め、何年かはエイサーを続けていた。しかし戦争が激しくなつてからはエイサーができなくなつた。

10月 カンカー

魔よけの祈願をし、肉を食べる行事。**大工廻**では旧暦10月に行なった。家畜を潰して集落の入り口にあたる場所に骨をつるす。潰す家畜はブタでもウシでもよかった。自分たちで屠殺することは禁止されていたので、業者に頼んでいた。肉はノロに報告して、カンサギヤーに供えてから各家に分けていた。骨は左縄イをした綱に挟んで、道の両側の木につるした。

ウシデーク

女性たちが太鼓を持って踊る。**大工廻**だけがやっていた行事で**宇久田**は行なわないが、もともとは**宇久田**の越來家の人が首里から習ってきて取り入れたという言い伝えがあり、ウシデークをやるときは、最初は必ず越來家の場所で踊った。毎年決まった時期にやるのではなく、なにか祈願などがあるときに行なう行事だったが、戦争の影響で、戦前にはすでに途絶えていた。

アシビ

大工廻の男子青年が中心となって行なう芸能大会。青年団の若い男性が舞踊や組踊、沖縄芝居などを演じ、集落の皆が楽しんだ。舞台はアシビナーに設置した。

大工廻はアシビが盛んだったが、毎年行なうと決まっていた行事ではなく、毎年、その年の収穫をみて、行なうかどうかを決定していた。青年団でまず決議し、次にカスウヤと呼ばれる、集落の重鎮である年配の男性たちに相談をする。カスウヤから許可が降りたら、大工廻ノロに相談に行き、ノロの許しを得てやっと、村アシビをやるかどうかが決定した。

葬送・墓

戦前の**宇久田**・**大工廻**では、人が亡くなるとニンブチャー¹¹を連れてきた。ニンブチャーは屋敷の前に柱を二つ立て、ゴザを敷き、そこで一晩中鐘を鳴らしながら念仏を唱えていた。時期が下るとニンブチャーは来なくなり、屋良に住んでいた内地出身のお坊さんがきて、念仏をあげるようになった。

亡くなった人の遺体は、龕で墓まで運んだ。龕は**宇久田**と**大工廻**で共用していた。龕のことをンマと呼び、担ぐのは男性と決まっていた。13歳以下の子どもはンマに乗せることができず、おんぶで運ばれた。龕は組み立て式で、普段は**宇久田**の西外れにある⑬龕屋に納めていた。木造瓦葺で、1間半か1間くらいの小屋だった。龕とともに戦時中に破壊されてしまった。

明治年間に龕を新造したときには、集落をあげて盛大なお祝いをしたという。**大工廻**の旗頭はこのときにはじめて作られた。当時の旗には「宇久田・大工廻二か村の旗」と書かれていたが、のちに旗が古くなったときに新しい旗が作られ、そのときは「大工廻の旗」と書かれていた。旗には文字以外にも絵が描かれていて、竹藪の中から虎が頭を低くし、しっぽをあげて降りてくる絵が描いてあった。虎の目つきが恐ろしく、とても迫力があったが、龕と同様、戦時中に燃えて無くなつた。

葬式は、ほとんどが亡くなった人の家で行なわれたが、兵隊に出て亡くなった人は村葬が行なわれたこともあった。**宇久田**尋常小学校を会場に行なわれ、字大工廻からは2～3人が村葬で送られた。

宇久田・**大工廻**の墓地は、メヌサク、白川、嘉良川、バシクブー、イシグムヤー橋の周辺などあちこちにあった。なかでも⑧喜屋武親雲上の墓は大きくて立派な墓だった。墓の入り口は、石材を巧妙に加工した観音開きの扉になつていて、他で見られないものだった。白川かシンシンジャの方の山の中にあったが、詳細な位置は不明である。

メヌサクのところにも、代々のノロだけが葬られていた⑤ヌール墓や、⑥ミーフガー墓と呼ばれる変わった形態の墓があった（p68～69参照）。しかし、戦後、米軍施設の建設に伴って宇久田小学校の敷地だった平場が拡張され、この造成の際にメヌサクにあった大きな墓のいくつかは敷きこまれてしまった。ヌール墓やミーフガー墓も敷きこまれてしまった可能性がある。



イメージ図3 メヌサク

9 旗スガシー……村旗を表に出し、青年達が旗を振って風にさらす所作をする行事。旗を持って、集落内を練り歩くこともある。

10トゥイケー……他の集落でエイサーや村芝居などを披露し、またその集落の人々の自集落に招いて演舞をしてもらう。演じ手へのもてなしも必要であり、トゥイケーにはかなりの出費が伴った。

11ニンブチャー……念仏者。流れの念仏行者。

八所の歴史

八所は、白川から比謝川を北に渡ったところにあった屋取集落である。戸数10軒ほどで、地番では字大工廻に属していた。現在の、白川から東南植物楽園方面に抜ける道路を進んで、「内喜納橋」という橋を渡ったあたりから、両側一帯の地域である。

廃藩置県後、禄を失い困窮していた士族階級の者たちが、大工廻の土地の一部を開拓し、まず8つの家族が住むようになったという。そのため、八所と呼ばれるようになった。

その後、移住者は何度か入れ替わり、昭和初期頃には十数軒の屋敷があった。八所の住民のもともとの出身地はさまざま、家庭ごとに旧具志川村、越來村、美里村など広い範囲から移住してきていた。八所には班長がいて集落を取り仕切っていたが、この班長がそれぞれの家庭の出身集落が記載されている帳簿を持っていた。小屋のような簡単な造りの家を建て、数年住んだのみで、また別の場所に移住していくという人もいた。離れなどを備えた屋敷を構えているのは13軒ほどだった。すべての屋敷が茅葺き屋根で、茅は倉敷からダキガヤ¹²を取って使っていた。

昭和初期に字の分離独立があいついだが、八所は字大工廻に所属したまま沖縄戦を迎える。現在でもこの地域は字大工廻に含まれている。大工廻は「本部落」と認識されていて、現在、八所の出身者で大工廻の郷友会に属する人もいる。ただし、八所の人々は大工廻や宇久田と血縁関係ではなく、戦前、宇久田・大工廻の祭祀や年中行事にも参加していなかった。

地形と周辺の集落

八所あたりは平坦な地形で、海が見えるほど高い山はなく、シーア（岩山）やムイ（丘）もなかった。

八所の屋敷や畠のある一帯は、アマリターブックワーと呼ばれる広い水田地帯に囲まれた、平坦な台地状の土地だった。

周辺にあった集落は、まず南に行って比謝川を渡ると西白川の屋取集落があり、本部落と見なされていた大工廻と隣接する宇久田があった。

アマリターブックワーを流れる小川には⑬橋がかかっていた。この橋は石積みで、馬車も通れる頑丈で幅の広いものだった。この橋を越えて東側に平田^{ヒラタ}という屋取集落があった。もっとも近い集落ということもあり、頻繁に交流があった。しかし、平田は字登川に属しており、平田の子は八所とは違う学校に通っていた。

北に行くと内喜納と倉敷、西側には御殿敷があった。

水利

八所は水に恵まれた土地だったが、井戸はごくわずかしかなく、地面を少し掘った程度の井戸だった。山から流れてくる水

が地層を通じて一箇所に集まる地点があり、そのやや標高が高いところを掘ると水が出てきたため、この周辺に集中して井戸ができる。この水は飲み水として利用していた。

当時、屋敷に井戸を持っていた屋敷は2、3軒で、ウチマ、アガリチナー、イリチナーなどの家だった。

産業

屋敷地以外は畠として活用していて、別の集落の人に畠を貸したりもしていた。集落の左右にはアマリターブックワーが広がり、その中を小川が流れている。川の水は畠や水田に使っていた。ただし、集落の人で水田を持っていた人は少ない。持っていたとしても、ほかの地域で土地を借りて作業をしていた。アガリヤマチだけが八所の集落域に水田を持っていたが、その水田も山間のずっと奥のほうにあった。

八所にはサーターヤーが1つあり、集落の人が収穫したサトウキビをここで製糖した。サーターヤーはトミグワー、チナグワーの間に位置していた。製糖に入る前に一度サーターヤーに集まり、製糖の順番と当番を決めていた。

祭祀と拝所

八所には⑭拝所が1つだけあった。サーターヤーの前にあったが、集落全体で決まった時に拝むということではなく、製糖作業に入るときに安全祈願として各自で拝んでいた。

また、健康祈願を祈って井戸の水を飲む行事もあったが、やはり集落全体で井戸の拝みをするということはなかった。

年中行事と娯楽行事

エイサーは毎年行なっていたが、いつごろ始まって戦前のどの時期までやっていたかははっきりしない。三線を弾き、バーランカーをたたいて各家庭を回り、酒をもらっていた。

大工廻や平田でもアシビは行なっていたが、八所の人々だけで村芝居（村アシビ）をすることもあった。場所はサーターヤーのところの広場を利用した。毎年行なわれているわけではなく、村アシビが行なわれることが決まった時点で、それぞれ役の分担を決め、練習が行なわれた。八所の村アシビには、平田の人も見に来ていた。

葬送・墓

八所では、人が亡くなると、たたみ針を3本、心臓のあたりに刺して生死の確認をし、それから、遺体を龕に乗せて行列を作りて墓まで運んだ。八所は単独では龕を持っておらず、平田から借りて使用していた。

墓は、たいていの場合、集落内の丘陵の斜面に掘って作っていた。掘込墓が主流で、裕福な家は亀甲墓を作っていた。戦後、米軍に土地接収されるときに、墓内に取り残されていたお骨を取り出して別の場所に移した。

¹² ダキガヤ……竹の一種。リュウキュウチク。

内喜納

8

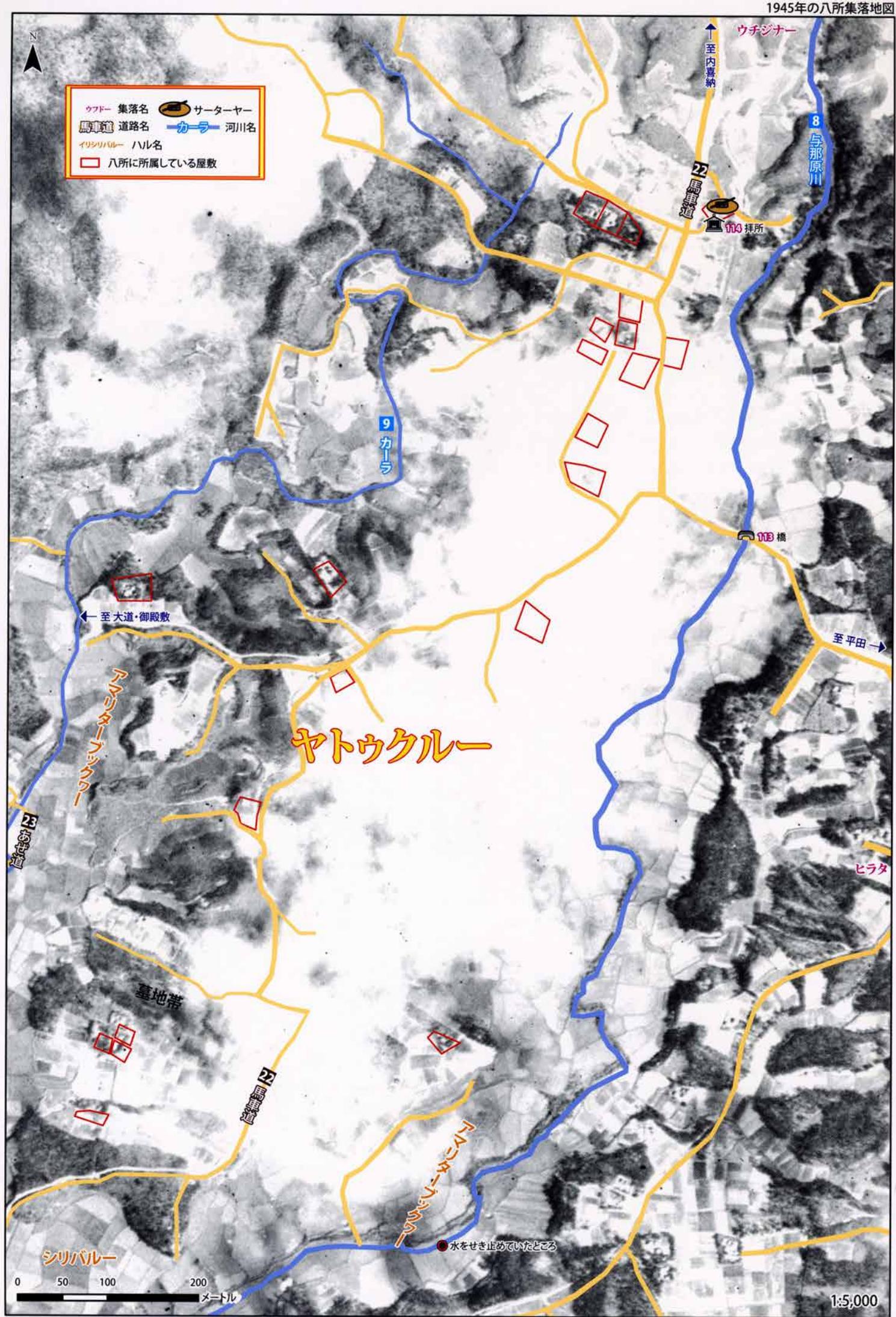
与那原川

- N
内喜納 集落名 サーターヤー
1945年当時の道路
馬車道 道路名 カーラ 河川名
八所に所属している屋敷

水を止めていたところ

八所 (ヤトウクルー)





ウドゥンシチ 戦前の御殿敷

御殿敷の歴史

御殿敷は、比謝川の北側に広がる山林地帯にあった屋取集落である。御殿敷の山は開墾が許された土地で、廃藩置県のときに、首里に住む士族がこの地域に入植してきた集落という。

広い土地に100軒弱の家が散在していたため、地域を分けて組をつくり、集会や行事などは組を単位として行なわれていた。組はトーニガーチ組、中組、後組、長田組の4つがあり、加えて、

長田を越えた一帯は大道と呼ばれ、小集落があった。

なお、大道は大工廻などの集落からは九人開地とも呼ばれていた。はじめは首里からきた9軒の家が開拓したといわれ、これが九人開地という名の由来となっている。

御殿敷は、久得、牧原とあわせて御殿地と呼ばれていて、もとは中城御殿¹が領有していたが、廃藩置県後は松山御殿がこの一帯の土地の権利を持っていた。入植してきた人々は、30年経てば開墾地を個人の所有地として認められることになっていたという。後に土地の権利は製糖会社²に渡り、御殿敷の入植者は、製糖会社から土地を借りて小作をするという立場になった。さらに沖縄戦以降、米軍に土地を接収されたことで土地の権利関係が複雑化し、訴訟問題³にまでなった。

なお、御殿敷は、地籍上では字大工廻に属していた。昭和初期に行政区画的な字として字大工廻から分離し、字御殿敷として独立。戦後、地籍字としても字御殿敷が設定され、現在に至る。

現在は集落の全域が嘉手納弾薬庫に含まれており、民間人の出入りには厳しい制限がかけられている。

周辺の集落と交通

御殿敷は、比謝川とその支流によって区切られたような土地で、起伏が多い地形もあり、他の集落との間をつなぐ大きな道といえば、御殿敷を南北に貫く村道ぐらいであった。この道路は、御殿敷では「真ん中の道」と呼ばれていた。

真ん中の道を南に向かえば宇久田・大工廻に、北に向かえば倉敷に至った。

この道と並行して走る奥原小又道や、⑩クラブからナガタを越える長田又道は、集落内の道路としてよく使われた。

東は大道を過ぎるとアマリターブックワーと呼ばれる広い水田地帯があり、そこを越えると八所、内喜納に行くことができた。

1 御殿というのは士族の家格を示すことばで、士族のなかでも高位の家を指す。琉球王朝期、御殿に属する人々は首里に居住するように定められていたが、その領地は沖縄の各地にあった。

2 製糖会社……『コザ市史』(コザ市、1974)に、1912年頃、沖縄製糖会社が7万円で買い入れ、台南製糖会社に30~40万円で譲渡したとの旨の記述がある。

3 訴訟問題……沖縄製糖より土地を引き継いだ沖縄土地住宅株式会社に対して小作人たちが起こした訴訟。戦前の小作人の借地権についての確認を求めて最高裁まで争ったが、1991年、米軍が賃借権を得ており小作人の賃借権は消滅しているとの判決が確定し、原告側の敗訴となった。

西には北谷村（現嘉手納町）久得があり、さらにその先には牧原があった。馬車で行き来はできなかったが、徒歩で川を渡れる場所が何箇所かあった。久得とは往来が多く、久得から御殿敷に移住してきた家もあった。また、久得一帯の山地はクルーザヤマとも呼ばれる読谷村まで広がる標高の高い山地で、御殿敷の人々からはフナウクイの場として利用されてもいた。

⑩トーニガーチと比謝川（①ウガーラ）の合流地点近くにも渡し口があった。渡し口に近い川岸には、⑨ナンドゥルーと呼ばれる、つるつるして滑りやすい場所があった。

御殿敷の南端、真ん中の道が比謝川を越える地点には橋がかかっていて、そこが御殿敷の入口となっていた。

この橋は御殿敷橋という名前だったが、御殿敷の人々からは④桟橋と呼ばれていた。もともとは丸木橋だったが、1914年に木の橋に架け替えられ、トロッコレールが敷かれた。橋は、レールの枕木に板を打ち付けたような造りだった。その後、1933年にコンクリート製の橋に架け替えられた。村道の一部なので、架け替えにかかった費用は越來村が負担した。

1945年には米軍の侵攻を妨げるために、日本軍が橋桁を爆破したが、橋全体の崩落には至っておらず、現在もそのまま残っているという。

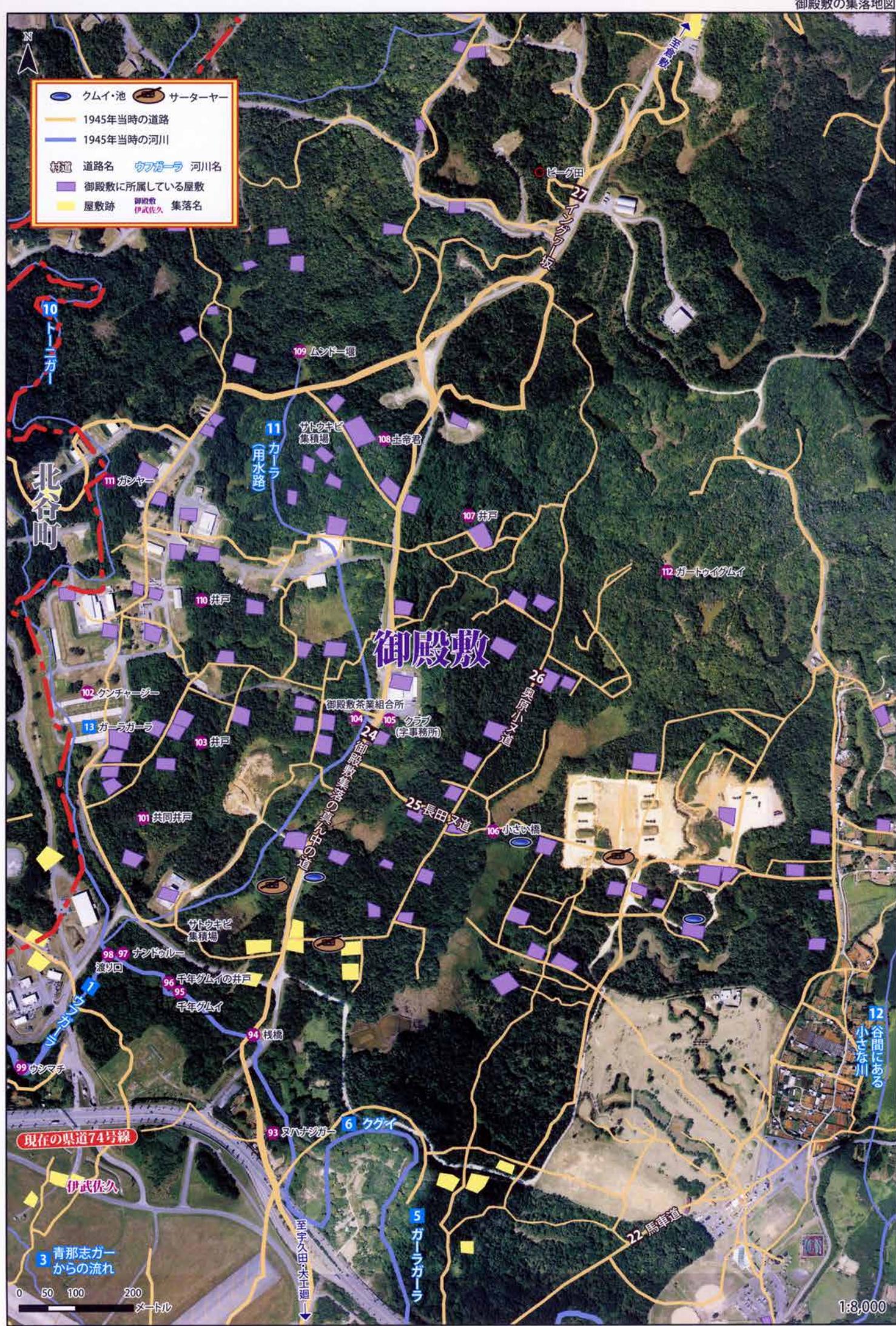
その他、大道から白川方面に行くときに通る⑧ウジャミ橋、⑨タカバシなどの橋があった。タカバシは馬車も通れる石積みかコンクリート製の橋で、橋脚部は現在も残っている。

(⑧、⑨)の位置はp70-71参照)

御殿敷の集落内では、後屋宜の近くに⑩小さな橋が架かっていた。



図6 御殿敷の組分け



地形

御殿敷一帯は山林で、小さな丘陵と谷が入り組んでいる。南側は比較的平地が多いが、北側は標高が高く、地形も入り組んでおり、山林も深かった。

北側には村山と呼ばれた御殿敷の共有地があって、ヤギなど家畜の餌となる草を刈る場となっていた。また、倉敷に向かう道の途中に深い谷間があり、イナグマタと呼ばれていた。女性の股のように見えるためにこの名前がついた。

南東にはシリバルーと呼ばれる地域があり、そこにあった松林はシリバルーマーチューと呼ばれていた。すらりと伸びた松が密に生えていたので、屋でもあまり日が入らない場所だった。御殿敷をはじめ、宇久田や大工廻からも薪を取りに来たが、道に迷うことも多く、幽霊が出るという噂もあった。この松は、戦時中に、日本軍が防空壕などで使うということで伐り倒して、木材として持っていた。

クラブなどがあるあたりにはナジチューグワーと呼ばれる原野があり、ヤギの餌となるナジチュー(ハイキビ)がたくさん生えていた。

トニガーの途中にはガーラガーラと呼ばれる滝があったが、その滝のすぐそばにクンチャージーと呼ばれる岩山があった。ここには小さなガマ(洞穴)があり、クンチャーと呼ばれる人たちが住んでいた。

水利

御殿敷一帯は、比謝川に注ぎ込む川がいくつか走っている。
①ウフガーラ(比謝川)、⑩トニガーのような常に一定の流れがある大きな川は、御殿敷の境界ともなっていた。大道には、雨が降ったときだけ水が流れる川もあった(⑫谷間にある小さな川)。

比謝川はところどころに淵となっている箇所があった。御殿敷から嘉手納向けに比謝川を下っていくと、⑨千年グムイ、⑨ウシマチなどの淵があり、さらに下流に行くと、北谷村に入ってしまうところに有名な屋良の⑩漏池があった。(p30を参照)

ウシマチは、水深が深く、流れも速い淵で、牛が巻き込まれて溺れたというので、こう呼ばれるようになった。

⑨千年グムイは、④桟橋から300mほど下流にあった。そのあたりは川幅も広く、水深も非常に深くて、底を見ることが出来ないほどだった。

千年グムイのそばには、御殿敷に入植が始まった頃、最初に掘られ、共同で使われていた⑩千年グムイの井戸があった。御殿敷にある井戸のなかでは唯一、カーゴガミ⁴が行なわれていた。水は豊富に湧いていたが、集落内に井戸が増えたため、大正頃になるとほとんど使われなくなっていた。

なお、戦後、カーがあったところの近くには誰かが拝所のようなものを作った。

御殿敷では、2~3mほども掘れば水が出たので、明治初期

には千年グムイの井戸など限られた数の井戸しかなかったが、その後、御殿敷の集落内には共同井戸や個人井戸が増えていった。

⑪トニガーの井戸は共同井戸のひとつで、山あいの奥まったところに掘られていた。幅2~3m、深さは1.5mの四角いたちの掘り井戸で、周囲は石積みになっていた。このような共同井戸は5、6軒につき1つくらいの割合で掘られたが、昭和に入って個人井戸を掘る家庭が増えると、共同井戸の使用頻度は下がっていった。

飲料以外の生活用水は、河川や池を利用した。たとえば後屋宜のすぐ西側の水田の一部は、周囲より水深があり、作物が植えられなかったので、馬の水浴びやイモ洗い、洗濯などに利用されていた。

農業用水に関する水利としては、宇久田・大工廻で七堰として伝わる古い堰のうち、⑩ムンドーイーと⑪ガートウイグムイの話題が出ている。この2つの堰は御殿敷にあった。ムンドーイーからは⑪カラ(用水路)が整備されていた。用水路は山道に沿って、幅1.5m~2mほどの小川となって流れ、御殿敷中央部の田畠を潤していた。日照りになると川の水をせき止めて畦に流せるような仕組みになっていた。

ガートウイグムイは大道・長田の北側にあり、そこからも比謝川に向けて小さな川が流れ、周辺に水田地帯がつくられていた。



イメージ図4、5 ガーラガーラ(上)とシンニングムイ(下)

4 カーゴガミ……集落の古い井戸などを拝む行事。



産業

ウドゥンシテ

御殿敷の土地は製糖会社が所有していて、ほとんどの人は土地を借りて耕していた。製糖会社との契約により、畑の面積のうち、一定の割合でサトウキビを植え付けなければならなかつた。生産されたサトウキビはトロッコ軌道を利用して嘉手納製糖工場に運びこまれた。製糖時期の約4ヶ月間はトゥルムチャー⁵が毎日朝と晩の2回、嘉手納製糖工場にサトウキビを運んだ。トロッコの終点にサトウキビを積み込む広場があり、そこまでは家族総出で人力でサトウキビを運んだ。

自家製糖するためのサーチャーも何軒かあり、サーチャーの近くに住んでいた人々はサーチャーで製糖をしていた。

川から離れた土地は畑になっているところが多くかった。赤土で、石もない良質の畑だった。畑の周りにはイノシシが入ってこないように穴を掘ったり、斜面をつけて上れないように工夫していた。ほとんどの作物は自家消費したが、サトウキビはもっぱら嘉手納に出荷していた。

一方、川や水が流れ込む谷は湿地になりやすく、そのような場所は水田に使われた。^{ナガタ}長田と呼ばれた地域は、そのような水田が集まる場所のひとつで、南北に細長く水田が続いたためにこの名がついた。広い水田の場合は馬を使って耕していた。

戦時中は食べ物が少なかったため、サトウキビの畑を水田に変えて米を栽培する人が多くなった。

ウフドー

大道の北のほうや内喜納のほうには、茶園と呼ばれる茶畠があった。^{クシ やマチ}大道の後ろ山内の後に100坪ほどの広い茶園があった。トニーガー組では御殿敷茶業組合という組合を作り、茶畠と製茶の管理をしていた。

御殿敷茶業組合の事務所と工場(⑩御殿敷茶業組合所)には製茶や精米ができる設備が整っていて、料金を出せば製茶や精米の作業を委託することができた。作られた茶はヤマグシクジャーと呼ばれる種類のお茶で、淹れた茶は黄色い色をしていた。茶は自家用にもしたが、嘉手納に売りに出すこともあった。

御殿敷から倉敷へ行く山道の途中にはビーグ田⁶(藪草畠)があって、畠に使われるビーグがたくさん植えられていた。

公共施設

御殿敷の集会所は集落のほぼ真ん中に位置しており、⑪クラブと呼ばれていた。事務所という言い方もあるが、クラブと呼ぶほうが一般的だった。

建物は木製の茅葺き屋根で、屋根を葺くのに3日かかった。客間しかない間取りだったが、通常の屋敷の2倍ほどの広さがあり、御殿敷の大人全員が集まれるようになっていた。

農事奨励会・学事奨励会など、御殿敷全体で行なう行事に利用されるほか、エイサーの太鼓といった道具類の保管場所でも

あった。庭も広かったので、エイサーの練習場所や、戦時中は防空演習の場として利用されていた。

御殿敷にはマチャグワー(商店)はなく、買い物はおもに宇^{クダ}・大工廻^{ジャックジャック}に行っていました。武十我喜屋^{シジュー ガーニヤ}はヤブー(治療者)をしていて、民間療法での治療に長けており、子ども専門でダンバチャヤ(理髪店)もやっていた。



イメージ図6 水田の様子(アマリターブックワ付近の地形を参照)



イメージ図7 クラブ想像図

祭祀、年中行事、娯楽

御殿敷全体で行なう行事としては、年に一度行なわれる学事奨励会や農事奨励会があり、どちらもクラブを会場にして行なわれた。

学事奨励会は学校の成績が優秀だった生徒を賞する行事で、賞品として帳面(ノート)を贈っていた。

農事奨励会は秋ごろに行なわれた。飼われている牛や馬の美しさや頑丈さを競うもので、牛の部で一位になったときは賞品が出た。馬の場合はイーンマと呼ばれ、馬車を引く姿の美しさを競ったが、これには賞品はなかった。

また、御殿敷の人々は娯楽として屋良小学校の運動会を見学に行ったり、登川^{のぼりかわ}で行なわれる闘牛^{ワチジナー}を見に行ったりしていた。闘牛が開催されるときは内喜納^{ウチジナ}を通じて登川まで見物に行ったという。

御殿敷の祭祀行事としては、旧暦2月2日のニングウチフチカに作物の豊作祈願を、旧暦9月9日には収穫を感謝する祈願を、集落全体で行なった。この祈願は御殿敷にひとつだけあった拝

5 トゥルムチャー……馬にトロッコを引かせてサトウキビを運搬する運送業者。

6 ビーグ田……御殿敷では詳細不明だったが、倉敷で、持ち主は大工廻の天願小という家だったとの聞き取り情報が出ている。

所で行なわれた。拝所は⑩^{トゥーティークー}**土帝君**と呼ばれており、集落の繁栄を祈願して造られたと伝えられている。時期を問わず個人でこの拝所を拝みにくる人もいたが、それ以外ではあまり人の行き来する場所ではなかった。

土帝君の祠は山の尾根の上の平地に築かれていた。拝所に行く道の途中にはメリケンマーチ（モクマオウ）の並木があった。祠は「お宮」と呼ばれ、もとは黒い石が使われていた。これはウドゥンシテ御殿敷内の川から拾ってきた石で、硬くて丈夫な石だったが、1940年代には祠は壊れてしまっていた。

1941年に、ウサギヤー（祈願を取り仕切ったり手伝う人）である稻福さんを中心に新たな祠を作った。組み立て式の型枠を先に作り、拝所の敷地で組み立て、コンクリートを流し込んで作った。運びやすいように、前の祠よりは小さめに作られていた。他にコンクリート製の鳥居や灯籠も作られ、灯籠には改築の協力者の名前も入れられた。

新しい拝所の落成式として、33日間にわたって大きなお祝いをした。このときに村芝居^{ムラシバイ}も行なわれたが、御殿敷で村芝居をやったのはこの1回だけである。内容は芝居と踊りが中心で、那覇から役者を呼んで指導を頼み、御殿敷の住民が総出で取り組んだという。

2月2日 ニングッチフチカ

ニングッチフチカとクングッチクニチには、^{トゥーティークー}**土帝君**に祈願をするほか、各組ごとに大きな宴会を行なう。2月2日は豊作祈願であった。組のなかの1軒の家に組の人が全員集まって、ご馳走を食べ、歌い踊って楽しんだ。

4月 神御清明

集落全体としての拝み行事ではないが、御殿敷の住民のほとんどは首里にルーツがあり、年に一度、神御清明のときには、それぞれの家庭の門中の墓やムートゥヤーの家を訪ねるために首里まで行った。

7月15日 エイサー

毎年旧盆にはエイサーが行なわれた。盆の当日に青年会のエイサーシンカが御殿敷内の屋敷を一軒一軒まわった。エイサーに参加できるのは男性のみだった。

9月9日 クングッチクニチ

ニングッチフチカと同じように、^{トゥーティークー}**土帝君**に祈願をし、各組ごとに宴会をする。9月9日は収穫感謝の祝いだった。**大道**でのクングッチクニチの様子を例に挙げると、この行事はクシユクワーシーとも呼ばれ、収穫が済み、畑仕事がひと段落した時期に、打ち上げとして行なう宴会だった。**大道**に住む人々が、ヤーマールーといって、年ごとに順番でひとつの家を会場にし、大きな鍋でみんなのご飯を作った。ヒラ麦を炊いたヒランマーという料理と、三枚肉を入れたジューシー（焼き込みご飯）などで、酒を飲んで楽しく遊んだ。

葬送と墓

御殿敷では人が亡くなると各組内でボラを吹いて知らせていた。亡くなった人の家にはニンブチャーが来て、一晩中お経を唱えながら鐘を鳴らしていた。ニンブチャーは御殿敷の屋敷があるあたりからは少し離れたところに住んでいたようだったが、正確な居住地は不明。後にニンブチャーは現れなくなり、屋良に住むお坊さんが葬式を行なうようになった。このお坊さんは本土出身で、70代後半の白い髪をした老人だった。

ダビジュニー（葬送行列）は特に決まった道順はなく、葬式のある家からガンヤー、墓までを最短のコースでたどっていた。

^{ガソ} 畿を始めとする葬具類を保管してある小屋を⑪^{トゥーティークー}ガンヤーといい、御殿敷の北西のはずれにあった。畿がちょうど収まる大きさの瓦屋根の小屋で、簡単に入れないように鍵がかかっていた。畿や葬具を使った後はきれいにして返していた。御殿敷で所有している葬儀用の黒い幕があり、普段はガンと一緒にガンヤーに保管されていた。また、葬式を知らせるのに使うボラは各字で一つずつ持っていた。

御殿敷では、屋敷がある地域から外れた山や川岸の斜面に^{フィンチャーバカ}掘^{フアーフーバカ}込^{ハタハタ}墓を作ることが多く、ほとんどの家が掘込墓だった。外間家だけは破風^{フアーフーバカ}墓を作っていた。御殿敷では墓に向いた石材が採れないため、墓に使う石材は読谷から購入していた。

⑩^{トゥーティークー}トニーガーの東岸は墓が集まっている地帯で、ここにある墓はおおむねトニーガー組の人々の墓だった。他に、御殿敷の北東部や、北部にも墓地地帯があった。



写真21、22 土帝君の鳥居(上)と祠(下)

クラシチ 戦前の倉敷

倉敷の歴史

倉敷は沖縄市の最北部、現在の倉敷ダムのところにあった屋取集落である。

もともとは、北側が久保、南側が倉敷という隣接した別の集落であったが、1943年頃に字倉敷としてひとつの集落となった。また、字池原と字大工廻の境界付近は、呉屋姓の人々が多く住み、ここを呉屋小屋取とも言っていた。

集落は、久保、倉敷、呉屋小とあわせると、美里村（現うるま市、現沖縄市）と越来村（現沖縄市）にまたがっており、地籍字で言えば、伊波、池原、大工廻とにわかれていた。校区も異なっており、住んでいる場所によって伊波小学校、美里小学校、宇久田小学校とそれぞれ違う学校に通っていた。

集落域の大半は字大工廻に属していたが、1931年に字御殿敷、1943年には字倉敷として独立し、現在も地籍字として字倉敷が存在する。

倉敷の一帯はもとは御殿地で、越来御殿の土地だったと伝えられている。琉球王朝期には一帯で採れた米を納める高倉が置かれていたと言われ、それが地名の由来となっている。

他に、グスク時代に今帰仁城主の子孫が⑫クボーのウタキで数年暮らしたとか、琉球王朝期に士族の隠れ里であったという伝承もあるが、屋取集落としての倉敷の歴史は、廢藩置県後に移住者が入植したことから始まる。

倉敷には、金城、佐久田、我謝、仲嶺、瑞慶山などの姓の家があった。もとは首里に住んでいた士族階級だった人々が、首里から別の地域に、さらにその後で、倉敷に移ってきたという家が多くいた。例えば宇栄原という家は、首里から国頭村宜名真に移り、そこから倉敷に移住してきた。また、金城や仲嶺の一門は具志川村（現うるま市）の志林川から移ってきたと伝わっている。

開墾した土地は、一定の年数を経れば個人所有することができるという取り決めがあった。倉敷の人々は自分のものとなる土地を広げようと、昼は農作業をしながら、月が明るい夜などには9時近くまで開墾作業を続けたという。このような地道な開墾は、沖縄戦の頃までずっと続けられていた。

1942年頃、倉敷のすぐ西側に日本軍の大規模な陣地が設営された。大勢の日本軍の兵士が駐屯していたが、米軍上陸の前に部隊は別の地域へ移動したため、この地域では大規模な地上戦は行なわれず、1945年4月1日まで集落の近辺にとどまっていた倉敷の住民も多かった。4月以降は多くの人が羽地村（現名護市）源河に避難し、その後、米軍の捕虜収容所に入った。

戦後、この地域は嘉手納弾薬庫地区などの基地として使用されて立ち入りに厳しい制限がかけられた。さらに、1961年に瑞慶山ダムが建造され、集落の屋敷の多くが水中に沈んだ。

瑞慶山ダムは、1982年に再開発されたが、倉敷の元住民の強い要望を受けて、倉敷ダムという名称になった。現在のダムは沖縄県ダム管理事務所の管轄となっており、倉敷ダム管理事務

所によって管理されている¹。

戦前の倉敷住民とその子孫は、現在、倉敷郷友会を結成している。郷友会では、1996年に、倉敷入植100周年を祝う記念行事を行なった。沖縄戦の頃、倉敷は入植しておよそ50年ほどであった。戦後60年を超えた現在、倉敷の歴史は、倉敷という場所の外にある期間のほうがすでに長くなっている。とはいっても、現在も倉敷郷友会の活動は盛んで、毎年、旧9月9日に近い日曜日には、⑫クボーへの遙拝と、レクリエーション大会を行なっている。



写真23 倉敷ダムと嘉手納飛行場



図7 屋敷の位置と倉敷ダムの範囲

1 この段落の記述は、沖縄県ダム管理事務所 倉敷ダム管理事務所公式サイトを参考にしている。



倉敷の周辺と交通

倉敷^{クラシチ}は、越来村（現沖縄市）の北端にあり、山林であったために、交通の便はあまり良くない。

北側には楚南^{スナン}と山城^{ヤマシキ}という集落が近く、婚姻関係を結ぶ家もあるほど交流があった。

南側には御殿敷^{ウドクシシテ}、内喜納^{ウジナ}、平田^{ヒラタ}といった集落があった。御殿敷とは、製茶組合などを通して行き来が盛んだったが、内喜納や平田は距離が近いわりにさほど行き来がなかったという。

また、通学や買い物、他の地域へ行くときへの中継点として宇久田・大工廻へ赴くことも多かった。さらにより遠出で、嘉手納^{カリナ}や泡瀬^{アネセ}に行くこともあった。また、徒歩でなら読谷山村の喜名^{キナ}へは久得・牧原^{クルク マチル}を越えていくことができた。

沖縄戦と倉敷

1942年頃、倉敷^{クラシチ}の屋敷地の北側から西側にかけての山林に日本軍の巨大な陣地壕が築かれ、タコツボやクランクと呼ばれる小さな壕など、無数の壕が掘られた。

この建設には、武部隊と呼ばれていた陸軍第9師団に所属する部隊があたっていた。部隊は中飛行場（現在の嘉手納飛行場）の建設にも関わっていた。中飛行場の建設では、倉敷の住民も働いた。なお、国場組が下請けで建設した個所もあった。

この陣地壕のために、1942年から1945年まで3年近く、たくさんの兵士が倉敷に駐屯することになった。最大で5,000～6,000名近くにもなり、当時子どもだった話者たちは各部隊の軍旗祭²の日にちをおぼえて楽しみにしていた。

兵士は広場にテントを張ったり、民家に宿泊していた。本土出身で軍隊生活に馴染んでいる兵士たちと、沖縄ずっと農村生活を送ってきた倉敷の住民とは、日常生活で互いにさまざまな文化的なギャップ³や摩擦を感じることもあったが、おおむね関係は良好で、住宅の提供や物資の供出など、倉敷集落は日本軍への協力を惜しまなかった。

1944年、武部隊は作戦によって台湾へ配置換えになったが、陣地壕には別の部隊が入って、依然として多くの人員が配備されていた。米軍上陸のときに倉敷にいたのは山3480部隊⁴という部隊だった。なお、この隊は副官が旭川出身の中尉で、兵隊もほとんどが北海道出身の兵士だった。戦後も倉敷郷友会との元兵士たちとの間に交流が続けられている。

米軍の上陸がせまると、駐屯していた日本軍のほとんどが沖縄本島の北部、あるいは南部へと移動していった。話者によれば、急にごそり兵隊がいなくなったという記憶があるという。

2 軍旗祭……部隊ごとで、天皇陛下より軍旗を賜わった日を祝った。当時、子どもだった話者たちは、部隊から配られる大きな紅白饅頭がたいへん楽しみだったという。

3 文化的ギャップ……本土と沖縄の文化の違いを示す典型的なものとして、当時沖縄で一般的だったワーフール（豚小屋と一体化した便所）がある。倉敷でも、民家の便所を借りて用を足していた最中の兵士が、豚に尻を突き上げられ驚いたという笑い話が伝わっている。

4 山3480部隊……通称号：山3480部隊、部隊名：野砲兵代42連隊、指揮官：西沢勇雄大佐（『沖縄大百科事典』別巻より）

倉敷の住民は、越来村の疎開地として指定されていた山原^{ヤンバル}⁵の源河（現名護市源河）に避難したが、米軍が上陸した1945年4月1日まで、まだ集落内の自然壕に隠れていた人々もいた。

日本軍は倉敷にあった壕に物資を備蓄していたが、部隊が移動していく際、米軍に奪われないようにと壕の入口を破壊した。しかし、少し掘れば潜り込むことが可能だったので、倉敷の住民は艦砲射撃の合間を縫って自分たちが隠れ潜む壕を抜け出し、物資が隠されている壕から、小麦粉や米、牛缶といった食べ物を取ってくることができた。

倉敷の住民たちが隠れ潜んでいた壕のうち、大きな自然洞穴を利用した壕が2つあった。1つは呉屋小^{グヤグロー}の壕と呼ばれており、もう1つは⑪クポーの壕と呼ばれていた。

呉屋小の壕は、呉屋小^{グヤグロー}のあたりにあり、お年寄りなど80名近くがとどまっていた。現在の倉敷ダム入口のパーザーがあるあたりであるが、戦後、壕の所在は不明になっている。

クポーの壕は、⑪クポーのすぐそばにあった。非常に大きな洞窟で、内部は2段ないしは3段の段差があった。洞窟は2つあって、1つの洞窟は天井に穴があいていて、その上に草木が茂っていた。

クポーの壕にも80名ほどの住民が潜んでいたが、1945年4月1日に倉敷出身の我謝軍曹が壕へ来て、米軍の上陸を知らせたため、人々は米軍の砲撃をかいくぐって山原への避難を開始した。楚南・山城を通じて北へ向かい、羽地村（現名護市）源河の川沿いにあった疎開地へ避難した。しかし、避難生活は非常に苦しいもので、食料も乏しく、栄養失調で亡くなった人もいた。やがて人々は米軍の捕虜となって、収容所に入れられて、そこで終戦を迎えた。

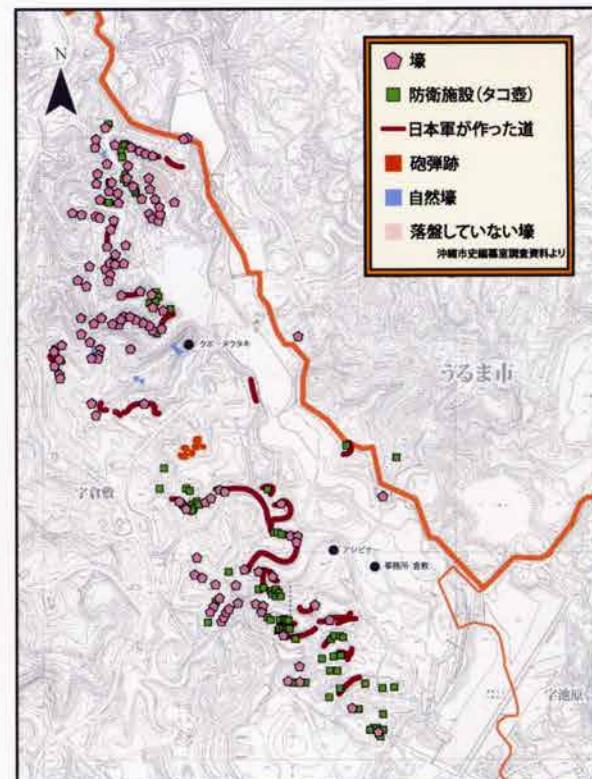
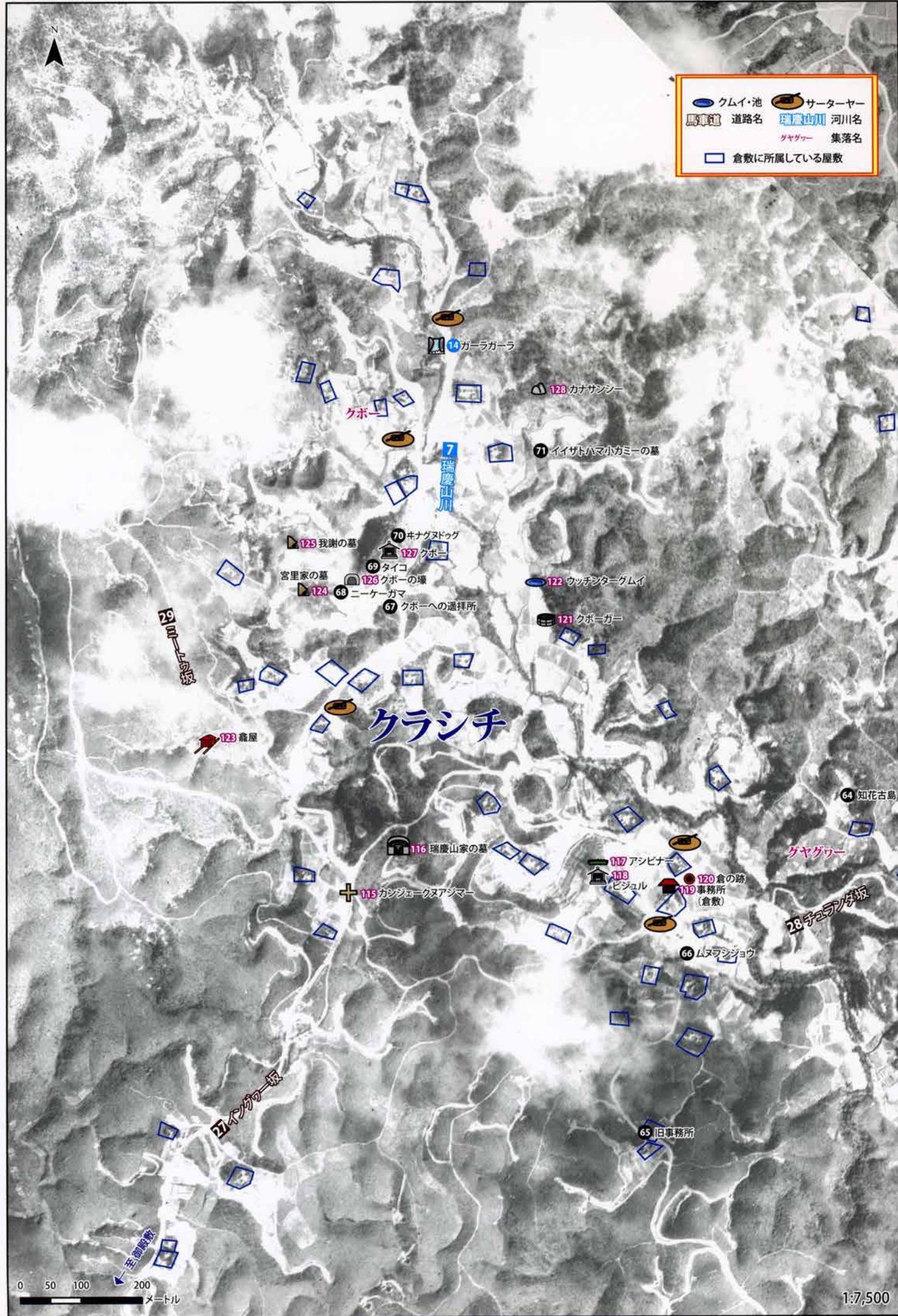


図8 倉敷周辺の壕（沖縄市史編集室の踏査資料より）

5 山原……沖縄本島中南部地域から見て、沖縄本島北部地域を指す方言。

クムイ・池 サーターカー
 馬車道 道路名 瑞慶山川 河川名
 グヤグワー 集落名
 倉敷に所属している屋敷



地形

倉敷^{クラシテ}は沖縄市のなかでももっとも標高の高い山林地帯にあり、入り組んだ丘陵と谷のあいまに屋敷が散在している。

集落の北側には⑪²⁸カナサンシーと呼ばれる岩山があり、頂上部の大砲台のようなぎざぎざした岩塊が特徴的だったが、戦後、道路を建設するために崩された。

谷と丘陵が入り組んだ地形であるため、坂も多かった。㉗²⁷イングワービラ、㉘²⁸チュランダビラ、㉙²⁹ミートゥビラといった名前のついた坂があった。こういった坂は馬や馬車泣かせで、坂の途中で登り切れない馬がバランスを崩して暴れ出し、蹴られた人が死んでしまう事件さえ起きた。

なお、イングワービラは、イングワーマジムが出るという噂があり、それでイングワーという名前がついたという。また、ミートゥビラは、夫婦が手をつなぐようにして登らないといけないほど険しいということでこう呼ばれるようになった。

水利

倉敷には、集落の真ん中を流れる瑞慶山川^{すけやまがわ}があった。この川は戦後、川の近くにあった家の屋号からとて瑞慶山川とよばれるようになり、後の瑞慶山ダムの名前の由来ともなったが、戦前は特に呼び名はなかった。農業用水に利用される他、洗濯や芋洗いにも使われた。

川は普段は深くではなく、小さな川だった。かつてはドラム缶の幅ほどは水が流れていたのが、現在の瑞慶山川はその4分の1ほど水量しかないという。橋がかかっている場所はなく、歩いて渡れる場所を渡し場として利用していた。チュランダビラの近くに一つだけ、馬車を渡せるようにと橋がかけられていたが、大水で流されてそのままになった。

芋や農具を洗うには、集落のあちこちにあったクムイも利用された。そのうちのひとつは、㉚¹²²ウッチンターグムイという名前がついていた。クムイの近くにある岩がうつむいた感じに見えるためこういう名前がついたという。

ウッチンターグムイの近くには㉛¹²¹クボーガーと呼ばれる共同井戸があった。また、倉敷の何軒かの家では個人井戸を持っていた。つるべを使うものと、ニープガードと呼ばれる、ひしゃくでそのまま水を掬えるほどに湧く井戸があった。

産業

倉敷のおもな農産物はサトウキビ、芋、米であった。

倉敷は川が多く、川沿いには水田が多かった。倉敷の土地の半分は田んぼだったという。ユビダーとか、クボーダーなどと呼ばれる、非常に泥の深くなる水田が多かった。どの家も水田を持っていて米を手に入れやすいため、夜は毎晩チヌク（里芋に似た芋）とアンダカシー（天かす）の入ったジューシーメー（おじや）を炊いて食べていたという。チヌクは正月や盆などの御馳走としてもよく供された。

倉敷には、知花^{チハナ}の人が耕していた水田もあった。後に倉敷の人がこの水田を買ったが、その後もこの水田はチバナダーと呼ばれた。

サトウキビの生産も多かったが、宇久田^{ウクダ}、大工廻^{ジャクシャク}、御殿敷^{ウドンシテ}などの集落に比べて倉敷からは嘉手納製糖工場へのサトウキビの搬入が困難であり、沖縄戦直前までサーティヤーでの自家製糖が主だった。名前をあげると、我謝ヌ製糖場、クボー新製糖場、クボーヌ製糖場、後組ヌ製糖場、前組ヌ製糖場である。普通、サーティヤーは組を作って共同で使用していたが、我謝ヌ製糖場は1軒の家の個人使用だった。

また、㉜¹¹⁵カンジェークヌアジマーという交差点の近くには茶山があり、越來村農業協同組合に属する人々みんなで手入れや刈り入れを行っていた。御殿敷には、この組合の事務所と製茶・精米ができる工場があり、倉敷で生産された茶や米はそこに運び込んで加工した。

その他、副収入として、パンシルー（ヴァバ）、カーブチーやオートーなどの柑橘類、バナナ、竹、薪の販売を行なっていた。

果実は、実がなる前に、木1本ごとを単位で商売人が買い付け、前金を払うという形で取引されていた。同じようなしくみで鶏卵も20個、30個とまとまった数で売っていた。

竹や薪は馬車で泡瀬^{あわせ}に運び、帰りにはタルガーと呼ばれる、製糖した黒砂糖を詰める樽を買って倉敷に運んだ。

公共施設

倉敷の集会所は、㉝¹¹⁹事務所^{ジムショ}と呼ばれていて、集落の中心地にあった。崎原^{サチバル}の家の近くで、マチヤグワー（商店）もあり、倉敷ではいちばんにぎやかな界隈となっていた。事務所の建物は、倉敷に兵士が駐屯するようになると、兵士の宿舎として使用された。

祭祀

倉敷で、集落全体で拝んでいたのは、㉟¹¹⁷アシビナーにある㉞¹¹⁸ビジュルだった。

アシビナーは、佐久田^{サクダ}という家の北側にあった丘の上の広場である。エイサー^{サクセ}や村芝居、その他、人が集まる行事があればアシビナーに集まつた。広場の中心はくぼんでいて、20畳余りの広さがあった。野外劇場のようなかたちをしていて、広場を囲む斜面に段が刻まれて腰掛けられるようになっていた。斜面の上部にはぐるりと松が生えていた。ほとんどが曲がったかたちの松だったが、1本だけ、まっすぐ10~15m近くに伸びた松が生えていた。

ビジュルはアシビナーの広場を囲む斜面の、もっとも高くなつたいい場所にあった。これはアシビナーの入り口となる場所^{チクジヤキ}でもあった。旧暦9月9日の菊酒^{カキサキ}のときにビジュルを拝んで健康祈願をした。また、倉敷から出征する人を見送るときには、集落の人全員がアシビナーに集まってビジュルを拝み、そこから嘉手納^{カリナ}に向かう兵士をカンジェークヌアジマーまで見送った。

クランチ 倉敷にはビジュルの他に、**⑫クボー**（クボーウタキ）という古い拝所もあり、**宇久田・大工廻**など他の集落の人々がよく拝みにきていた。しかし、倉敷では集落全体でここを拝むということはしなかった。ただ、菊酒のときなどに、おばあさんたちが家族の健康を祈願することはあった。

現在は、倉敷ダム事務所の裏手に遙拝のための場所を設け、年に1回、クボーへの遙拝を行なっている。



写真24 クボーの拝所がある丘陵(南東側より)

年中行事、娯楽

倉敷の年中行事としては、エイサー、村芝居と旗スガシーがあった。

エイサーはウンケー、ナカビ、ウーケイの3日間かけて集落中の家をまわる。倉敷のエイサーは、北谷村（現嘉手納町）千原のエイサーを取り入れていたが、これは、クボーの近くの番小屋に住んでいた山番⁶の又吉という人が習い覚えていたものである。

村芝居と旗スガシーは、毎年秋ごろにやっていた行事で、同日に行なわれる。村芝居が行なわれる日、青年会、婦人会、在郷軍人会などの人々が**⑪事務所**に集まって、保管してあった旗を取り出し、旗竿に立てる。倉敷の旗は、豊年、あるいは五穀豊穣といった文言が書かれたもので、上に飾りがついていた。この旗を先頭に、後ろに踊り手などを従えた行列となって、事務所を出発する。事務所を出るときにはガーエー⁷をしてから出発し、近くのマチヤグワー、サーターヤー、佐久田の家の門前などを経由して**⑫アシビナー**に向かう。この途中でもガーエーや踊りが行なわれた。アシビナーに到着したらまたガーエーをし、一本だけまっすぐ生えている松の木に旗を立てかけた。

旗がアシビナーに立てられると、そこから村芝居が開始となった。倉敷の村芝居は夕方から始め、テーピー（たいまつ）をつけて、夜中まで行なった。倉敷の村芝居は有名で、楚南山城⁸はもちろん、登川、池原、知花、さらには読谷方面からも見

物に来た。演目は、歌や踊り、劇のほかに、幕間に空手の型を演じたり、鎌叉手というものをやったりした。鎌叉手は佐久田⁹小のおじいさんが得意としていた演武で、鎖鎌を Nun-chaku のように振り回すものだった。演武の前に鎖鎌で芭蕉糸を切り刻んで刃の切れ味を見せつけ、それから三味線の早いリズムに合わせて体すれすれに鎌を振り回すので、女性などは見てられない目を覆う人も出るくらいだった。

このように盛大に行なわれていた村芝居だが、1943年に倉敷に駐屯していた部隊の隊長が、この時勢にバカ騒ぎをするなど倉敷の区長を呼びつけて激しく叱責したため、以降は行なわれなくなった。

年中行事以外に、集落全体で行なわれた行事として、戦勝祝いの提灯行列があった。南京陥落、上海陥落というニュースがあると、集落中の人が集まって提灯行列をやった。これは在郷軍人会が中心となって行なっていたもので、竹の先に提灯を下げ、朝まで皆で行列して部落中を歩いた。出征した人のいる家の前では皆で万歳を叫び、軍歌を歌ったりもした。

また、話者がもっと上の年代のおばあさんたちから聞いた話として、戦前、楚南山城の茶畠で、天皇陛下へ献上する茶を摘むという式典が行なわれ、連れだって見物に行ったという。青年団女子部が、本土風の茶摘みの恰好をして、茶摘みの唄を歌いながら摘んでいたという。出店も出て、この話をしてくれたおばあさんたちはこのとき生まれて初めてスイカを買って食べたという。

葬送、墓

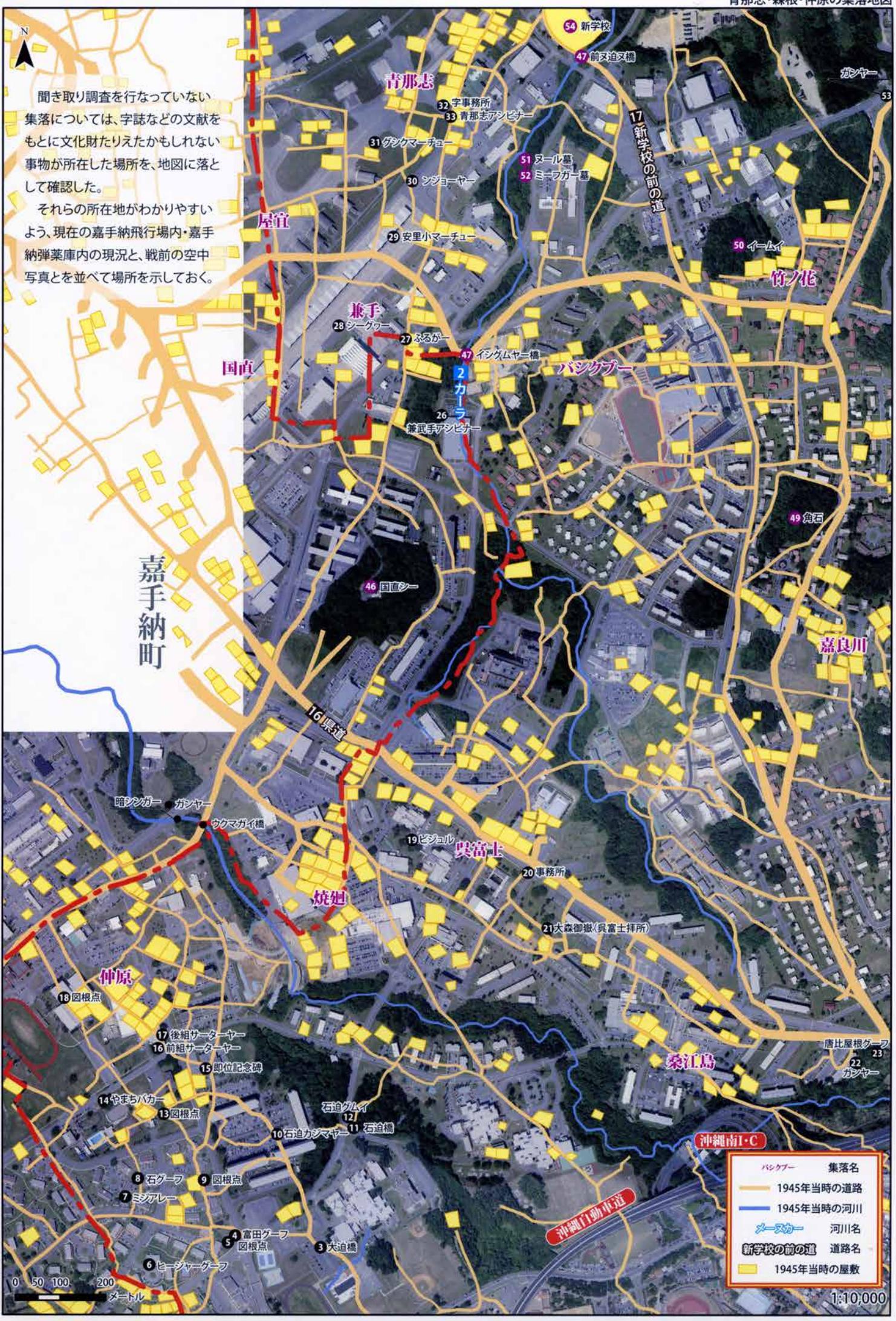
龕は、普段は、集落の西側外れで、ミートゥビラに向かう道の途中にあった**⑬龕屋**にしまわれていた。

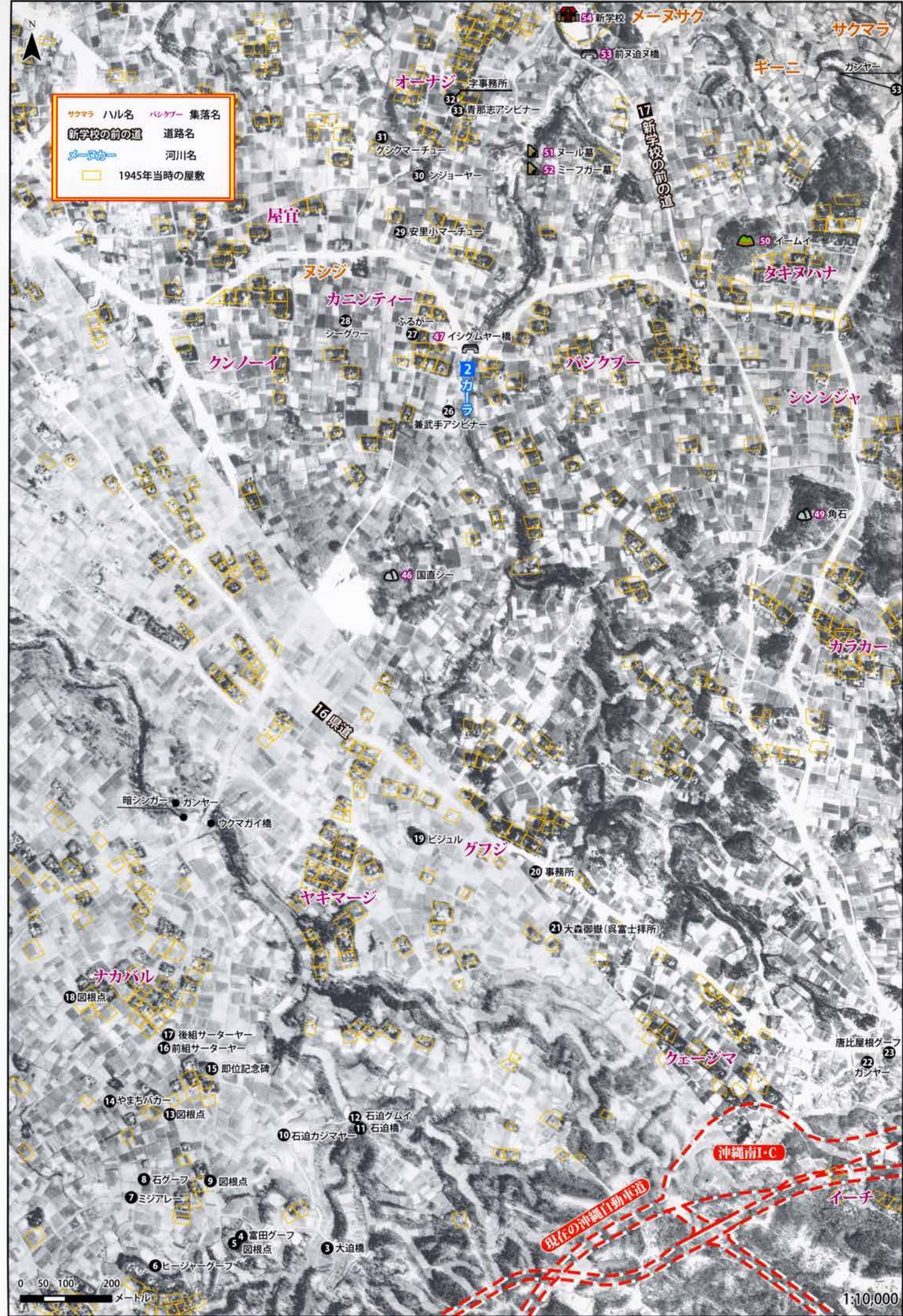
倉敷の墓は、ほとんどが掘込墓で、谷筋の斜面につくっていた。しかし、**⑭瑞慶山の墓**は、大きな亀甲墓だった。この墓は、クボーウタキの山の一部から石を切り出した石を馬車で運んで作られた。他に大きい墓は**⑮我謝の墓**や、**⑯宮里の墓**があった。我謝の墓は、我謝軍曹という人が日露戦争に参戦したときにたくさんお金をもらって作ったものだという。

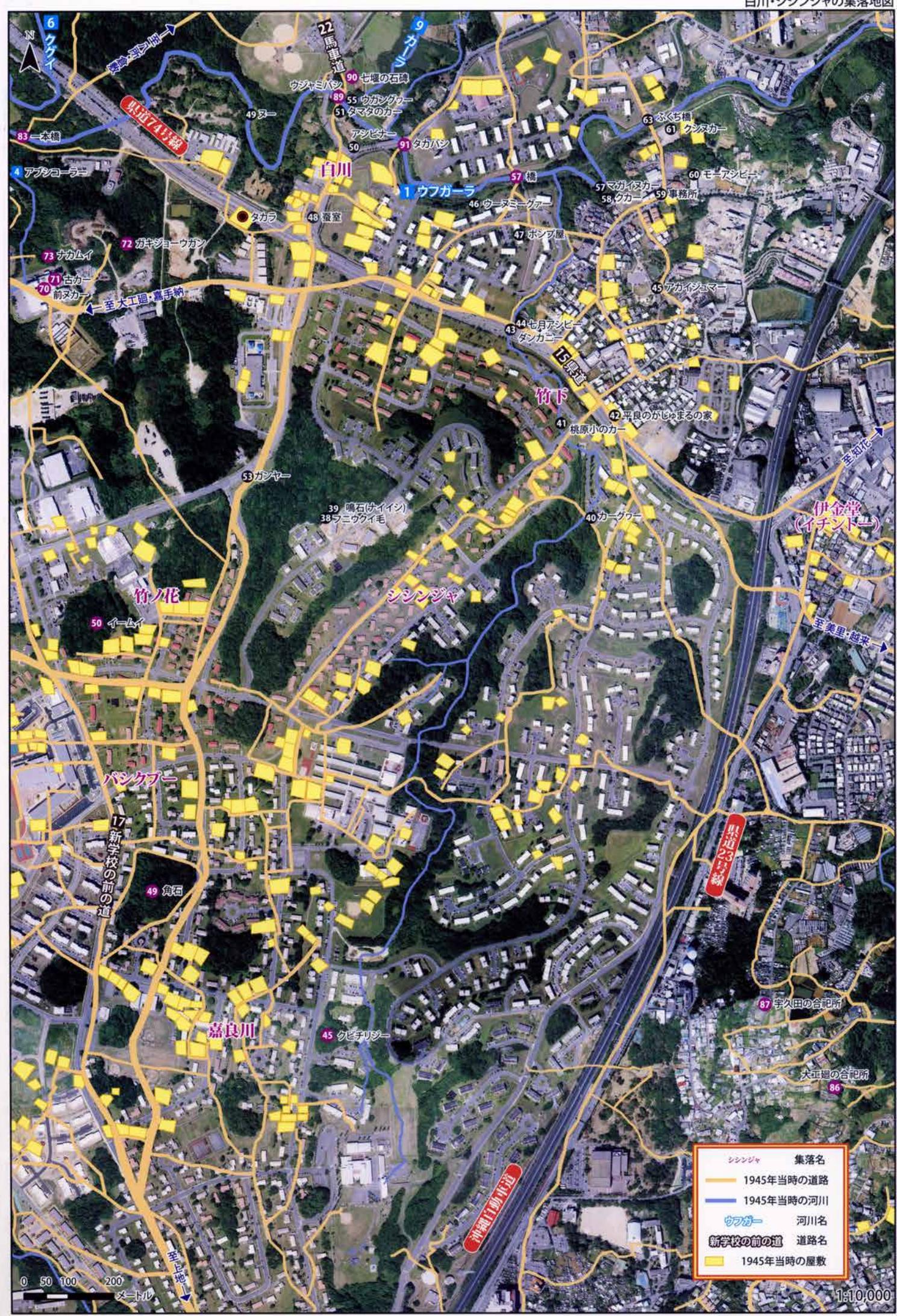
倉敷一帯がダムとなる前に、ほとんどの墓は遺骨を他に移したが、ダムを作る時になって新たに存在を確認された墓が10基ほどあり、なかには骨が残っている墓もあった。連絡がつかないなど諸事情あって、遺骨のいくつかは、石川市で無縁仏として供養された。

6 山番……倉敷付近はウドゥンジーと呼ばれており、かつては琉球王府の仙山だった。仙山の管理と監視のために、琉球王朝期から番人が置かれていたようである。この山番のことを方言ではサバクイと言っていた。

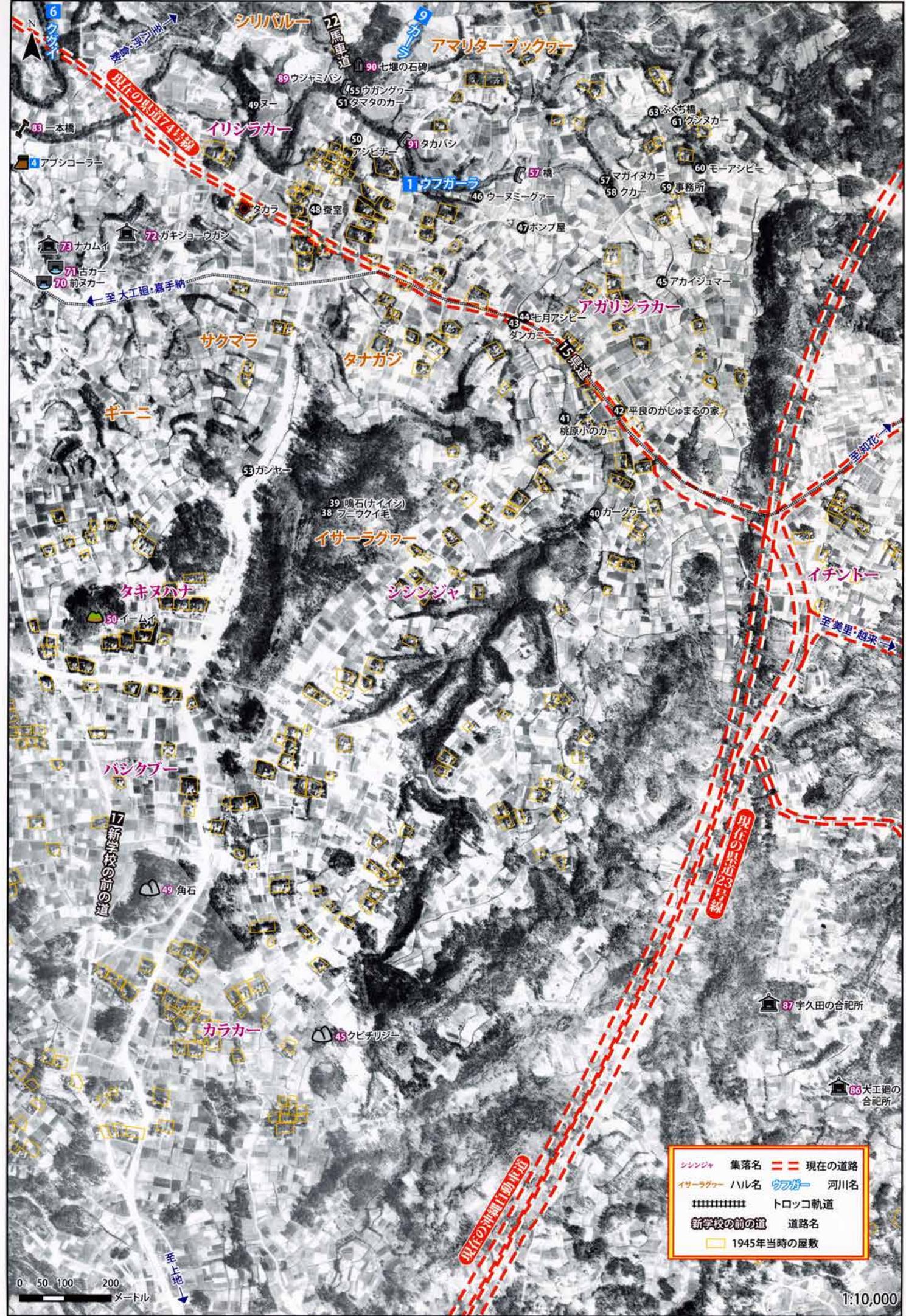
7 ガーエー……綱引きやエイサー（盆踊り）の競演などのとき、威勢をつけるため競争相手に向けて大声を上げたり、喧嘩腰（けんかごし）とは違うよう気で挑発的な大仰（おおげさ）な動作をしたりすること。（沖縄語辞典——那覇方言を中心に——内間直仁・野原三義2006年）







集落名
1945年当時の道路
1945年当時の河川
ウフガーラ 河川名
新学校の前の道 道路名
1945年当時の屋敷



3 資料

嘉手納飛行場内文化財一覧

この一覧は、KACRIと現地踏査のデータを元に、両者の情報を統合して作成したものである。

今回の文化財分布調査では、先にKACRIを入手し、隨時その記述を参照しながら踏査作業を行なった。しかし、時間的な制約もあり、KACRIに報告されている文化財すべてを実見できたわけではない。一方で、KACRIに報告のない地域を中心に補完的なかたちで現地踏査に入っているため、KACRIに報告のない文化財を新たに確認している。

本報告書では、地図での視認性を重視し、現地踏査で確認された文化財と、KACRIに記載されている文化財とを区別せず、番号を振った。個々の文化財についての情報のおもな出所は出典の欄で示してある。現地踏査で確認したがKACRIでは報告されてないものは「踏査」、現地踏査で確認しておらず、KACRIの報告にのみ基づくデータは「KACRI」と記入した。現地踏査、KACRI双方で確認されている文化財は、「踏査、KACRI」と併記して記入した。

なお、KACRIの文化財についての記述はすべて英語で記載されているが、この一覧では、KACRIの記述を基本としつつ日本語訳及び要約を行ない、さらに資料に記載されている記述や写真などで確認できる範囲内において、情報の修正および追記を行なった。また、KACRIのみに報告のある文化財について、KACRIで文化財として扱っていても、沖縄市の基準によって見た場合には必ずしも文化財と見なされないものが含まれているが、この一覧では省かず、そうした情報のものも掲載してある。

番号	区分	状態	詳細	備考	出典
1	墓	埋没	亀甲墓。上部のみ確認可能。		KACRI
2	墓	半分埋没	掘込墓。		KACRI
3	その他	良好	擁壁か農業用の堤。	田畠の区画の一部か、屋敷跡の可能性あり。	KACRI
4	遺物散布地	—	厨子甕片を発見。	付近に墓があった可能性あり。	KACRI
5	墓	半壊、一部埋没	掘込墓。墓前に厨子甕片あり。		KACRI
6	墓	良好	掘込墓。墓の正面は石積み。墓室の天井はアーチ型。		KACRI
7	墓	—	掘込墓。墓の近くには厨子甕片あり。		KACRI
8	墓	良好	掘込墓。墓の正面は石灰岩の石積み。墓室内に厨子甕の破片がある。		KACRI
9	墓	良好	掘込墓。墓の正面は石積み。厨子甕（家型上焼）の破片あり。		KACRI
10	墓	良好	掘込墓。墓庭に厨子甕片あり。		KACRI
11	墓	—	掘込墓。		KACRI
12	墓	一部埋没	亀甲墓。墓庭はほぼ埋没。墓庭に厨子甕（家型上焼）の破片あり。		KACRI
13	墓	良好	亀甲墓。墓室の天井はアーチ型。墓庭は半分埋没。		KACRI
14	岩陰・洞穴	—	自然の洞穴。入り口に石列あり。	墓の可能性あり。	KACRI
15	墓	—	掘込墓。墓の正面は石積み。		KACRI
16	墓	破損	岩陰墓。墓の正面は石積み。	堀込墓の可能性あり。	KACRI
17	墓	破損	亀甲墓。外には香炉がある。		KACRI
18	墓	破損、一部埋没	破風墓。上部のみ確認可能。墓庭は大きな擁壁（高さ2m）と歩道がある。	南西にある自然の洞窟と連結している可能性あり。	KACRI
19	墓	—	破風墓。墓庭は埋没。		KACRI
20	墓	半壊、半分埋没	タイプ不明の墓。3つの墓が集まっている。		KACRI

番号	区分	状態	詳細	備考	出典
21	屋敷跡	—	畠もしくは屋敷跡。主な部分は約3mの四角形。土を直角にきったものを3箇所に造り、その上に荒い石灰岩の基礎がある。		KACRI
22	墓?	良好	岩陰墓か。		KACRI
23	岩陰・洞穴	良好	岩陰。	墓の可能性あり。	KACRI
24	岩陰・洞穴	半分埋没	岩陰。四角形の入り口がある。	壕の可能性あり。	KACRI
25	岩陰・洞穴	良好	岩陰。	墓の可能性あり。	KACRI
26	拝所	良好	拝所。丘陵の頂上に祠があり、なかには碑がある。社も僅かに残る。碑には「吳富士部落 大森御嶽宮 平成四年十一月二十日建立」と刻まれている。		踏査、KACRI
27	拝所	良好	拝所。丘陵の北西側麓に直径30cmほどの井戸のような形のコンクリート建造物があり、正面に香炉が置かれている。		踏査、KACRI
28	拝所	良好	拝所。丘陵頂上のデイゴの根元にコンクリート製の香炉を備えた小さな祠があり、硬貨や米、お香が供えられていた。また、丘の中腹に、四角いコンクリートに管が埋め込まれたオブジェがあり、管には5円玉が入れられていた。基礎には天然の石灰岩の破片が埋め込まれている。	戦後新造されたものか。	KACRI
29	拝所	—	拝所として報告があった場所。現在は開けた場所になっていて、なにもない。	以前の調査で、祈願所であると指摘されている場所。	KACRI
30	墓	埋没	掘込墓。墓口のみ確認可能。墓の正面は石灰岩の石積み。		KACRI
31	墓	破損、一部埋没	掘込墓。墓庭に厨子甕片あり。		KACRI
32	墓	破損、一部埋没	掘込墓。墓前に厨子甕片あり。		KACRI
33	墓?	埋没	岩陰墓か。墓口が完全に埋没しており詳細不明。		KACRI
34	墓	—	掘込墓。		KACRI
35	石積み	良好	石積みの壙。	水田か畑の可能性あり。	KACRI
36	石積み	良好	石灰岩で造られた壙。	No.35と平行して位置。 水田か畑の可能性あり。	KACRI
37	墓	—	掘込墓。		KACRI
38	その他	良好	米軍が建てた住宅。重要なゲストのためのゲストハウスとして利用されている。	戦後早い時期に私宅として民間の請負業社に造らせたものといわれている。	KACRI
39	石積み	—	石灰岩の段。		KACRI
40	墓	良好	掘込墓。墓の正面は石灰岩の切石積み。墓室内に厨子甕（家型石厨子）、厨子甕10個以上あり。	岩穴圍込墓の可能性あり。	KACRI
41	墓	埋没	破風墓。上部の一部のみ確認可能。幅は2.5m。		KACRI
42	墓	—	岩陰墓。墓室内に厨子甕（家型石厨子）の欠片あり。		KACRI
43	墓	良好	破風墓。墓室は2つあるが、墓庭を共有しており、2つの墓室に1つのマユがかかっている。墓室の天井はアーチ型。墓口はコンクリートブロックで塞がれている。		KACRI
44	岩陰・洞穴	埋没	岩陰。広さは3m×3m。	墓の可能性あり。	KACRI

番号	区分	状態	詳細	備考	出典
45	岩陰・洞穴	埋没	岩陰。	墓の可能性あり。	KACRI
46	岩陰・洞穴	良好	岩陰。	拝所の可能性あり。	KACRI
47	墓	良好	破風墓。墓室の天井は水平。墓庭は一部埋没。		KACRI
48	墓	半分埋没	亀甲墓。状態は良好だが上部の一部しか確認できない。刻銘されたセメントあり。		KACRI
49	墓	良好	亀甲墓。厨子甕（家型上焼）の破片あり。		KACRI
50	墓	半壊	タイプ不明の墓。墓口はコンクリートブロックで塞がれている。甕の破片あり。	亀甲墓の可能性あり。	KACRI
51	墓	破損	掘込墓。墓の正面は切石の石積み。墓庭は半壊。		KACRI
52	墓	一部埋没	亀甲墓。側墓あり。墓口はコンクリートブロックで塞がれている。墓室の天井はアーチ型。墓庭に香炉あり。		KACRI
53	その他	—	セメントブロックがコの字に組まれた建造物。		踏査、KACRI
54	墓	半分埋没	掘込墓。墓室は約2m×2m。		KACRI
55	墓	埋没	掘込墓。上部のみ確認可能。墓の正面は雑な石灰岩の石積み。		KACRI
56	岩陰・洞穴	埋没	岩陰。	墓の可能性あり。	KACRI
57	墓	—	掘込墓。墓室は2つあるが、1つの墓庭を共有している。1つは岩穴を掘り込んで造られ、墓口は開口している。もうひとつは墓口をコンクリートブロックで塞がれている。	2つの墓口の位置関係は不明。墓口が塞がっている方が側墓の可能性あり。	KACRI
58	墓	—	亀甲墓。墓口はコンクリートブロックで塞がれている。		KACRI
59	墓	半壊	亀甲墓。墓口はコンクリートブロックで塞がれている。墓室は左側が崩れている。墓庭は半壊。	崩壊部に小部屋がある可能性あり。	KACRI
60	墓	半分埋没	掘込墓。墓の正面は石積み。墓口はコンクリートブロックで塞がれている。		KACRI
61	墓	良好	掘込墓。墓の正面は石灰岩を荒削りに加工した切石の石積み。大きさは幅2m×高さ1m。	No.58と類似。屋根はアーチ型と思われる。	KACRI
62	墓	埋没	亀甲墓。上部のみ確認可能。墓庭の周囲には囲いのような石積みがある。		KACRI
63	墓	半壊、埋没	亀甲墓。上部のみ確認可能。墓庭は半壊。厨子甕（家型上焼）の破片あり。		KACRI
64	墓	半分埋没	掘込墓。墓口付近は石灰岩の石積み。		KACRI
65	墓	半分埋没	掘込墓。		KACRI
66	墓	良好	掘込墓。墓口はコンクリートブロックで塞がれている。墓庭に厨子甕片あり。		KACRI
67	墓	良好	掘込墓。墓の正面は石灰岩の石積み。		KACRI
68	見張り台	—	セメントで円形に造られた建築物。6~7mの広さのコンクリート製の土台がある。	見張り台、あるいは狙撃場所の可能性あり。	KACRI
69	岩陰・洞穴	良好	岩陰。中に鍾乳石あり。	この地域には祈願所があると報告されており、この洞窟はその一部である可能性がある。	KACRI
70	岩陰・洞穴	良好	岩陰。入り口の周りに石列あり。	岩穴開込墓の可能性あり。	KACRI

番号	区分	状態	詳細	備考	出典
71	遺物撒布地	—	遺物散布地。石灰岩丘の頂上に石灰岩の岩山が露呈する箇所があり、その岩山の麓に土器と骨片が散乱。岩山にはいくつか岩陰があり、岩陰からも土器を採集。岩山の頂上でも文様入りの土器片1点を採集。	採集した骨の一部は、戦後になって廃棄されたものも混じっている可能性がある。	踏査
72	墓	良好	洞穴墓。	墓庭の形跡あり。	KACRI
73	岩陰・洞穴	良好	岩陰。四角の形をした入り口があり、2mの広さに拡張されている。	墓あるいは壕として利用されていた可能性あり。	KACRI
74	壕?	良好	洞穴。四角の形をした出入り口があり、L字型をしている。奥行きは約1m。	墓あるいは壕として利用されていた可能性あり。	KACRI
75	岩陰・洞穴	良好	岩陰。石積みの残骸がある。	周辺遺構より高い平場の上にある。	KACRI
76	屋敷跡	良好	屋敷跡。10m×10mの広さで平らにならされ、4つの建築物跡がある。8m×5mの建物跡があり、その角に25cm角で2m以上の高さの石柱が立つ。西端には2m×4mの豚小屋があり、他に4m×4mの建物跡、井戸か屋外便所と思われる穴が2ヶ所ある。		KACRI
77	石積み	良好	石積み。	No.76と関連している可能性あり。擁壁もしくは堤、あるいは水田の境界と推測される。	KACRI
78	記念碑	—	沖縄戦の降伏調印記念碑が建てられている広場。現在、平和記念公園として利用されている。中央には英語と日本語で書かれた飾り額がかけられている。	かつては戦勝記念碑が建てられていた。1997年に改修。	KACRI
79	拝所	良好	拝所。チヌシの山裾北側斜面に平場が造られ、祠が3つ並ぶ。		踏査、KACRI
80	墓	良好	拝所。チヌシ山頂部の岩陰を利用。山頂の北西側と南東側の2箇所にある。北西側には石灰岩切石を利用した香炉あり。南東側は1.5m×1.5mほどの平場にセメント製と思われる香炉あり。山頂付近では人歯や骨片を採集。	採集した骨の一部は、戦後になって廃棄されたものも混ざっている可能性がある。	踏査、KACRI
81	拝所	—	拝所。橋の西側の平場がスラブ打ちされ、香炉がある。		踏査、KACRI
82	橋	不良	石橋。「イシゲムヤーバシ」と呼ばれる石橋でアーチ型工法で造られている。		踏査、KACRI
83	墓	半分埋没	掘込墓。		KACRI
84	岩陰・洞穴	良好	岩陰。	墓の可能性あり。	KACRI
85	墓	不良	破風墓。墓室の天井はアーチ型。		KACRI
86	墓	不良	破風墓。墓の正面は石積み。墓室の天井はアーチ型。		KACRI
87	墓	—	掘込墓。墓の正面は石積み。		KACRI
88	墓	一部埋没	掘込墓。		KACRI
89	墓	良好	掘込墓。墓の正面は石積みにしつくい塗り。マユは水平。	No.88と墓庭を共有している。	KACRI
90	墓	良好	掘込墓。墓の正面は石積みにしつくい塗り。墓庭の壁は荒めの石積み。	No.87と墓庭を共有している。	KACRI
91	墓	半分埋没	破風墓。		KACRI
92	墓	—	岩穴開込墓。		KACRI
93	墓	埋没	掘込墓。上部のみ確認可能。		KACRI
94	墓	良好	掘込墓。墓の正面は石積みとしつくい塗り。	No.95と墓庭を共有している可能性あり。	KACRI

番号	区分	状態	詳細	備考	出典
95	墓	半壊、一部埋没	掘込墓。		KACRI
96	墓	良好	掘込墓。墓の正面はしつくい塗り。墓室は石積み。		KACRI
97	墓	良好	掘込墓。墓の正面はしつくい塗り。	No.92の二つ目の墓と墓庭を共有している。	KACRI
98	墓	良好	破風墓。墓室は2つあるが、1つの墓庭を共有している。墓室の天井は2つともアーチ型。墓庭に厨子甕片あり。		KACRI
99	墓	良好	掘込墓。墓の正面は石灰岩の石積み。墓口は幅約68cm。墓庭は埋没。		KACRI
100	墓	—	墓の一部と思われる。2つの墓が並んでいる。		KACRI
101	墓	良好	亀甲墓。墓室の天井はアーチ型。厨子甕片あり。		KACRI
102	岩陰・洞穴	良好	岩陰。幅5~6m、奥行き3mほど。	墓の可能性が高い。	踏査、KACRI
103	墓	良好	掘込墓。墓室は2つあるが、1つの墓庭を共有している。墓の上部は、岩を掘り込んで深いマユを造ってある。墓の正面はしつくい塗り。墓室は掘り込みで天井は水平に整形。奥壁に墨書きの文字があり、一部判読可能。墓庭に蓋石、香炉あり。墓庭をつくるために石積みの土留めが造られている。	墨書きの文字の内容はp86に掲載。	踏査、KACRI
104	墓	良好	掘込墓。墓室は2つあるが、1つの墓庭を共有している。向かって右の墓は、墓上部の岩をマユの形状を模してアーチ型に掘っている。正面は石積みでしつくい塗り。墓室は岩盤を掘り込み、天井を水平に整形。奥壁に墨書きの文字あり、判読可能。向かって左の墓は右の墓より小さい。側墓の可能性がある。墓の正面は石積み。また、墓庭の囲みの一部が岩陰になっているが、一部が凹んでおり、これも側墓の可能性がある。蓋石、香炉あり。	墨書きの文字の内容はp86に掲載。	踏査、KACRI
105	墓	良好	掘込墓。墓の上部は岩盤を掘りこんでアーチ型のマユを造ってある。墓の正面は切石の石積み。袖石、袖垣、墓門あり。香炉あり。		踏査、KACRI
106	墓	良好	掘込墓。墓の正面は石積みにしつくい塗り。墓室の奥壁の高いところに棚が造ってある。墓庭に香炉あり。袖石、袖垣あり。向かって左の袖垣に側墓あり。墓庭をつくるために石積みの土留めが造られている。		踏査、KACRI
107	墓	良好	掘込墓。墓の正面は石積み。袖垣は土と石。墓庭は埋没。陶器(アラマカイ)1点あり。		踏査、KACRI
108	墓?	埋没	岩陰墓か。斜面上部に平場があり、奥に岩陰がある。		踏査、KACRI
109	墓	埋没	破風墓か。上部のみ確認可能。マユは石灰岩で水平に造られている。墓の正面は切石の石積。袖石、袖垣、墓門あり。		踏査、KACRI
110	墓	埋没	破風墓。上部のみ確認可能。		KACRI
111	墓	良好	平葺墓。マユは水平で、屋根が作られている。ウーシやワラビヌティーもあり。墓の正面は切石積み。香炉あり。墓庭は破損。		踏査、KACRI
112	墓	一部埋没	掘込墓。墓の正面は石積み。袖石、袖垣あり。墓庭の外に厨子甕片あり。		踏査、KACRI
113	墓	半壊	掘込墓。隅石はコンクリート製。		踏査、KACRI
114	墓	埋没	岩陰墓か掘込墓。上部のみ確認可能。		踏査、KACRI

番号	区分	状態	詳細	備考	出典
115 墓	埋没		岩陰墓か掘込墓。上部のみ確認可能。墓の正面はしつくい塗り。袖石あり。	墓の周辺は埋没しているが、踏査、KACRI 岩陰があるので、埋没した部分にも墓がある可能性あり。	
116 墓	良好		掘込墓。墓の正面は石積みにしつくい塗りで、水平のマユを持つが屋根はない。墓の前に蓋石と香炉あり。墓庭をつくるために石積みの土留めが造られている。		踏査、KACRI
117 墓	破損、一部埋没		掘込墓。墓の正面は下部は岩盤、上部は石積み。墓口は切石で組まれているが一部破損。		踏査、KACRI
118 墓	良好		洞穴墓、あるいは堀込墓。		KACRI
119 墓？	崩壊、埋没		崩壊した墓と思われる石積み。周辺に切石を含む大きな石灰岩が散乱する箇所あり。付近に陶器（アラマカイ）1点、陶磁器片1点あり。	上部斜面から崩れてきた 土砂で埋没したと思われる。 No.119と120の間も墓が埋まっている可能性あり。	踏査
120 岩陰・洞穴	良好		岩陰。	土砂と石灰岩岩盤のあいだに隙間があり、墓が埋まっている可能性あり。	踏査
121 墓	一部埋没		岩穴開込墓。墓の正面に高さ60cm～80cmの野面積みの石積みあり。墓室内に厨子甕（マンガン）1点あり。		踏査、KACRI
122 墓	良好		掘込墓。屋根の部分は石灰岩の岩陰を利用しているが、マユは亀甲墓のような弓形。墓の正面はしつくい塗り。墓庭は半分埋没。墓の近くに厨子甕（ボージャー）2点と厨子甕（家型石厨子）2点あり。		踏査、KACRI
123 墓	良好		掘込墓。墓の正面は、墓口は岩盤を整形、上部は石積み。墓室内と墓庭に、厨子甕5点、厨子甕あり（ボージャー2点、家型上焼1点、家型石厨子5点）。		踏査、KACRI
124 墓	良好		掘込墓。墓の正面は岩盤を削って整えており、石積みを模した刻みがある。墓室内に厨子甕片（マンガン）、花瓶、碗が散乱。		踏査、KACRI
125 墓	良好		掘込墓。墓庭あり。墓の正面は野面積み。墓口の前と墓室内に厨子甕（家型石厨子）あり。		踏査、KACRI
126 墓	一		掘込墓。墓口はセメントで塞がれている。		KACRI
127 墓	良好		掘込墓。墓の正面は野面積み。墓室内には大量の厨子甕や厨子甕（家型石厨子）あり。墓口の前に厨子甕（家型上焼、マンガン）あり。		踏査、KACRI
128 墓	良好		掘込墓。墓庭あり。墓の正面は野面積みにしつくい塗り。墓室の奥壁に50cm×50cmの棚のような堀り込みがある。墓室内に大量の厨子甕（ボージャー、家型石厨子）あり。墓の近くにも厨子甕（ボージャー、家型石厨子）の破片が散乱している。		踏査、KACRI
129 石積み	良好		石積み。直径1mほどの石から人頭大の石までを組み合わせている。	土留めの可能性あり。	踏査
130 墓	埋没		掘込墓。墓の正面は野面積みだが、一部の石は切石。		KACRI
131 墓	良好		掘込墓。墓の正面は野面積み。		踏査、KACRI
132 墓	良好		掘込墓。墓の正面は野面積み。		踏査、KACRI
133 墓？	崩壊、埋没		堀込墓か。		踏査、KACRI
134 墓	半分埋没		掘込墓。墓の正面は相方積み。		踏査、KACRI
135 墓	半分埋没		掘込墓。墓の正面は石積み。		踏査、KACRI

番号	区分	状態	詳細	備考	出典
136	墓	良好	掘込墓。墓の正面は石積み。墓室の天井は石積みでアーチ型。墓庭に「康正〇墓」と読める墓碑あり。		踏査
137	墓	良好	掘込墓。墓の正面はしっくいでつくり、その上にセメント塗り。	屋根は詳細不明だが、亀甲の形に造ってある可能性がある。	踏査、KACRI
138	墓	良好	掘込墓。墓の正面はしっくいでつくり、その上にセメント塗り。墓室内に厨子甕の蓋あり。		踏査、KACRI
139	墓	埋没	掘込墓。上部のみ確認可能。		踏査、KACRI
140	墓	埋没	掘込墓。上部のみ確認可能。墓の正面はしつくい。墓碑のような石が落ちている。		踏査、KACRI
141	墓	良好	掘込墓。墓の正面は切石積み。墓室は掘り込み。墓室内にワンブー3~4点、墓庭に水甕1点あり。		踏査、KACRI
142	墓	良好	掘込墓。No.142からNo.146までは全て隣り合わせ。墓の正面は切石積みにしつくい塗り。		踏査、KACRI
143	墓	良好	岩陰囲込墓。墓口を塞ぐように石が置かれている。	墓室は掘り込んで拡張してある可能性がある。	踏査、KACRI
144	墓	—	岩陰囲込墓。墓庭あり。	墓室は掘り込んで拡張してある可能性がある。	踏査、KACRI
145	墓	良好	掘込墓。墓の正面は岩盤整形で、一部石積み。		踏査、KACRI
146	墓	良好	掘込墓。墓の正面は、墓口付近は切石積みで、他の箇所は野面積み。数点の陶器（甕）の破片がある。		踏査、KACRI
147	墓	埋没	掘込墓。墓口の前に木が生えている。墓の正面は切石積み。		踏査、KACRI
148	墓	半壊	掘込墓。		踏査、KACRI
149	墓	半壊	掘込墓。		踏査、KACRI
150	墓	良好	掘込墓。墓の正面は切石積みにしつくい塗り。墓室内に頭骨などの骨片が散乱。		踏査、KACRI
151	墓	埋没	掘込墓。墓の正面は切石積み。		踏査、KACRI
152	墓？	埋没	岩陰墓か。ほぼ埋没しており詳細不明。		踏査
153	墓	半分埋没	掘込墓。墓の正面は野面積みだが切石積みも混じる。墓室内に人骨が納まった状態の厨子甕数点あり。また、No.153とNo.154の間に人骨が納まった状態の厨子甕（マンガン）数点が散乱。		踏査、KACRI
154	墓	埋没	掘込墓。墓口を塞ぐように木が生えており、内部は確認不能。墓の正面はおそらく石積みにしつくい塗り。		踏査
155	墓	良好	掘込墓。墓の正面は切石と野面積み。墓の前に厨子甕片数点あり。		踏査、KACRI
156	墓？	崩壊、埋没	埋没した掘込墓か。墓の面らしき整形した岩がわずかに確認できるが、詳細不明。		踏査
157	墓？	崩壊、埋没	埋没した掘込墓か。墓の正面部分と思われる整形した岩がわずかに確認できるが、詳細不明。		踏査
158	墓？	崩壊、埋没	埋没した掘込墓か。墓の正面部分と思われる整形した岩がわずかに確認できるが、詳細不明。		踏査、KACRI
159	墓	—	掘込墓。墓の正面は岩盤のまま。	対岸にある墓の並びより は1段下がった位置になる。	踏査、KACRI

番号	区分	状態	詳細	備考	出典
160	墓	半壊、半分埋没	掘込墓。	No.158の下にある。	KACRI
161	墓	—	掘込墓。墓の正面は岩盤のまま。		踏査、KACRI
162	墓	—	岩穴囲込墓あるいは掘込墓。墓の前が一部石で囲んである。		踏査、KACRI
163	岩陰・洞穴	—	岩陰。	墓の可能性あり。	踏査
164	墓	良好	掘込墓。墓の正面は切石積みにしつくい塗り。		踏査、KACRI
165	墓	良好	掘込墓。墓の正面はしつくい塗り。墓石と思われる切石の板が墓室内に落ちている。		踏査、KACRI
166	墓?	埋没	整形された石灰岩塊。墓口と思われる箇所から木が生えており、詳細不明。	墓2基が存在する可能性あり。	踏査、KACRI
167	墓?	埋没	整形された石灰岩塊が散乱している。岩が掘られたような穴がわずかに確認できる。 墓の可能性あり。		踏査
168	墓	半壊	掘込墓。		KACRI
169	墓	半壊	掘込墓。墓口が上下に2つある。上のほうの墓室内にタナと香炉あり。	下の墓口は側墓の可能性あり。	KACRI
170	墓	埋没	岩陰墓。墓室内に厨子甕(マンガン)2個あり。		踏査、KACRI
171	墓?	良好	岩陰墓か。石灰岩露呈部の下部の岩盤が掘り込まれている。	この谷筋では他に陶器片が3つほど確認されており、人の活動の痕跡が認められる。	踏査
172	岩陰・洞穴	—	岩陰。	墓の可能性あり。	踏査
173	墓?	—	崩壊した崖に石灰岩塊が散乱。	墓の可能性あり。	踏査
174	その他	良好	加工された洞穴。入り口は金属製の扉で塞がれている。入り口の前に半円形のコンクリートあり。付近に厨子甕片と人骨あり。	第二次世界大戦時の銃座の可能性がある。	KACRI
175	遺物散布地	—	水が流れこんで出来た平場。広さ2m×4m。骨や厨子甕が散乱。	上部の遺構から流れ込んだ可能性がある。	KACRI
176	墓	良好	掘込墓。		KACRI
177	銃座・砲床	不良	機関銃座。広さ7m×20m。壁はコンクリートを流しこんで造られている。近くには砂が詰まっている55ガロンのドラム缶に囲まれたコンクリートスラブがある。爆風防御のための防御設備として外側に土を積み重ねている。低いかまぼこ型の屋根の小屋2つに、同じような低い半円の金属製の建築物が続いている。	これと同じような施設がクンノーイシーにも見られる。	KACRI
178	屋敷跡	埋没	屋敷跡。広い平場に竹林があり、家畜小屋の石柱や石積み、フール跡などを確認。		踏査、KACRI
179	その他	不良	小川の中に杭が4本並ぶ。杭の並び方は流れに対して垂直。詳細は不明。		踏査
180	石積み	良好	石積み。イームイの丘の南から西側にかけて断続的に石積みで土留めし、平場を造った場所がある。階段状に石を積んだ箇所もあり。	畑跡の可能性あり。	踏査
181	墓	半壊	亀甲墓か。墓室は石積みで、天井はアーチ型。	移転の際に崩した可能性あり。	踏査
182	墓	半壊	掘込墓。墓室の奥側のみ残存。	移転の際に崩した可能性あり。	踏査

番号	区分	状態	詳細	備考	出典
183	墓	良好	平葺墓。墓の正面は切石の石積みにしつく い塗り。墓室は石積みで天井はアーチ型。 床面にサンゴ砂利が敷いてある。厨子甕片 が散乱。		踏査
184	墓？	崩壊	大きな墓と思われるが、詳細不明。		踏査
185	墓	良好	亀甲墓。墓の正面は切石積み。墓室は石積 みで天井はアーチ型。		踏査
186	墓	半壊	岩陰墓。陶器片あり。	岩穴開込墓の可能性があ るが、正面が崩壊してお り詳細不明。	踏査
187	墓	不良	掘込墓。墓の正面は切石積みと野面積み。 墓室は掘り込み。墓の5mほど東にコンクリ ートの階段がある。		踏査
188	墓	埋没	タイプ不明の墓。上部の一部のみ確認可能。		KACRI
189	その他	－	南側から石列が続いている。	拝所の可能性あり。	KACRI
190	墓	崩壊、半分埋没	岩穴開込墓。墓内に厨子甕片あり。石碑が あるが、下部が埋没。「故満州開拓十……」 と彫ってある。		KACRI
191	墓	崩壊、埋没	墓。墓庭と思われる範囲に厨子甕（家型上焼） の破片がある。		KACRI
192	墓	破損	亀甲墓か。墓の正面は切石積み。墓室は掘 り込み。墓室奥に小部屋あり。墓室にせり 出すようにつくられ、内部にしきりあり。 小部屋の口は幅53cm、高さ58cm。袖垣、墓 門は崩壊。墓門付近にすり鉢（壺屋焼か）2、 3点あり。		踏査、KACRI
193	墓？	半分埋没	掘込墓か。墓の正面は荒い石積み。		踏査、KACRI
194	墓	破損	亀甲墓。マユは崩壊しているが、墓の正面 上部がアーチ型に残っている。墓室内は掘 り込み。袖垣は石と土でできている。		踏査、KACRI
195	墓	破損	亀甲墓。墓の正面は切石積みにしつくい塗り。 墓室は掘り込みで、天井は水平。墓室奥に小 部屋あり。小部屋の口は幅43cm、高さ54cm。 小部屋内部は奥行75cm、横97cm、高さ120cm。 墓室内に厨子甕片（家型上焼）あり。		踏査、KACRI
196	墓	良好	平葺墓。側墓あり。マユは水平。墓の正面 は切石積みにしつくい塗り。墓室は切石積 みにしつくい塗りで、天井はアーチ型。墓 室奥に小部屋あり。小部屋の口は幅36cm、 高さ47cm。小部屋内部の奥行は70cm。墓の 周囲は切石積みで囲ってある。		踏査、KACRI
197	墓	半壊	掘込墓。墓室の天井は水平。		KACRI
198	墓	半壊、半分埋没	亀甲墓。墓室の天井は水平。	洞穴を加工して造られた 可能性あり。	KACRI
199	岩陰・洞 穴	半分埋没	自然の洞穴。入り口は幅60cm。	墓の可能性あり。	KACRI
200	墓	半壊、一部埋没	岩穴開込墓。墓の正面は石積み。天井には 鉄板の残骸がある。		KACRI
201	墓	一部埋没	掘込墓。幅2m×高さ1m。付近に厨子甕片 あり。		KACRI
202	墓	一部保存	掘込墓。墓の正面は石灰岩の石積み。墓庭 に厨子甕片あり。		KACRI
203	墓	良好	掘込墓。墓の正面は石灰岩の石積み。墓庭 は一部埋没。		KACRI
204	墓	一部埋没	掘込墓。墓の正面は一部が石灰岩の石積み。		KACRI

番号	区分	状態	詳細	備考	出典
205	壕?	一部埋没	洞穴。深さは2m。内部は防空壕のような急な角がある。	洞穴墓の可能性もある。	KACRI
206	墓	不良	掘込墓。側墓あり。墓の正面は切石の石積み。墓室の天井はアーチ型。	亀甲墓の可能性もあり。	踏査
207	岩陰・洞穴	埋没	岩陰。	墓の可能性あり。	踏査
208	墓	良好	掘込墓。墓正面は切石積み。墓室は岩盤掘り込み。		踏査
209	岩陰・洞穴	良好	自然の洞穴。幅5mほど、奥行き4mほど広い半地下のような洞穴。奥にさらに空間があるが、人が通れるか通れないくらいの狭さ。	壕の可能性あり。	踏査
210	壕	良好	壕。入口は高さ約1mで幅2~3m。内部は高さ2m超の通路になっている。奥行き10m超。入口から2~3mくらいの地点の壁に、柱を置くために削られたような跡がある。入口周辺と最奥部は石灰岩質だが、通路の中間は天井も壁も土が露呈している。		踏査
211	墓	埋没	亀甲墓。墓の正面はしつくい塗り。墓室の天井はアーチ型。		踏査
212	墓	埋没	平葺墓か。墓の正面は切石の石積み。		踏査
213	その他	-	洞穴。岩盤が四角く縦に掘られたような縦穴になっている。入口はほぼ長方形。短辺約1m、長辺約3m。深さは約4~5mほど。		踏査
214	岩陰・洞穴	埋没	岩陰。付近の斜面に厨子甕（家型石厨子）の破片あり。	岩陰墓の可能性あり。	踏査
215	岩陰・洞穴	埋没	岩陰。	墓の可能性あり。	踏査
216	墓?	不良	岩陰墓か。山の頂上付近の岩場にある。厨子甕の底部1点、骨片数点あり。	付近にはところどころに甕の破片が散らばっているが、他に墓は見当たらない。	踏査
217	墓	不良	掘込墓。墓室内に厨子甕片と厨子甕（家型石厨子）が散乱。また、人頭大の石が多量に転がっている。	墓室の石はもとは墓口を野面積みで塞いでいた可能性がある。	踏査
218	墓	良好	岩陰墓。岩陰を野面積みで塞ぐ。墓の前方に大量の厨子甕（家型石厨子）の破片あり。No.217とNo.218の間には、戦後、比較的最近に作られたと思われる香炉が3つあり、それぞれ「火の神」「福地殿」「ノハナチ殿」と彫られている。		踏査
219	岩陰・洞穴	埋没	岩陰。入口の前に15cm角で長さ1mほどのコンクリート柱が倒れている。	壕の可能性あり。	踏査
220	その他	-	土坑。直径2~3m、深さ1mほどの穴。No.223付近から、一帯の斜面に同じような土坑が点在する。	塹壕の可能性あり。	踏査
221	その他	-	約1.5m×2mほどの方形のコンクリート塊。表面の中ほどに鉄の芯が8本、2列に並ぶ。	防衛施設、あるいは砲台の可能性あり。	踏査
222	岩陰・洞穴	埋没	岩陰。	壕として利用されていた可能性あり。	踏査
223	遺物散布地	-	遺物散布地。厨子甕（マンガン）の底部3点が散乱。	付近には墓は発見されていない。	踏査
224	墓	-	掘込墓。墓の正面は切石積みと野面積み。		踏査、KACRI
225	墓?	崩壊	亀甲墓か。亀甲墓の屋根の縁と思われる石積みが残存。		踏査
226	墓	不良	亀甲墓か平葺墓。墓の正面は切石積みにしつくい塗り。墓室は切石積みで天井はアーチ型。墓の近くに厨子甕片（家型上焼、マンガン）あり。		踏査、KACRI

番号	区分	状態	詳細	備考	出典
227	墓	埋没	掘込墓。岩盤を掘り込んで上から土を被せている。		踏査
228	墓	埋没	亀甲墓。上部のみ確認可能。墓庭に厨子甕（家型上焼）あり。		KACRI
229	墓	破損	亀甲墓。墓室の天井は水平に整形。		踏査、KACRI
230	墓	良好	掘込墓。墓の正面は切石積み。		踏査、KACRI
231	墓	良好	掘込墓。墓の正面は野面積みと切石積み。墓庭や墓の周辺に厨子甕片（マンガン）が散乱。		踏査、KACRI
232	墓	良好	掘込墓。墓の正面は切石積み。		踏査
233	墓	不良	掘込墓。墓の正面は岩盤そのまま。墓室内に僧の彫刻がある厨子甕（家型石厨子）の胴部1点と、厨子甕（家型石厨子）蓋の破片あり。		踏査
234	墓	良好	亀甲墓。墓の正面は切石積み。墓室の天井はアーチ型。		踏査、KACRI
235	墓	半壊	掘込墓。墓の正面は野面積みと思われる。墓室内に厨子甕片（マンガン）あり。		踏査、KACRI
236	墓	—	掘込墓。墓の正面は岩盤をそのまま利用。		踏査、KACRI
237	墓	不良	掘込墓。墓の正面は岩盤をそのまま利用。		踏査
238	墓	良好	亀甲墓。墓の正面は切石積みで、しっくい塗り。墓室内はアーチ型。奥に小部屋あり。小部屋入口の上の一部がコンクリート塗りに「遺言一新設年月日 大正六年……」と彫られている。墓室内に厨子甕片（ボージヤー、家型上焼）が散乱。	彫り込まれた文字はp86に掲載。	踏査、KACRI
239	墓？	埋没	掘込墓。茂みに覆われており、詳細不明。	墓の正面は入り口が3つほどある岩で囲われているように見える。	踏査、KACRI
240	墓	破損、埋没	亀甲墓。墓の正面は切石積みで、しっくい塗り。墓室はアーチ型。墓口の前に墓碑あり。「……村大工廻 ……願？小御墓所」と読める。	彫り込まれた文字はp86に掲載。	踏査、KACRI
241	墓	良好	掘込墓。墓の正面は野面積み。墓口の周りのみ切石。袖垣部分の岩盤に3つほど岩陰がある。墓室内に頭骨1点あり。	周辺の岩陰は側墓の可能性あり。	踏査、KACRI
242	墓	良好	掘込墓。墓庭に厨子甕片あり。墓口の前に厨子甕（家型上焼）の蓋あり。墓のすぐ右上斜面に岩陰があり、そこにも厨子甕（マンガン）数点あり。		踏査、KACRI
243	墓	良好	掘込墓。墓の正面は野面積みで、墓口の周りは切石積み。墓室内に厨子甕（ボージヤー）片あり。		踏査、KACRI
244	墓	良好	掘込墓。墓の正面は野面積み。墓室内に厨子甕片と人骨が散乱。No.244とNo.245は同じ岩盤に並んで掘られているが、墓庭部分は野面積みの石積みで仕切られている。		踏査、KACRI
245	墓	良好	掘込墓。墓の正面は野面積み。墓室内に厨子甕（マンガン）片と人骨が散乱。		踏査、KACRI
246	墓	良好	掘込墓。墓の正面は大きな岩で塞いである。墓の向かって左隣に小さな岩穴があり、側墓かと思われる。		踏査、KACRI
247	墓	良好	掘込墓。墓の正面は切石積みにしっくい塗り。墓室は切石の石積みで天井はアーチ型。		踏査、KACRI
248	岩陰・洞穴	良好	加工された洞穴。狭い入り口の岩陰で、内部は広がっている。壁に掘削の痕跡あり。	壠の可能性あり。	踏査、KACRI
249	墓	良好	掘込墓か。墓の正面は野面積みでしっくい塗り。墓口はコンクリートブロックで塞がれている。		踏査、KACRI

番号	区分	状態	詳細	備考	出典
250	墓	良好	掘込墓。墓の正面は切石積みでしつくい塗り。墓口はコンクリートブロックで塞がれている。		踏査
251	壕	良好	壕。掘削された洞穴が奥に伸びている。入口は幅2.5m、縦1mほどの大きさ。奥行き5～6mほど。		踏査
252	墓	半壊、埋没	亀甲墓か平葺墓。墓室は切石積みで天井はアーチ型。No.252とNo.253はすぐ隣り合って、墓庭部分は切石積みで仕切られている。		踏査、KACRI
253	墓	半分埋没	亀甲墓か平葺墓。墓室は切石の石積みで天井はアーチ型。		踏査、KACRI
254	墓	崩壊	亀甲墓か。亀甲墓の屋根の縁と思われる石積みと、神垣神石の一部と思われるしつくい塗りされた石灰岩の柱のようなものが残存。		踏査
255	墓	半壊、埋没	亀甲墓か平葺墓。墓室は切石積みで天井はアーチ型。		踏査、KACRI
256	石積み	良好	擁壁。コンクリートブロックと石灰岩の石積み。	掩体壕の後ろにあり、おそらく飛行場への誘導路としてつくられている。	KACRI
257	掩体壕	半壊、埋没	掩体壕。上部のみ確認可能。擁壁は独特な丸みがある。両端は開いている。		KACRI
258	掩体壕	埋没	掩体壕。		KACRI
259	掩体壕	良好	掩体壕。入り口はフェンスで塞がれている。内部は木の支柱で補強。		KACRI
260	掩体壕	崩壊、埋没	掩体壕。一部のみ確認可能。入り口はコンクリートブロックで塞がれている。		KACRI
261	掩体壕	良好	掩体壕。入り口はフェンスで塞がれている。内部は木の支柱で補強。		KACRI
262	掩体壕	良好	掩体壕。入り口はフェンスで塞がれている。内部は木の支柱で補強。		KACRI
263	掩体壕	崩壊、埋没	掩体壕。上部のみ確認可能。		KACRI
264	掩体壕	埋没	掩体壕。上部のみ確認可能。		KACRI
265	掩体壕	半分埋没	掩体壕。内部は天井まで土が詰まっている。		KACRI
266	墓	半壊、半分埋没	平葺墓。墓室は切石の石積みで、アーチ型。		踏査
267	墓	半分埋没	平葺墓。		踏査
268	墓	破損	掘込墓。墓の正面は切石積みにしつくい塗り。墓室奥が部屋のように掘り込んである。		踏査
269	墓	良好	掘込墓。側墓あり。墓の正面は野面積みで、墓口は切石で組む。		踏査
270	墓	不良	掘込墓。墓の正面は全体的にガジュマルに覆われており、墓室はほとんど確認できない。墓庭に整形された石灰岩塊がある。		踏査
271	墓	良好	堀込墓。墓の正面はしつくい塗り。墓室は岩盤掘り込み。		踏査
272	墓	半分埋没	掘込墓。墓の正面はしつくい塗り。墓室は岩盤掘り込み。いくつかの厨子甕片（マンガン）あり。		踏査
273	墓	半分埋没	掘込墓。墓の前方に土盛りがある。墓前方に厨子甕片（ボージャー）が散乱。		踏査
274	墓	埋没	掘込墓。上部のみ確認可能。墓周辺に厨子甕片（マンガン）数点が散乱。		踏査
275	石積み	—	石積み。2列になっており、渓谷を東から西へ横切っている。	擁壁もしくは堤と推測される。	KACRI

番号	区分	状態	詳細	備考	出典
276	岩陰・洞穴	一	岩陰。	墓の可能性あり。	KACRI
277	岩陰・洞穴	一	岩陰。長さが7m~8m、深さは2~3mある。高さは90cm以上。	壕の可能性があるが、確証は無い。	KACRI
278	岩陰・洞穴	良好	岩陰。人為的に拡張されている。広さは3m。高さ1.5m、奥行き1m。	墓か壕の可能性あり。	KACRI
279	拝所?	一	岩陰。高さ3m、広さ6m。座れるような空間があり、香炉のようなものもある。	拝所の可能性あり。最近使用されていた可能性がある。	KACRI
280	墓	良好	洞穴墓。墓室内に人骨と厨子甕（家型土焼）あり。		KACRI
281	墓?	一	掘込墓か。自然の洞穴の入り口がコンクリートブロックで塞がれている。	壕の可能性あり。	KACRI
282	墓?	良好	掘込墓か。自然の洞穴の入り口がコンクリートブロックで塞がれている。	No.281と同じようなもの。壕の可能性あり。	KACRI
283	石積み	良好	石積み。	堰と思われる。	KACRI
284	墓	良好	堀込墓の可能性が高い。自然の洞穴の入り口がコンクリートブロックで塞がれている。		KACRI
285	墓	良好	掘込墓。墓口は長方形。墓室の天井は水平。	石灰岩層の下に作られた墓の並びの中にある。	KACRI
286	墓	良好	掘込墓。墓口は長方形。		KACRI
287	墓	良好	掘込墓。墓口はコンクリートブロックで塞がれている。低い位置にあり、幅は広い。	岩穴開込墓の可能性がある。	KACRI
288	墓	良好	岩穴開込墓か。墓口は石灰岩の石積みで塞がれている。		KACRI
289	墓	良好	掘込墓。開口部は小さいが奥行きは3mある。		KACRI
290	墓	半分埋没	掘込墓。開口部は小さいが奥行きは3mある。	谷底からおよそ8m上のところにある。アスファルトが落ちている。	KACRI
291	墓	良好	掘込墓。墓の正面は石灰岩の石積み。およそ1m×60cm。奥行きは最低でも3m。		KACRI
292	墓	良好	掘込墓。墓前に厨子甕片あり。	今は大きな木が入り口を塞いでいる。	KACRI
293	墓?	一	洞穴墓か。内部は小さい。	No.292の近くにあり、関連があると思われる。	KACRI
294	墓	良好	掘込墓。斜面の下にある。		KACRI
295	墓	良好	洞穴墓。開口部は小さい。		KACRI
296	墓	破損	堀込墓の可能性が高い。	壕の可能性もあり。	KACRI
297	岩陰・洞穴	一部埋没	岩陰。最近の焚き火の跡あり。	拝所、あるいは壕の可能性あり。	KACRI
298	壕?	良好	壕か。内部に火によって黒ずんでいる箇所あり。		KACRI
299	壕?	良好	壕か。自然の洞穴が人為的に拡張されている。奥行きおよそ3m。右に曲がっている。		KACRI
300	壕?	良好	壕か。自然の洞穴が人為的に拡張されている。左側に石積みあり。		KACRI
301	壕?	良好	壕か。自然の洞穴が人為的に拡張されている。奥行きおよそ1m。		KACRI
302	壕?	良好	自然の洞穴。入り口に石列がある。	No.298~301とは異なった自然の洞穴。墓あるいは壕の可能性あり。	KACRI

番号	区分	状態	詳細	備考	出典
303	壕?	良好	壕か。入り口からすぐ左に曲がっている。		KACRI
304	壕?	良好	壕か。入り口からすぐ左に曲がっている。	No.303とつながっている。	KACRI
305	壕?	良好	壕か。奥行きは浅く、開口部は荒い石灰岩の石積みがある。	墓あるいは壕の可能性あり。	KACRI
306	壕	良好	壕。少なくとも高さが2mある部屋に、幅60cmほどの幅の3つの小部屋がある。	内部の小部屋の一部は避難壕として利用されていたと思われる。	KACRI
307	岩陰・洞穴	良好	岩陰。加工された跡がある。火によって黒ずんでいる箇所あり。		KACRI
308	壕?	良好	壕か。長く続く岩陰で、4箇所の開口部を持つ。		KACRI
309	壕?	良好	壕か。長く続く岩陰。2つの自然洞穴があり、1つめの洞穴はおよそ2m×1mの大きさ。2つ目はトンネルになっていて、削られた痕跡がある。		KACRI
310	壕?	良好	壕か。内部は右に曲がっている。近くの川床に厨子甕片あり。		KACRI
311	墓	破損	洞穴墓。石列を並べた小道が墓に続いている。		KACRI
312	墓	良好	洞穴墓。		KACRI
313	墓	良好	洞穴墓。		KACRI
314	墓	良好	洞穴墓。		KACRI
315	墓	良好	岩陰墓。墓口の左側に荒い石積み。		KACRI
316	墓	—	掘込墓。墓室内に厨子甕片あり。	No.314の4.5m下の地点にある。	KACRI
317	岩陰・洞穴	—	岩陰。	No.316の下にある。洞穴墓の可能性あり。	KACRI
318	墓	半壊、半分埋没	掘込墓。		KACRI
319	壕?	良好	加工された洞穴。開口部は2m×3mで水平。内部は奥行き4mに拡張されている。	後に墓として再利用された可能性あり。	KACRI
320	墓	埋没	破風墓。墓の正面は石積み。墓庭に蓋石が転がっている。	墓室内は奥行き4~5mの可能性あり。昔に建て替えた形跡がある。	KACRI
321	墓	良好	洞穴墓。墓室は広さ約2m×2m。高さ1.5m。		KACRI
322	墓	半壊	掘込墓。墓室の奥行きは最低4m。墓室内に厨子甕片あり。	壕の可能性あり。	KACRI
323	その他	—	文化財の位置は把握されているが、KACRIの資料欠落につき、詳細は不明。		KACRI
324	岩陰・洞穴	良好	岩陰。入り口は長方形で幅3m、高さ2m。	墓あるいは壕の可能性あり。	KACRI
325	岩陰・洞穴	良好	加工された洞穴。入り口は1m×0.4m。人ひとりが入れるくらいの大きさ。	壕か見張り台の可能性あり。	KACRI
326	岩陰・洞穴	良好	加工された洞穴。No.325と同じ形をしているが、奥行きはない。	墓、あるいは未完成の壕の可能性あり。	KACRI
327	壕	良好	壕。入り口は1m。		KACRI
328	壕?	良好	加工された洞穴。奥行きは最低でも20m。入り口は長方形で2m×2mある。	壕の可能性が高い。	KACRI
329	岩陰・洞穴	良好	岩陰。	壕の可能性あり。	KACRI

番号	区分	状態	詳細	備考	出典
330	壕	良好	壕。入り口が2箇所ある。1つめの出入り口から入るとトンネルが右と左に分かれるが、途中で再び接続する。内部にはランプで焦げたような跡のある壁龕あり。壁龕がないほうのトンネルをいくと2つめの出入り口。2つめの出入り口には1つ部屋になっている箇所があり、土砂が流れ込んで埋没している。		KACRI
331	壕	良好	壕。内部は右に曲がっている。崖上10mの箇所にも開口部があるが、ロープやはしごを使わないとたどり着けない。	未完成の壕と推測される。	KACRI
332	壕	良好	壕。内部の広さは4m。地表から4m～5mの所に開口部がある。		KACRI
333	岩陰・洞穴	良好	岩陰。入り口に石積みあり。地表から5～6mのところに開口部がある。	掘込墓あるいは壕の可能性あり。	KACRI
334	岩陰・洞穴	良好	岩陰。地表から2mのところに開口部がある。	掘込墓あるいは壕の可能性あり。	KACRI
335	岩陰・洞穴	良好	岩陰。地表から2mのところに開口部がある。	掘込墓あるいは壕の可能性あり。	KACRI
336	岩陰・洞穴	良好	自然の洞穴。奥行きは最低でも4m。地表から2～3mのところに開口部がある。	掘込墓あるいは壕の可能性あり。	KACRI

踏査の際に発見した墓誌

※判読し難い箇所のうち文字数が推定できる場合は「□」、文字数不明の場合は「……」で表記した。

個人の氏名と推測されるため伏せた箇所は「×」で表記した。

No103 (1) 墓室内の文字

墓□□□我
為□□□
候得□□□
七月□□□
口写□□□
候様尤情□□□
満増いたし
依々遣伝□□□

No103 (2) 墓室内の文字

我 サル
土砂
兄弟兩人吟味遂□□

No104 墓室内の文字

光緒貳十六
明治參十三年七月廿五日ヨリ
□□□十一月十九日迄致首尾
全日泡瀬嶋ヨリ元祖御骨
移□御燒香等差上申候
仕□人三代××

No238 墓室奥壁に彫られた文字

遺言
一新設年月日大正六年丁酉七月二十二日
一己至全十一月二十六日
一墓譜請人××××並二全人長男
一棚二居付人譜請人ヨリ長男々々
一添付へ入ル者十四代以後ノ長男々々
一八三十三年忌済ニ次
一第添付へ入レルコト
一此墓へ入ルベキ者本家分家者
一長男々々ハ十四
一代以後タリトモ此
一墓入レ其外ハ別
一所ヘ入レルコト
以上

No240墓庭の斜面下に
落ちていた石碑

村字大工廻
願小御墓所
□有者 × × × □

収集した文献資料

著編者名、「論文名」『文献名』、発行者名、発行年 の順に掲載。

Ⅱ章の文化財地図の作成に用いた資料

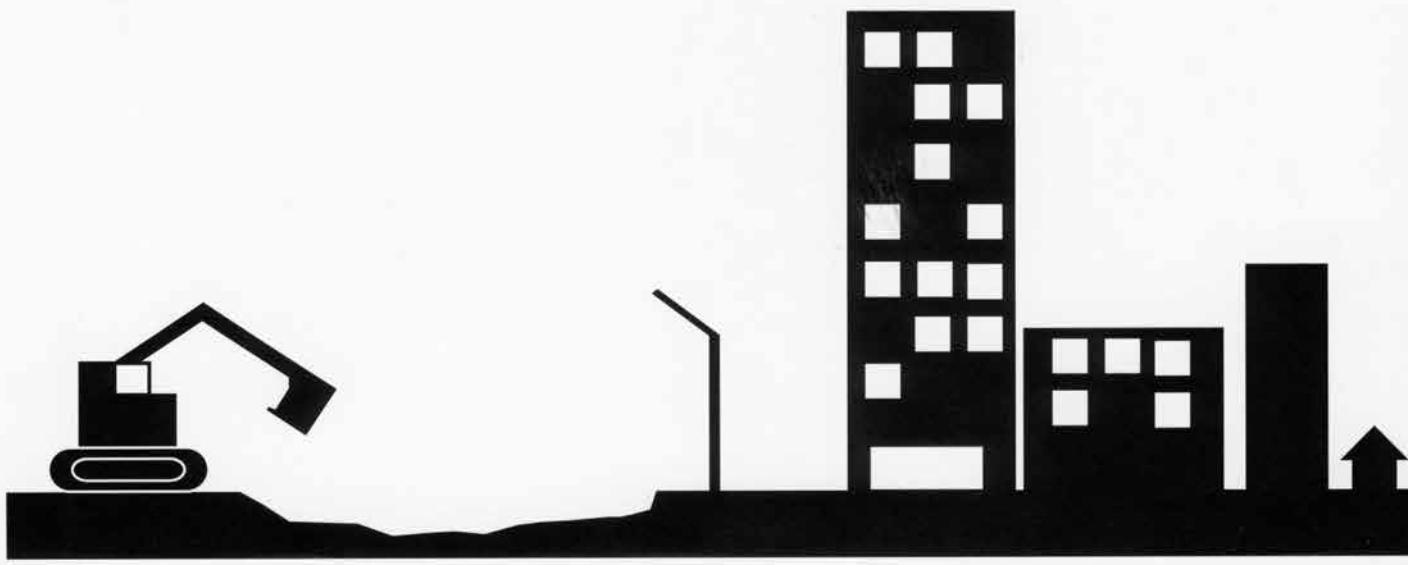
- 廣山實「沖縄市字山内の地名」『沖縄市立郷土博物館紀要 あやみや 創刊号』 沖縄市立郷土博物館 1993年
沖縄県『2500分の1都市計画図（昭和54年測量、平成7年修正）』 沖縄県 1995年
上地誌編集委員会『上地誌』 上地郷友会 2000年
沖縄市なかばる共栄会『發仲原誌 よみがえる心の故郷』 沖縄市なかばる共栄会 2000年
沖縄市立郷土博物館『沖縄市文化財調査報告書 第28集 沖縄市の遺跡－第2次分布調査報告書－』 沖縄市教育委員会 2002年
吳富士誌編集委員会『吳富士誌』 吳富士親交会 2004年
沖縄市立郷土博物館『沖縄市文化財調査報告書 第32集 沖縄市の伝承をたずねて 中北部編』 沖縄市教育委員会 2007年
沖縄市立郷土博物館『沖縄市文化財調査報告書 第35集 沖縄市の伝承をたずねて 東西編』 沖縄市教育委員会 2008年
大工廻字誌編集委員会『基地に消えた古里 大工廻誌』 大工廻郷友会 2009年
青那志字誌編集委員会『基地に消えた故郷 青那志誌』 青那志共栄会 2009年
著編者不明『字宇久田部落略図』（著者不明、発行年不明、所蔵は沖縄市総務部総務課市史編集担当）
米軍『米軍撮影空中写真』（撮影年は1945年、撮影は米軍。デュープネガの所蔵、管理は沖縄県公文書館）
比嘉真勢『旧字大工廻藏書 旧部落ノ部 1967年3月18日 大工廻 比嘉真勢寄贈』（提供資料、記述されたのは1967年）
沖縄市教育委員会『倉敷集落跡分布調査資料』（調査資料、調査年は1987年）
大工廻字誌編集委員会『大工廻 字誌編集に係わる聞きとり調査資料』（提供資料、調査年は2002年）
米国空軍『Kadena airbase Cultural Resource Inventory』（提供資料、調査年は2005年）

参考文献

- 64th Engineer Base Topographic Battalion『米軍作成地形図 OKINAWA 1/4800』 GHQ,FEC 1949年
沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社 1983年
沖縄市『沖縄市史 第二巻 資料編 文献資料にみる歴史』 沖縄市教育委員会 1984年
「角川 日本地名大辞典」編纂委員会『角川 日本地名大辞典 47 沖縄県』 角川書店 1986年
沖縄市『沖縄市史 第八巻 資料編7・付録 近代期の新聞に見る歴史』 沖縄市 1990年
沖縄市立郷土博物館『沖縄市史 第七巻 資料編6・上 近代統計書に見る歴史』 沖縄市教育委員会 1990年
都市科学政策研究所『沖縄市軍用地跡地利用計画策定業務調査報告書(嘉手納弾薬庫地区西内喜納原)』 都市科学政策研究所 1994年
沖縄市企画部平和文化振興課『沖縄市史 第七巻 資料編6・下 近代統計書に見る歴史』 沖縄市役所 1997年
地図資料集成編纂会『大正・昭和琉球諸島地形図集成』 柏書房 1999年
沖縄市立郷土博物館『沖縄市文化財調査報告書 第22集 馬上原遺跡－室川貝塚崖上地区－』
沖縄市総合庁舎建設に伴う馬上原遺跡記録保存発掘調査の報告書』 沖縄市教育委員会 2000年
沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第12集
沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(II)－中部編－』 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002年
沖縄市立郷土博物館『沖縄市文化財調査報告書 第31集 池原の伝承をたずねて』 沖縄市教育委員会 2005年
国直字誌編纂委員会『嘉手納町 国直誌』国直字誌編纂委員会 2005年
北谷町教育委員会『北谷町文化財調査報告書 第24集 北谷町の地名－戦前の北谷の姿－』 北谷町教育委員会 2006年
沖縄市立郷土博物館『沖縄市文化財調査報告書 第33集 森根竹之花原古墓群
－嘉手納飛行場内学校施設整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 沖縄市教育委員会 2007年
沖縄市『沖縄市史 第四巻 自然・地理・考古編－地理・考古編－』 沖縄市役所 2008年
沖縄市郷土博物館『沖縄市文化財調査報告書 第34集 屋取集落に生きる
－池原上田原・仕明座原遺跡発掘調査報告書－』 沖縄市教育委員会 2008年

III 章

市内遺跡 試掘調査報告



1 比屋根小学校建設に伴う試掘調査〔平成17(2005)年度〕

調査地

沖縄市与儀前原・後原

調査年月日

2005年7月19・20日、10月19・20日

2006年1月31日～2月8日

調査経緯

調査地に小学校建設（現比屋根小学校）の計画が持ち上がったが、調査地はグスク時代の遺跡である与儀遺跡と比屋根遺跡の中間に位置しており、それぞれの遺跡の広がりが考えられたため、試掘調査を行なった。

位置と環境

調査地は沖縄市南東部の与儀に位置する。地形は小起伏丘陵にはさまれた深い谷地である。標高は約8～11m、東側は、現在は埋め立てが進んでいるが、埋め立て前は海がせまっていた。地質は島尻層群泥岩・砂岩と考えられる。

調査地の東西には与儀・比屋根の集落があり、それぞれの集落の背後には、拝所でグスク時代の遺跡でもある上殿（与儀遺跡）・ウフドゥン（比屋根遺跡）が立地する。また、文献では『絵図郷村帳』（1649年）に「与儀」「ひや根」との記載が見られ、少なくとも17世紀から集落があったことがうかがえる。



図9 調査地位置図



図10 調査地と周辺遺跡

調査概要

調査は調査地を30m間隔で碁盤の目状に区画し、その区画を基本として計25ヶ所の掘削を行なった。それぞれ縦3.7m横3m深さ3mを基本としてバックホウにて掘削を行なった。

近代の沖縄産陶器等が散見されたが、遺跡等の発見には至らなかった。調査地には、泥岩風化土壌のいわゆるジャーガルが厚く堆積しており、部分的には地表から5mほど掘り下げたが、泥岩や砂岩などの岩盤は検出されなかった。



図11 試掘坑 位置図



図12 試掘坑 位置図（空撮）



写真25 遠景 南から



写真26 遠景 南西から



写真27 遠景 北から



写真28 遠景 東から



写真29 試掘状況



写真30 No.5 東壁



写真31 No.19 東壁



写真32 No.21 東壁

2 ゴミ焼却用新炉建設に伴う試掘調査(平成18(2006)年度)

調査地

沖縄市池原奈呂加原・勢頭原

調査年月日

2006年1月15日～2月12日

調査経緯

調査地にゴミ焼却用新炉建設の計画が持ち上がる。北側に池原上田原・仕明座原遺跡があり、調査地も同様の地形が広がっており、貝塚時代後期の遺跡がある可能性が考えられたため、試掘調査を行なった。

位置と環境

調査地は沖縄市北部の池原に位置する。丘陵地であり、標高は約55～75mで尾根と谷が入り組んでいる。地質は国頭層群名護層や琉球層群国頭礫層である。

調査地の南は、王府時代は杣山であったといわれており、この一帯も山林であったと考えられる。しかし、時代が下ると周辺には屋取集落が形成され、東に開地集落、西に倉敷集落がつくられる。東の開地集落周辺は、池原上田原・仕明座原遺跡として、発掘調査を行なっており、屋取集落と共に貝塚時代後期の遺物が確認されている。戦後は弾薬庫として米軍に接収され使用されていた。

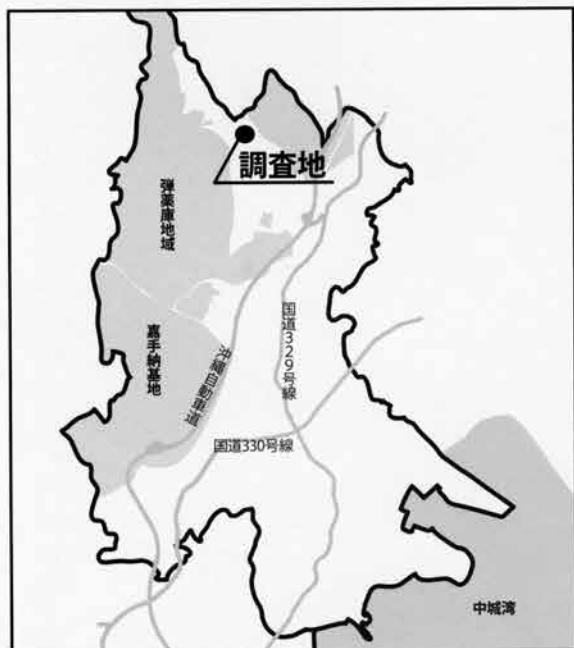


図13 調査地位置図

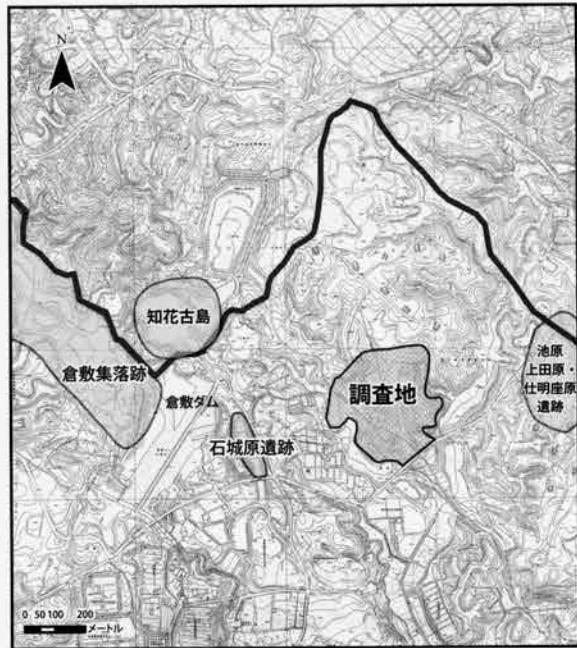


図14 調査地と周辺遺跡

調査概要

調査は調査地を30m間隔で基盤の目状に区画し、その区画を基本として計51ヶ所の掘削を行なった。バックホウで掘削できるところは縦3m横3m深さ3mを基本として行ない、バックホウの進入が困難な場所は、手掘りで縦2m横2m深さ1mを基本として調査を行なった。

調査の結果、遺跡等の発見には至らなかった。調査地には、赤黄色土壌のいわゆる国頭マージが厚く堆積している。また試掘坑No.16、43では千枚岩の岩盤が確認されている。

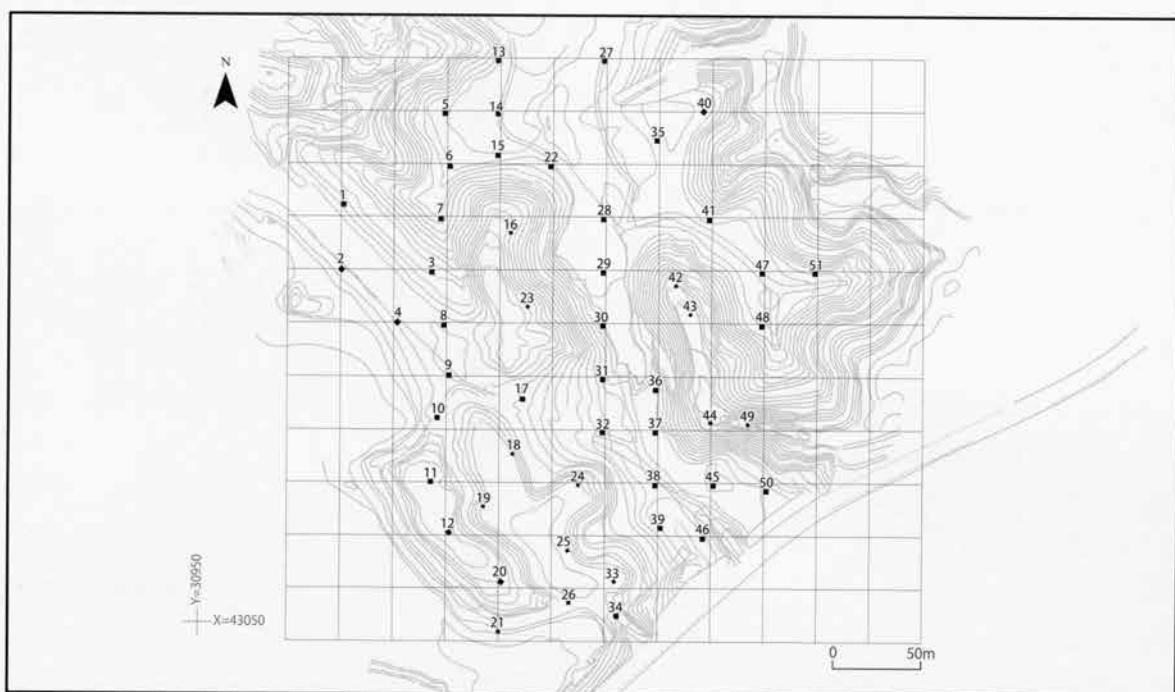


図15 試掘坑位置図



図16 試掘坑位置図（空撮）



写真33 遠景 北西から



写真34 No.19付近 西から



写真35 No.22付近 南東から



写真36 試掘状況 バックホウ



写真37 試掘状況 手掘り



写真38 No.16 北壁



写真39 No.19 北壁



写真40 No.43 北壁

3 平成19年度建造物解体及びマンション建設に伴う 仲宗根貝塚試掘調査〔平成19（2007）年度〕

調査地

沖縄県沖縄市仲宗根町37番

調査年月日

2007年10月26日～31日・11月14日

調査経緯

調査地において建造物解体及びマンション建設の計画が持ち上がる。調査地は仲宗根貝塚に隣接していることから、遺跡の範囲が拡大する可能性が考えられたため、試掘調査を行なった。

位置と環境

調査地は沖縄市中央部の仲宗根町に位置する。台地の縁辺部に位置し、標高は約110～109m、地質は琉球層群琉球石灰岩・島尻層群泥岩である。付近には室川井泉・ムルガー・ティラガー・フサトガー・ナヂチガ等の湧泉が見られる。

仲宗根貝塚は1933年、多和田真淳氏によって発見された。1966年・1979年に発掘調査が行なわれ、縄文時代後期～晩期相当期の土器・石器・骨製品・貝製品・人骨片・貝類・獸魚骨が発見されており、グスク時代の遺物は土器・カムィヤキ・中国陶磁器・鉄製品・玉製品・獸骨・炭化米などが出土している。

仲宗根貝塚は仲宗根ウガンと呼ばれる挾所でもあり、5月ウマチーなどで挾まれている。『琉球国由来記』には「内城アマミヤ嶽」、『琉球国旧記』には「内城雨宮嶽」と記されている。

本遺跡の周辺には室川貝塚・馬上原遺跡などといった先史時代の遺跡が見られる。また、『馬上原遺跡』発掘調査報告書の民俗地図によると、戦前、調査地は畠地であったことが確認されている。

調査概要

調査は調査地を20m間隔で碁盤の目状に区画し、その区画を基本として計10ヶ所の掘削を行なった。試掘坑の規模はそれぞれ縦3m横3m深さ3mを基本としている。

結果、試掘坑No.5・9・10の計3ヶ所において遺物包含層を確認し、それぞれ包含層の落ち込みを確認した。

今回の試掘調査では、青磁・染付・カムィヤキ・グスク土器・先史土器・石器などが出土しており、出土遺物の多くはグスク時代の遺物が占めている。

層序

層序は基本的に5層確認された。I層は建物建設時の埋土などの客土・搅乱層。II層は戦前の耕作土と思われる層。III層は遺物包含層で、出土遺物からグスク時代を主体とする層と思われる。IV層もわずかにだが遺物を含む遺物包含層であり、縄文時代相当期の土器と考えられるものが確認されている。V層はいわゆる地山であり、マージ層・石灰岩層・泥岩層が確認された。マージ層は周辺のボーリン



図17 調査地位置図

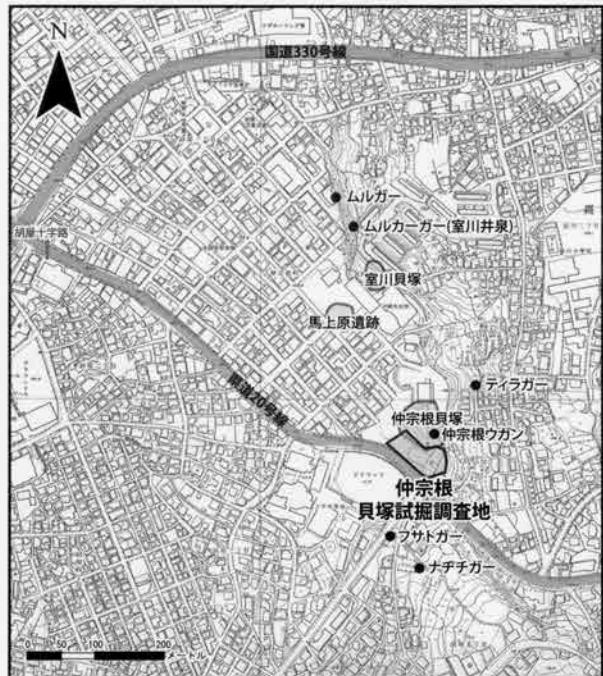


図18 調査地と周辺遺跡



図19 試掘坑位置図

グ調査等から島尻マージ層と考えられる。

島尻マージ層は試掘坑No.3・5～10で確認された。仲宗根貝塚（仲宗根ウガン）に隣接する試掘坑No.1・2・4では搅乱層直下、No.6では島尻マージ層下に石灰岩が見られた。試掘坑No.3・7では島尻マージ層下より泥岩が確認されている。

遺物包含層は、試掘坑No.5・9・10において確認された。

I層：客土・搅乱層

II層：戦前の耕作土

III層：遺物包含層①（グスク時代）

IV層：遺物包含層②（縄文時代相当期）

V層：地山層（島尻マージ層・石灰岩層・泥岩層）

遺構

試掘坑No.5・9・10において、落ち込みが検出された。落ち込みは、No.5では試掘坑の南西側隅に見られた。No.9においては試掘坑の南側から北側に向かって層が傾斜し、No.10においては東側から西側に向かって層が傾斜していた。見つかった当初、落ち込みは土坑あるいは溝状の遺構ではないかと考えていた。しかし、平成20年度の本発掘調査において、落ち込みは遺構ではなく、自然の陥没地形である可能性が高いことが確認された。本発掘調査の内容については、今後刊行される報告書にて報告する。

出土遺物

遺物は青磁・染付・カムィヤキ・グスク土器・先史土器・石器が確認された。いずれの資料も1966年・1979年に琉球政府文化財保護委員会及び沖縄県教育委員会によって行なわれた発掘調査の出土遺物と同様の遺物が出土している。遺物の大半はグスク時代の遺物が占めており、先史時代の遺物は少ない。また、貝類や魚骨・獸骨などの自然遺物は確認できなかった。

本報告では、比較的残存状況の良いものを報告する。また、個々の遺物の詳細については観察表において記述する。

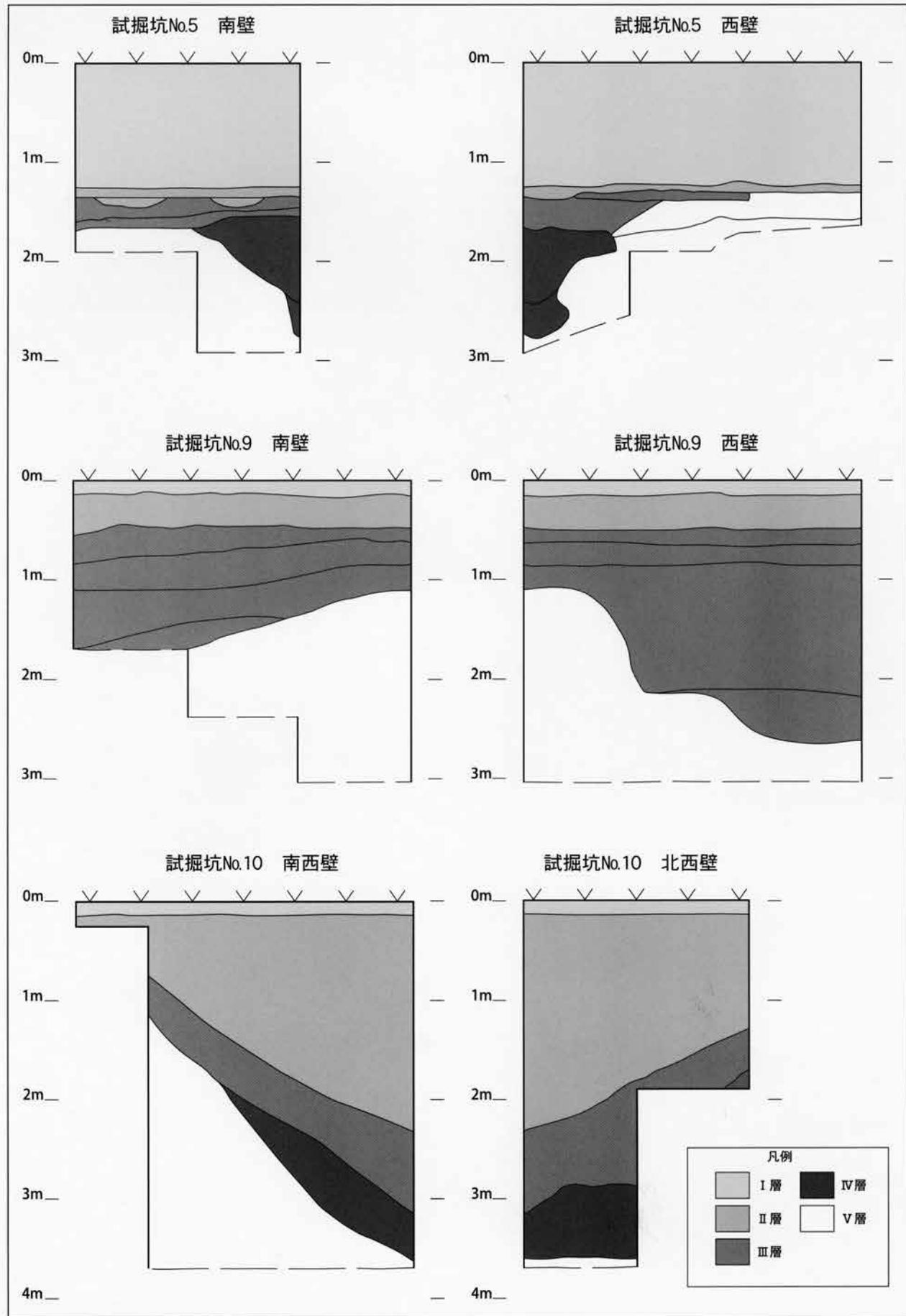


図20 試掘坑No.5・9・10 土層略図



写真41 試掘坑No.5 南壁



写真42 試掘坑No.9 南壁



写真43 試掘坑No.9 西壁



写真44 試掘坑No.10 北西壁



写真45 試掘坑No.10 南西壁

青磁

青磁は30点出土しており、内8点を報告する。器種としては碗・皿・盤が見られる。

※単位はcm。

図写真	器種	器高	口径	底径	所見	出土地点	備考
図21-1 写真46-1	碗	—	—	—	雷文碗。雷文はヘラ描きによるものである。内面には圈線が見られる。釉色は薄緑色。貫入は見られない。	試掘坑 No.9 Ⅲ層	
図21-2 写真46-4	碗	—	—	5	蓮弁文碗。内底面が露胎し、印花文が施される。釉色は緑色。貫入は見られない。	試掘坑 No.9 Ⅲ層	
図21-3 写真6-3	碗	—	—	6	無文碗。高台～内底面に釉剥ぎがなされる。釉色は緑色。貫入は見られない。	試掘坑 No.9 Ⅲ層	
図21-4 写真46-2	皿	—	11	—	口折皿。外面に文様と思われる筋書が見られる。器面にやや貫入があり、釉が厚くかかる箇所も見られる。釉色は薄緑色。貫入有り。	試掘坑 No.9 Ⅲ層	
図21-5 写真46-5	碗	—	—	6.6	無文碗。外面に文様が見られないが、見込みに草花文を施す。高台外面から内底面にかけて釉剥ぎがなされる。釉色は薄緑色。内外面共に貫入が見られる。	試掘坑 No.9 Ⅲ層	
図21-6 写真46-6	皿	—	—	5.4	外面は無文。見込みに草文が見られる。内底面は釉が見られず、露胎する。釉色は薄緑色。貫入は見られない。	試掘坑 No.9 Ⅲ層	
図21-7 写真46-7	盤	—	20	—	直口盤の口縁部片。口縁部が玉縁状に肥厚する。文様は見られない。釉色は緑色。内外面共に貫入が見られる。	試掘坑 No.10 Ⅲ層	

表2 青磁 遺物観察表

染付

染付は1点出土している。口縁部片で、器種は皿と思われる。

※単位はcm。

図写真	器種	器高	口径	底径	所見	出土地点	備考
図21-8 写真46-8	皿	—	—	—	口縁部片。傾きから皿であると思われる。両面に吳須による施文が見られる。内面の文様は口唇部直下になされ、圈線が施される。器面全体に貫入。吳須の発色がやや淡い。	試掘坑 No.9 Ⅲ層	

表3 染付 遺物観察表

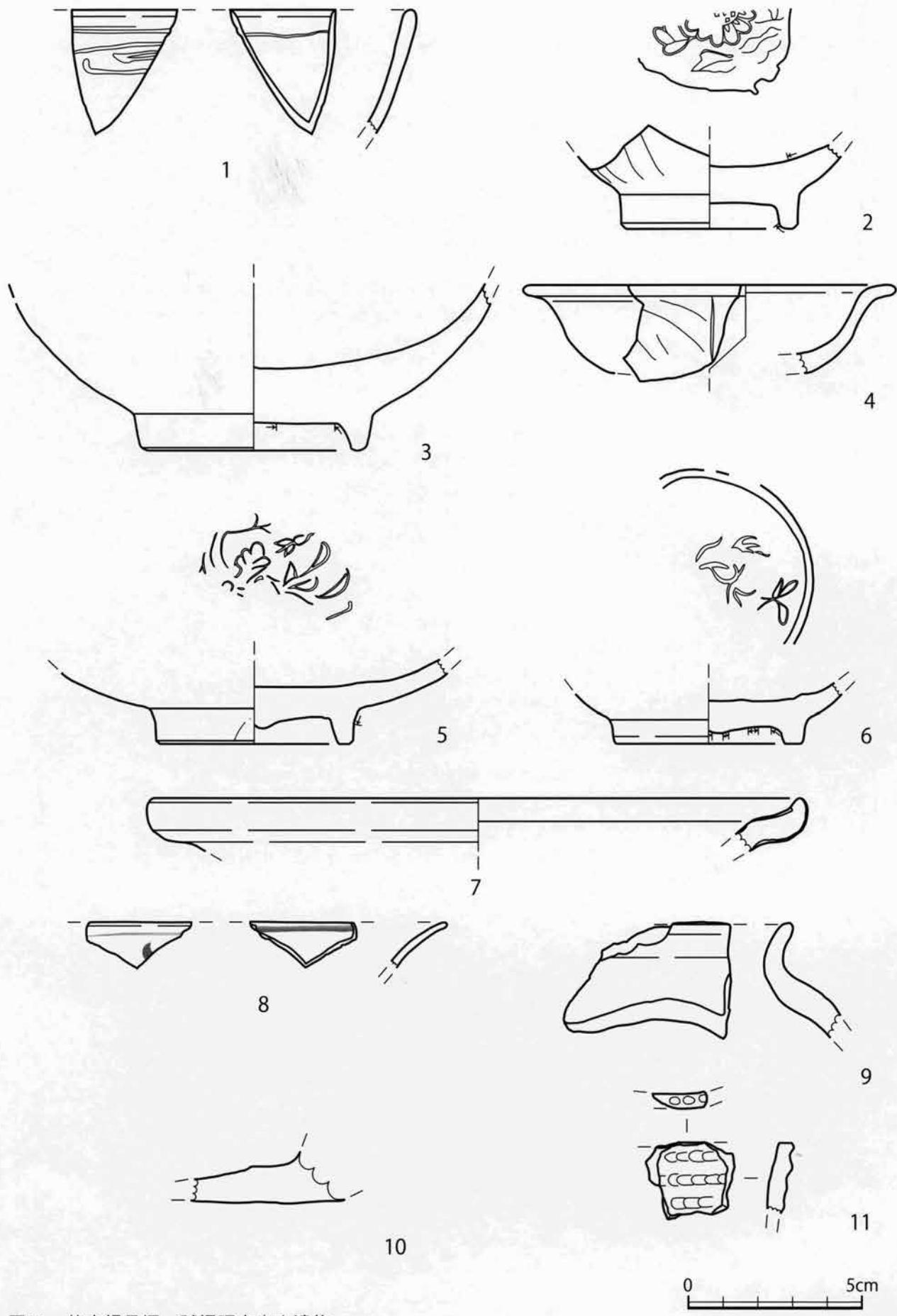


図21 仲宗根貝塚 試掘調査出土遺物

カムィヤキ

カムィヤキは3点出土しており、内1点を報告する。器種は壺で、口縁部から肩部にかけて残存している。

※単位はcm。

図写真	器種	器高	口径	底径	所見	出土地点	備考
図21-9 写真46-9	壺	—	—	—	口縁部片。内外面共に回転ナデが見られ、内面にわずかに叩きの跡が見られる。器色は灰色(N4/)となる。胎土はサンドイッチ状になり、内部の色はにぶい赤褐色(5YR4/3)となる。	試掘坑 No.5 Ⅲ層	

表4 カムィヤキ 遺物観察表

土器

土器は72点出土している。しかし多くは小破片であり、時代等は不明である。

そのうち、グスク土器の底部片と縄文時代後期相当期の土器と考えられるものがそれぞれ1点ずつ出土しており、それを報告する。

※単位はcm。

図写真	器種	器高	口径	底径	所見	出土地点	備考
図21-10 写真46-10	不明	—	—	—	器種不明の底部片。内面の立ち上がりは見られる。外面の立ち上がり部が破損しているため、底径は不明。器色は橙色(7.5YR7/6)。胎土はサンドイッチ状になり、内部の色は灰白色(2.5Y7/5)となる。胎土に白色砂粒・黒色粒などを含む。	試掘坑 No.9 Ⅲ層	

表5 グスク土器 遺物観察表

※単位はcm。

図写真	器種	器高	口径	底径	器厚	所見	出土地点	備考
図21-11 写真46-11	深鉢形	—	—	—	0.55～ 0.4	器面は摩耗する。口縁部と口唇部に押引文が見られる。器色は赤褐色(5YR4/8)。胎土に1mm以下の砂粒・石英粒を含む。	試掘坑 No.9 Ⅲ層	

表6 先史土器 遺物観察表

石器

石器は石斧・石皿・器種不明石器片がそれぞれ1点ずつ、計3点出土した。

※単位はcm、g。

図写真	種別	法量				石質	所見	出土地点	備考
		長径	短径	厚さ	重量				
図22-1 写真46-12	磨製石斧	5.5	4.8	1.25	80	緑色岩	両刃磨製石斧。刃部の他、側面にも磨面が見られる。破損品のため、全形は不明。	試掘坑 No.9 IV層	
図22-2 写真46-13	石皿	11.3	5.7	2.45	220	砂岩	平面形はくの字形を呈する。磨面は表面のみ見られる。裏面は自然面である。	試掘坑 No.9 III層	
図22-3 写真46-14	石器片	6.9	4.6	1.6	66	緑色岩	器種不明としたが、石斧の可能性がある。破損品のため、全形は不明。	試掘坑 No.9 III層	

表7 石器 遺物観察表

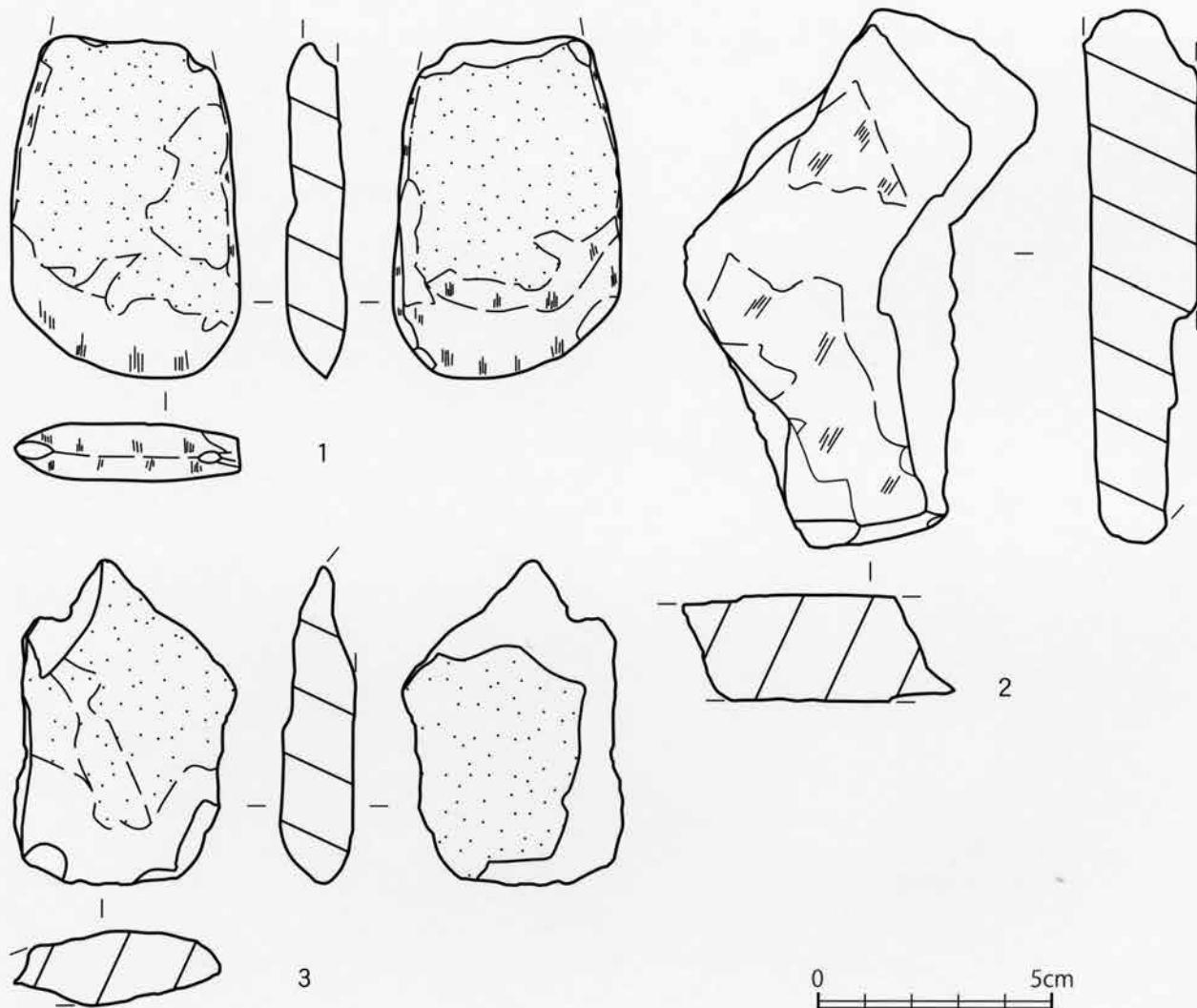


図22 仲宗根貝塚 試掘調査出土遺物

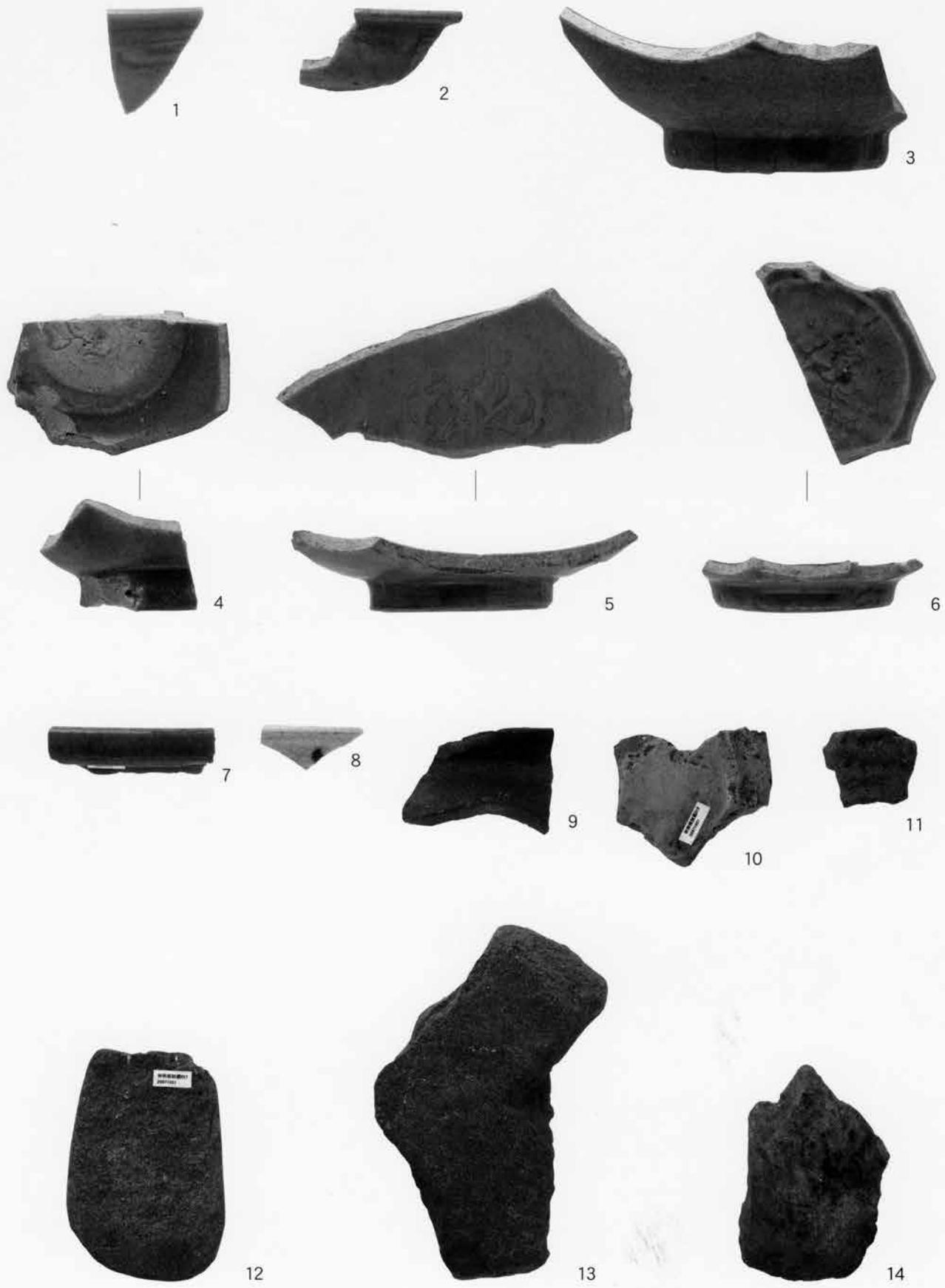


写真46 仲宗根貝塚出土遺物

参考文献

- 『仲宗根貝塚 第一・第二次発掘調査概報』 沖縄県教育委員会（文化課） 1980年
- 多和田真淳 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」 『文化財要覧』 1956年 琉球政府文化財保護委員会（沖縄県教育委員会監修
『沖縄文化財調査報告（1956—1962年）』 1978年 那覇出版社）
- 『ぐすぐ グスク分布調査報告（I）—沖縄本島及び周辺離島—』 沖縄県教育委員会 1983年
- 『沖縄市史 第四巻 自然・地理・考古編—地理・考古編—』 沖縄市役所 2008年
- 『沖縄市の遺跡 —第2次分布調査報告書—』 沖縄市教育委員会 2002年
- 『馬上原遺跡 —室川貝塚崖上地区— 沖縄市総合庁舎建設に伴う馬上原遺跡記録保存発掘調査の報告書』 沖縄市教育委員会
2000年
- 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重 編『琉球國由来記』 名取書店 1940年（1988年 風土記社発行）
- 小山正忠・竹原秀雄 『新版 標準土色帖』 日本色研事業株式会社 2005年
- 『土地分類基本調査 沖縄本島中南部地域 「那覇」「沖縄市南部」「糸満」「久高島」 5万分の1』 沖縄県 1983年
- 『土地分類基本調査 沖縄本島中北部 「金武」「沖縄市北部」 5万分の1』 沖縄県 1992年
- 『屋取集落に生きる —池原上田原・仕明座原遺跡発掘調査報告書—』 沖縄市教育委員会 2008年

おわりに

本報告書の中心をなすのはⅡ章の基地内文化財分布調査報告である。

基地は、これまでその内部の埋蔵文化財の分布を十分に把握できておらず、米軍や関連機関から、基地内で開発が計画されて連絡を受けてから、緊急的に対応せざるを得ない状況があった。これを少しでも改善し、基地内の文化財を保護していくためには、地域内の埋蔵文化財の所在や現状を可能な限り把握しておく必要があり、文化財分布調査を行なうことになった。

近年、沖縄県では、近世・近代の遺構も発掘調査が行なわれており、基地内に残る沖縄戦以前の生活跡も、状況によってその対象となりうる。そのため、今回の調査では、中世以前の遺跡のみならず、墓や屋敷跡、石橋といった近世や近代の建築物も含めて、調査を行なった。

調査対象となった地域は嘉手納飛行場、嘉手納弾薬庫地区である。嘉手納飛行場内には、開発を免れて残っている谷、丘陵があり、そのような場所を中心に墓、壕、石橋などの遺構が多数確認された。その多くは近世・近代のものであるが、先史時代の遺物散布地も1地点、確認されている。

嘉手納弾薬庫地区は、立ち入りの制限が非常に厳しく、地区全域にわたる現地踏査は実現していない。しかし、弾薬庫地区はその性格上、開発の手が入っていない場所が多く、良好な状態で文化財が残存している可能性が高い。一方、嘉手納飛行場も、作業時間の制約によって踏査できなかつた谷や丘陵地がまだ残っており、このような場所に本報告書に掲載していない文化財がまだ眠っている可能性が大いにある。両地域で、文化財の現状把握をさらに継続して行なう必要があると考えている。

聞き取り調査では、文化財にまつわる情報に加え、沖縄戦以前のこの地域の暮らしについてさまざまなことを話者から教えていただいた。話者の方々は、基地内にあった集落の姿を記憶する最後の世代であり、若くても70代後半、高齢の方では90歳を超える年齢となっている。このような方々から教えていただいた情報は貴重なものであり、また、集落の地誌や歴史は、現地踏査で把握された文化財にとっても重要な情報である。こうした理由から、本報告書では、集落の生活や地理、景観についてわかったことをまとめ、掲載した。なお、今回調査した集落は5つあるが、嘉手納飛行場と嘉手納弾薬庫地区にはさらに多数の集落が存在しており、これらの集落の生活誌調査については、今後も継続して取りかかるべき課題として残っている。

Ⅲ章では、平成17～19年度の試掘調査報告を行ない、1件では遺跡の広がりが確認されたことを報告している。このような調査の積み重ねがあって、地域の文化財保護が果たせると考えている。

最後になったが、今回の報告書には、多くの方々の協力があった。話者、おもな協力者の氏名についてはp10に記載した。また、お名前を挙げた方以外にも、さまざまな方の御指導や御助力のもとに、本報告書の刊行にたどりつくことができた。ご協力いただいたすべての方に、心から御礼申し上げたい。

沖縄市基地内文化財

—基地内文化財調査および市内遺跡試掘調査報告—

沖縄市文化財調査報告書第37集

2010（平成22）年3月26日発行

発 行 沖縄市教育委員会

編 集 沖縄市立郷土博物館

〒904-0031 沖縄県沖縄市上地2-19-6

TEL(098)932-6882

印 刷 丸正印刷株式会社

〒903-0211 沖縄県西原町字小那覇1215

TEL(098)835-8181



Cultural Heritages on Base

表紙写真：上から
御殿敷の土帝君の鳥居
クビチリジーの頂上
大工廻ウブガー付近